

(二) 讚彌陀偈の文(註)

(イ) 原文は七言の偈、『本願寺本』は二句一行に書す。

細釋) 引文の中、經文は上に竟りて二に師釋なり。師釋の中三有り、一に雁門、二に終南、三に横川なり、三祖を引き給ふの意は、初は行信二法を明して、中に於て信を要となし、次は三心即一の義相を明し、後は大信の利益を明す。今は其初なり、雁門に二文有る中、初文は稱名一行に如實不如實の異なることを顯し、而して如實修行は正に一心に在ることを示す、一心はこれ一宗の極要にして、乃ち『論註』一部の要處たるものなり。註文の中、先づ稱彼等とは論文を牒す、論文四句有り。初句は行を擧げ、後は行の意を辨す。註釋は三節となる、文の如く知るべし。第三節の中、先づ牒し、後に釋す。釋の中二有り。初めは名義を釋し、後に然有稱名等の下は如實を釋す。後の中亦二有り、先づ非を揀び、後に與此相違等の下は是を顯はす、非を揀ぶ中、先づ標し、何者の下は由を辨す。辨由の中先づ標し、云何已下は釋なり。釋の中先づ徵し、謂不知已下は正しく釋す。正しく釋する中二有り。初めは境に約し、又有三已下は心に約す。境に約する中、實相身、爲物身とは『六要鈔』三本(註)に二義を以つて釋す、圖示せば左の如し。

前義
一 實相身——理——法性法身
二 爲物身——事——方便法身

後義
一 實相身——光明——約義——自利
二 爲物身——名號——約名——利他
事

斯く二義有る中、何れが鸞師の意を得たるや検討の要有り、乃ち今註文の中より實相なる文字の用語例を摘出せば左の如し。

- 一、眞實智慧者實相智慧也。實相無相故眞智無知也(註下_{二五})
- 二、廣中二十九句略中一句、莫非實相也(註下_{二七})
- 三、十念者依善知識方便安慰聞實相法(註上_{三三})

この中、第一文は實相を理に約し、第二文は事理に通じ、第三文は虛實相對して名號を實相法と稱したるものなればこれ事に約するの釋なり、故に如上の用語例より判ずれば鸞師は、實相なる文字を事理の兩方に約して使用されたることを知るを得るなり、然らば、今、實相、爲物の二身と並べられたる上の實相身とは如何なる意義に使用されたるか。蓋しこれ讚嘆門下の釋にして所信の法體を擧げ給へるものなり。其の能信の機は八番問答中に出づる極惡の劣機なれば、若しこの實相身を理とせば、理事不二を知ると云ふことになる、斯の如きは下劣の機に堪ふる能はざるところなれば、鸞師の意は實相身を事に約して用ひたまへること明かなりと云はざるべからず、故に『六要』に二義を擧ぐる中、後義を好しとす。今謂く、實相は是れ正覺の果體にして自利

なり、爲物は即ち衆生の往生にして利他なり、往生を全うして正覺を成じ、正覺の全體即ちこれ往生なり。故に是といふ、是の字は當體相即を顯はし、身に二あるに非ず。知とは信知を謂ふ。正覺の全體即ち我往生と領知するを二身相即を知ると名く、この知の相を細説するもの即ち下の三心なり、又有三種等とは心に約す、三信は即ち是れ名號所有の義にして此と相違するを與名義不相應といふ。一者信心不淳とはこの下の字註につきては校異を參看せよ。常倫反又音純也とは字音を示す、又厚朴也とは字義を示す、朴字音也とは『本願寺本』には朴字音ト也とあり。これ朴の字音を示すなり。今厚の訓に約せば字彙に厚は薄に對するの稱といふ。例へば薄雲の如し、次の若存若亡とは不淳の意を示す、和讃の左訓は豎に約して存亡不定を顯はし、今の助聲は横に約して有るが如く無きが如しといふ、是れ薄の貌なり、信心の淺薄を云ふ。『要集』に引きて信心不深に作るもの、蓋しこの意なり。次に朴の訓に約せば、淳に質也朴也の訓有り。朴とは修飾せざることにして太古の淳朴なるが如く、自力の造作を用ひざるをいふ。已上の二義は心體に約するなり。

次に二者信心不平等とは心相に約す、即ち不一とは心の一境に住して移轉せざるの反を云ふ、無決定とは一佛に於て決定せざるをいふ、三者信心不相續等とはこれ用に約す。餘念若し間雜すれば相續を得ず、故に餘念間故を以つて不相續の意を顯すなり。

己上の三心を一心の異稱とすると、本願の三心とすると古來二義有り、本願の三心に配當する説に於ては、欲生は直に相續心と其義類せずと雖、相續の心相は欲生を主となす。即ち作得生想流れて盡壽に至る、故に相續心を以つて欲生に合するなり。二義有る中、前義を好しとなす。後義の非なること粗、『摘解』に評するが如し。即ち文に云く「舊に二解あり、一は次での如く本願の三心に配し、二は三皆信樂の義と爲す。私に謂く、後の義佳なり。何となれば本願の三には約佛の義あり、今は不如實に對して立つる所の如實の能信の名なるが故に、約佛の釋と作すべからず(是一)」。『要集』下末(廿一)に淳心に換ふるに深心を以てす(是二)。欲生は是れ往生決定の想なり。何ぞ但に相續心のみならん(是三)。高祖數、此釋を讚揚す。此れ機受を詳にするに由る、若し本願の三に異ならざれば別の功なし、何ぞ特に鸞、綽の發揮する所と爲さん(是四)。『信』末(二)『略書』(廿五)は淳、一、相續を以つて一心一念の異目と爲す(是五)。未だ至欲の二心を以つて不如實を揀ぶを見ず、二心は彼にも亦之あるが故に(是六)」と、知るべし。或人はこの淳、一、相續の三心を墨線の喩を以つて説明せり。即ち謂く、白紙に黒線を畫き、其の線の一にして二ならざるはこれ一心、墨色の濃にして淡ならざるはこれ淳心、墨線の相續して絶えざるはこれ相續心なりと云へり。蓋し巧喩と謂ふべきなり。

與此相違已下は是を顯はす。此とは『對問記』は上の二不知三不信を指すと云ひ。『摘解』は文の當

相としては次上の三不信を指すとす。今謂く當釋は三不信を指すなるも義として二不知をも含むこと否すべからず、故に此とは二不知三不信を指すと云ふべし、是故等とは宗祖此文を引くに二意あり、一に本願の三に望め、二に稱名に望む、今の意は正しく後に在りと謂ふべし。

次に『讚彌陀偈』の文は、本願成就文の意を叙述して、一心の義相を顯はす、引きて以つて上所明の論主の一心は即ち是れ本願成就の聞名信喜の一念なることを示す。下に至つて合三爲一を料簡する其意已に此處に見ゆ。初二句は聞信の相、次の二句は即生の益。乃暨一念とは初發極促をいふ。至心者廻向とは若し本偈に依れば、初三字は上に合して聞信の人を指す、後の二字は下に合して回願の意を示す。廻向願生とは作得生想をいふ、意の謂く、多念相續に及ばずとも、下一念に至る、至心なる人、佛の願力に乗じて得生の想を作すもの、必ず往生を得との原意なり、今「至心の者廻向し給へり」と助聲して他力廻向を顯はすものは宗義に約するが故なり。

唯除等とは機の分齊を顯はす、唯除逆謗を以て歸禮の所由に屬し給ふものは、攝機の周きを顯はさんがための故なり。『銘文』(三十一)に云く「唯除五逆誹謗正法トイフハ、唯除ハタ、ノソクトイフコトハナリ、五逆ノツミヒトヲキラヒ謗法ノオモキトカラシラセントナリ、コノフタツノツミノオモキコトヲシメシテ、十方一切ノ衆生ミナモレス往生スヘシトシラセントナリ」と、知るべし。

終南引意

〔本文〕 光明寺觀經義云言如意者有二種 乃至其有得聞彼彌陀佛名號歡喜至一心皆當得生彼抄。

〔校異〕 (一) 一定善義(野)の文

(イ) 如意の如の下、『寛永本』更に如の字あるもの過剰なり。(ロ) 二如の二の下、原文者の字有り。(ハ) 各益の益、『寛永本』之を脱す。

(二) 序分義(三十一)の文

(イ) 五苦の下、原文は八苦の字有り。

(三) 散善義(二)の文

(イ) この下の點聲原文の讀點と相違する所多し、詳しくは細釋を須て、(ロ) 苦勵の苦、『寛文本』若に作るもの形誤。(ハ) 衆名の衆、『寛永本』は還に作る。(二) 由彼の由の下の子註、『本願寺本』『報恩寺本』は格上にあり。『高田本』は字註なし、『澁谷本』には有り。(ホ) 無疑無慮の慮、『明曆本』に盧に作るもの形誤。(ヘ) 遣捨の遣、『明曆本』に遺に作るもの形誤。(ト) 又廻向發願生者の生の上に疏文願の字有り。(チ) 得生想の想、『明曆』『寛文』二本は相に作る。(リ) 異學の學、『寛永前本』は覺に作

るもの形誤。(ヌ)有解行の有、『寛永前本』は不に作るもの形誤。(ル)導不得往生の導、『寛永本』は道に作る、(オ)破戒破見、『寛文本』は破見戒見に作る。(ワ)即目可見の即、『寛永前本』は耶に作る。(カ)千差の千、『寛文本』は手に作るもの形誤。(ヨ)佛法不思議の法、『寛永本』は之を脱す。(タ)爲此の爲の下の字註、『本願寺本』、『報恩寺本』は格上に書し、『高田本』には字註なく、『澁谷本』には有り。(タ)籍有の籍、疏文は藉に作る。(レ)忽然の忽、『明曆』、『寛文』二本は忽に作るもの形誤。(ツ)有二河の有の上
に疏文は見の字あり、『本願寺本』は格上に之を補ふ。(ツ)在南の在、『明曆本』は有に作るもの形誤
(ネ)四五寸許の許、寛文本計に作るもの形誤。(ナ)欲殺此人等の此人、諸本は上に屬して讀む、『高
田』、『澁谷』二本は此人を下に屬して「此ノ人死ヲ怖レテ」等と讀ましむ。(ラ)極是狭少の狭、『寛永』
『正保』二本は狹に作るもの形誤。(ム)念念無遺の遺、『寛永前本』は遺に作るもの形誤。

(四)般舟讚(二)の文 校異なし

(五)禮讚(三)の文

(イ)勘編入の勘、『高田』、『澁谷』二本は勅に作り、上に屬す。(ロ)云云、『寛永』、『正保』二本は二行に細書す。(ハ)十聲聞等、『本願寺本』、『報恩寺本』、『高田本』等は今の如し、『澁谷本』は十聲一聲聞等に作り、一聲に劃註を附す、『正保』、『明曆』二本は十聲一聲等に作り、『寛文本』は十聲一聲聞等に作る(二)其有等の文、『本願寺本』は二句一行に書す。(ホ)至一心の心、『禮讚』は念に作る、『懺儀』は今の

如し。

〔細釋〕 二に終南を引く。五文を出す中、義を以つて攝すれば二となる、一に三心の義相を明し、二に又云敬白等の下は一心の義相を明す、初の中亦二と成る、一に先づ本佛の攝化を明し、二に又云從何の下は正しく三心の義相を明す、初の中亦二、一に正しく本佛の攝化を明し、二に更に所化の機相を明す、『定善義』如意の釋を引くものは其の初めたり、この文の引意は、濁惡不善の機が能く三心を發起することを得るは全く本佛の攝化に由ることを示す、中に於て如衆生意等とは『樹心録』には如衆生意とは隨他意方便なり、如彌陀意とは隨自意眞實なりとし、『述聞』には釋尊の契機、契法を云ふとなす、『對問記』は『樹心』に従ふ、今も亦之れと同す。三輪開悟等とは光明はこれ身輪、名號はこれ口輪、佛智はこれ意輪なり。或は見光、或は聞名、能く佛心を領す、皆これ本佛自在の開化のみ、各益不同とは、能益に三輪の不同あるを言ふ。所益の機類淺深不同有るを云ふに非ず、六通とは『六要鈔』三本(七)に云く「言六通者俱舍論第二十七云、一神境智證通、二天眼智證通、三天眼智證通、四他心智證通、五宿住隨念智證通、六漏盡智證通、雖六通中、第六唯聖、然其前五異生亦得依總相說亦共異生」と。

第二は『序分義』の文なり。即ち『序分義』滅後衆生の釋を引く意は、五道流轉の凡夫を所化の機となすことを示す、斯機豈に眞實淨信あらんや、斯機にして能く三心を發す、全くこれ本佛の致

す所なり、故に今能所相望して豫め三心發起の本を示す、『六要』三本(七)に「問今引此文有何由耶。答上來引文所明皆是如來濟度利生方便、如實相應眞實信心。其所被機是爲罪惡生死凡夫煩惱賊害之衆生故、爲顯五濁五苦八苦逼惱有情專爲其機故引之也」とあるもの粗、今の意と同じ、『樹心録』は本文を以つて獲信の益を證すとなし、不受此苦等を釋して「念佛行人は當生に此苦を受けざるが故に、現生に凡數の攝に非ざるが故に」と云へるもの非なり。今の取らざる所と知るべし。

第三は『散善義』の文なり。この文は二に正しく三心の義相を明す、中に三有り、一に分科二に經云一者の下は釋義、三に三心既具(并註)の下は結成なり。一段の意を云はゞ、『觀經』の三心を以つて之れを『大經』の三信に合し、終南の『觀經』三心の釋に依つて、今明す所の本願の三信を顯はさんとするものなり、『和語燈』三(并註)に云く「此文ニ至心ト云ハ、『觀經』ニ明ス所ノ、三心ノ中ノ、至誠心ニ當レリ、信樂ト云ハ深心ニ當レリ、欲生我國ハ回向發願心ニ當レリ」と。然るに二經の三心一異同じからず、『化卷』本(并註)に云云せり、見るべし。『觀經』に既に隱顯有りて、要弘を兼含す、故に疏釋亦二途に通ず、或は要門に約して釋するあり、或は弘願に約して釋するあり、或は二者に通ずるものあり、高祖深く其意に達して之れを兩卷を分引して其眞假の際を辨じ人をして復た惑ひなからしむ。『選擇集』三心章(上門)に云く「此三心者總而言之通諸行法、別而言之

者在往生行」と。今は『觀經』の隱意によりて『大經』の三心の義意を顯示するなり、又云從何等と一に分科を明す、中に於て辨定三心等とは、辨定とは辨別、楷定の義にして、必生彼國の正因を辨別し、三心の外餘因なきことを楷定す、故に辨定三心以爲正因と云ふなり。即有其二等とは子科なり。隨機顯益等とは若有衆生彼國者と言ひ、定散惡機の類を指定して其の機類に隨つて發三種心即便往生と説きて益を顯はすが故に隨機顯益といふ。然るに但だ發三種心と説くのみにては其意知り難し、故に意密難知と云ふ、蓋し佛の密意弘深にして、三賢十聖も測窺する所に非ず、況や凡夫をや、是故に佛自ら問ひ、自ら徴して何等爲三と言ふ、故に知ぬ、三心正因は唯佛のみ能く開示する所にして餘人は解を得るに由なきなり。自問自徴とは『略讚』に云く「諸註の意は徴は亦問なりと云ひ、又云く自問自答なりとなす、皆未だ充らず。今謂く、徴は召なり、召呼なり、又徴起なり、謂く此問は三心の數を呼出して、三心の答を徴起するの意有り、故に自問自徴と云ふなり」と。蓋し佳し。二明如來等の中、還とは亦なり。問既に是れ如來の自問にして答亦如來の自答なり。故に如來還自答と云ふなり。

次に經云一等とは二に釋義なり。中に自ら三有り、一に至誠心、二に深心、三に廻向發願心なり。初の中亦三、先づ牒し、二に釋、三に結なり。初め牒の中、經云とは至要を標す。凡そ『四帖疏』中みな經文を釋すれ共、經云の二字を置くはたゞ二箇所のみ、即ち今と『玄義分』(三)の釋

名門となり、釋名門は一部の題目を總標するが故に重し、故に經言と云ふ。今は行者趣人の眼目なれば經云とのたまふなり、『六要』三本(+)に問答を設けて云く「經云一者至誠心者是牒經文。問依文三卷一一釋經何限此文置此言耶。答所言三心一經眼目出離要道故舉佛言勸信順也」と。知るべし、一者とは『一滯錄』の本願の上と『觀經』の上とを對比して云く「今私に案するに、本願の文に至心信樂欲生我國と説きて一者等の言なきものは法の自然に約す。又『觀經』に一者等と説くは機の修相に約す。本願に望むれば機即法なるゆゑに一者、二者、三者と説くもなほこれ無次第の次第なり、故に『略書』には『觀經』の一者、二者、三者を大經の三信につけ給ふ、又『觀經』一分方便を帶ぶるかたに約して云へば一者、二者等と自ら次第分る、定散諸機各別の三心ゆゑに必ず一者等の言を加ふべきなり」と。蓋し好し。至者眞等とは二に解釋なり。中に二有り。一に先づ字訓を擧げ、後に欲明の下は法義を辨するなり。字訓を擧ぐる中に就き『六要』三本(+)に釋して云く「至者等者是字釋也。至字眞訓管見未覃。但如此例聖典多之。況大權釋仰可信之。如天台者以專訓至是又未知各有據歟」と。香月院の『講義』に字訓の所據を究明せり、參照せよ。次に法義を辨する中二有り、一に説意を標し、二に不得の下は正辨なり。初に欲明等とは佛意を示すが故に。この下の訓點は高祖獨特の用法なれども、疏文に斯の如く讀み得べき根據なかるべからず。蓋し須の字、作の字の助聲の根據は二種深信及び二河譬の釋意に依り給ふこと明けし、乃ち

自他二方に約し、實と不實とを分ち、行者をして去就せしめんが故なり。解行とは『頂戴錄』に云く「解は謂く意業の作願、觀察、廻向なり、行とは身口二業の禮讚二門なり、斯れ乃ち至心より流出する故に」と。『略讚』に云く「如來因中所修の願行を名けて解行と爲す、故に名號を體と爲す。下の一心專念にして、即ち他力の安心起行なり」と、『摘解』は『頂戴錄』の義に従ひ、更に云く「上に身口意業所修と云ふが故に、是れ相續行に就いて信心を顯す、相續行は悉く信を離れず、信より發起するの行なるが故なり」と。今謂く、『摘解』の説從ふべきか、更に考ふべし。不得等とは正しく義相を辨ず、中に二有り、一に直に眞實を顯し、二に又眞實有二種の下は二種を分別す。初の中亦二。一に自力分を絶つことを示し、二には所施の下は他力に由りて成ずることを示す。初の自力絶分の中二、一に自力性非を示し、二に若作の下は志願不成を示す、性非の中三有り、一に自力の行を誡む。此中不得とは正しく誡め、内懷虛假の四字は其由を示す、二に貪瞋邪僞等は機の本分を示す。この一段の字釋は『敬信記』を見よ、三に雖起等の下は行の不實を決す、若作如此等とは志願不成を示す、中に二有り、一に正明、二に何以故等の下は示由なり。初に正明の中初に上を承けて畢竟不實を示し、後に欲回の下は正しく不實は生因に非ざることを決す。日夜等につきて『略讚』に説有り、即ち云く「日夜十二時とは經の具此功德、一日乃至七日の文意を述ぶ、急走急作等とは經の此人精進勇猛故の文意を述ぶ、若し自力解行を須ひる者は縱

使ひ上々品の如く精進するも衆て雜毒の善と名く、況や身既に下輩に在りて、外に上輩相を現する者をや、上は下輩に就きて撥し今は上品に寄せて撥す。而して一切衆生(九品生類)をして正しく如來の眞實に由らしむるもの則ち是れ欲明の素懷なり」と。蓋し從ふべし。何以故とは示由なり。示由とは文當面の意は、彼土は眞實所成なるが故に不實の者は不生なりといふ示由にして、それと同時に眞實の者能く生ずることを得るの義を反顯するなり、爾れば不實の惡機は自力分を絶ち、唯佛力を信じ、其の眞實を須ふべきのみ、と云ふの意一段の中に溢ふるゝを覺ゆ。次に行者眞實を成ずるの方法如何といふに、子註の四訓實に此方法を示さるゝなり、謂く、如來の眞實を行するが故に、如來の眞實に經從するが故に。如來の眞實を用ふるが故なり。この訓は『廣韻』博雅『論語』等に據り給ふ。『行卷』(二行)にもこの子註あり、往見せよ。『對問記』にこの一段を釋して云く「此句に向上向下の意を具す。上に向へば即ち能く佛土を成ずる因行を明し、雜毒不生の由を成ず。下に向へば則ち回施衆生の因行を擧げて功德成就の本を顯す、彼の佛行を全うじて衆生の行を成ず、衆生往生して彼の果海に入る、是れを利他眞實と爲す。讚に云く、願力成就ノ報土ニハ、自力ノ心行イタラネハ(是向上意)大小聖人ミナナカラ、如來ノ弘誓ニ乘スナリ(是向下意)。而して今文の當位は、向上の義を主とするなり」と。蓋し佳し。凡所施爲趣求等とは『六要』三本(并三)に釋して云く「施爲趣求配當二利。施爲利他、趣求自利是常義也。今有文點施爲名目不依用之、凡所施者

是如來施、佛是能施爲、趣求者是約行者佛道趣求。是則對佛衆生所施。是以如來施與之行、卽爲衆生趣求之行。能所雖異俱是如來利他行故謂之眞實」と。今謂く、此下は他力に依つて成すべきを示す。施爲趣求を解するに或は行願を以つてし、或は下化上求を以つてす。並にこれ佛の自行に約して釋す、かくの如くは則ち徵問を釋するを得ず、疏文の意に非ず。今、宗意は、施は謂く如來の廻施、趣求は謂く、行者の趣入所求なり。所求とは彼の淨土を指し、趣入とは往生を云ふ、共に行者に約するなり。亦皆眞實とは、佛の眞實を全うじて行者に回施す。故に彼此體一にして、殊異無し。故に亦皆眞實なりと云ふ。

又眞實有二種等とは、分別して示す中、標と釋と有り、利他の目は『論註』に承け、上の所明に名く。即ち他力を云ふなり。自利は之に反す、二種を分つも、意は利他に在り、即ち、『觀經』に要弘二意を含む、今は其の顯說要門を釋して揀んで、弘願眞實を示すものなり、自利を明すの文、今は没して『化文類』に出す、存没の意知るべし。『六要』三本(并三)に「問標有二種不釋利他眞實云何。答學者雖存種種之義且依當流一義意者上來所言所施眞實趣求眞實今所標之利他眞實故別不解」と云へり、考ふべし。問て云く、自利々他の言は自行化他の異稱なるに似たり。以つて二方の異稱となす、何の見る所かある。答へて云く、『摘解』に『對問』の義を評して、「珠曰く、次下に聖道豎出の自利眞實を明す中に、自他諸惡及び自他凡聖等善と云ふは、當に自行化他なる

べし、而も之を合して自利となす、何ぞ彼に同じからんやと、今謂く、佳なり、況んや若し自行化他の義なれば、宜しく第三心の下に於て之を明すべし、彼は還相廻向を明す如くなるが故に、然るに下の二心に絶えて自他の名及び其義なし、何ぞ但至心のみ之を談するや。自他二方の釋は三心に通じて之れ有り。其名は初を以つて後に例するが故に」と云へり。蓋し佳し。不善三業等とは釋の中二有り。一に別して自利を釋し、二に利他に結歸することを明す、別釋自利眞實の文は今の乃至する所にして、不善等の文は結歸利他眞實の文なり。此れは前に明す自利を承けて、以つて利他眞實に結歸す、故に言は自利に同うして意は利他に在り、文の意は善と不善と皆眞實心中の修捨を須ふべき事を明す。不簡内外等とは衆機異なりと雖も眞實は則ち同じと云ふの意なり。以つて、前の說意の一切衆生等に應ずるなり。内外明闇につきては下に追釋するが如し。

二者深心等とは二に深心を釋す。中に三有り、一に牒、二に釋、三に結なり。釋の中亦二有り、一に略釋、二に亦有の下の廣釋なり。初に略釋を云はば、言深心者即是深信之心也とは本願に照して此釋をなす、『禮讚』(二)に眞實信心と云ふ、成就文に依り給ふこと其意見るべし。『對問記』に云く「問ふ、深心と云ふは是れ心の深きを謂ふに似たり、何ぞ深く信するの心と爲すや。答ふ、至誠心とは心の誠なるを謂ふ、今此深心若し心の深きことなれば、上の心と但に名言の異にして義に於て別なし」と。『摘解』にこの義を評せり。披きて見るべし。亦有二種等とは廣釋なり、文

に七節有り、分科及び解釋に就きて先輩の説一準ならず。今謂く大分して二と爲す、一に正しく信相を釋し、二に更に上義を釋す(第五)。(巳下)初の中亦二、云く信機と信法と。信法の中二、一に正明、二に證誠(第三)なり。證誠といふは釋迦も諸佛も意全く彌陀と同じことを示すが故なり。此中自ら要門義を含む。『化文類』に引くが如し、更に上義を釋する中亦二、一に唯だ深信を勧め、二に立信の方法を明す(七)。(第七)唯だ深信を勧むる中二、一に唯信佛語を勧め(五)。(第五)二に得失を辨じて勸誡す(第六)。(第六)立信の方法を明す中二、一に就人立信、二に就行立信なり、文の如く見るべし。

亦有二種とは前の又眞實有二種といふ意に應ず、而して所顯の義別なり。彼は並に是非を擧げて去就せしむ。今は二種は必ず相具すべきことを顯はす。此に於て二種深信の義盡く、乃ち二種一具の義自ら顯はる、以つて第三已下、一二の言無きに對す。此義『禮讚』(三)に「二者深心即是眞實信心。信知自身是具足煩惱凡夫善根薄少流轉三界不出火宅。今信知彌陀本弘誓願及稱名號下至十聲一聲等定得往生乃至一念無有疑心故名深心」とあるに照すに愈々明瞭なり、初めは是れ自力を捨つることを顯はし、後は以つて他力に歸することを示す。餘義は『摘解』に叙ぶるが如し、然るに『二卷鈔』下(五)に此の深心を釋するに別擧と通列の二文有り、初め此の二種のみを別擧せしは弘願に約す。次に通列して七深信有りと宣ふ、此の通列七深信の中に於て眞假を簡び分けて明に其の眞なるものを示し給ふ。其の通列七種の邊にては此の第一の信機を自利の信心

と判す。こは云何と云ふに、蓋しこの信機につき所望不同有り、若し第二の信法と合する時は他力となる。これ前の別擧の意と同す。然るに第三深信、第七深信に合すれば自利の信心となる。七深信と列ねたるは此の義に約す、斯くの如くば第一の信機は自力他力兩通なりやと云ふに、善導の本意は第二と合するに有り。故に正しく有二種と云ふなり、されど宗祖は自力、他力の分際を判じ、眞假を迷失せざらしめんが爲に、信機と云ふも、第二の信法と合する時は他力なれ共、自力心に合し機歎きの信機となれば、自ら自力と墮すべしと知らせ給ふ祖意より自利の信心なりと註せらるゝなり。即ちこれ初の二種一具に叶はぬ失意の機を誡められたるものと謂ふべきなり。

又決定深信釋迦等(第三)とは二經の釋迦、諸佛の讚證を擧げ、本願無疑無慮の義を詳にす。此れを疏文の正意となす、『化卷』本(廿三)に之を引くものは經の顯說によりて釋文を用ふるが故なり。

又深信者仰願等(第五)とは唯信佛語を勸む。唯信佛語とは眞實にして假に非ず、今文を宗祖『化卷』に引用し給はざる理由に就き『摘解』に四由を擧げて説明せり。四由とは云く、一に唯信佛語の言を建立自心に對して之れを見るが故に、二に別して三遣を勸むるが故に、三に眞佛弟子と言ふが故に、四に三佛に隨順するが故にと。蓋し従ふべし。因に云ふ、此れと第七深信と牒文端を改むるものは注意すべし。

又一切行者等(第六)とは得失を對辨するなり、乃ち唯佛語を信する者は得有りて失なきことを示す、上の仰願等の文を承けて又一切等と云ふ。後は勸誡して唯可深信佛語等と云ふ。一段の分科を云へば、第六分ちて二とす、一に正明、二に是故。今時の下は勸誡なり。正明の中三、一に略して佛説了義を明し、二に除佛の下は廣く因人に對して了不を辨じ、三に若佛所の下は總じて因果了不を結す、初の中亦二、一に直明、二に何以の下は示由、示由の中自ら二、一に能説の人につき、二に所説の語に就く。廣辨の中二、一に因人の不了を明し、二に若稱佛の下は佛説了義を示す、初中五有り、一に除佛の下は智行未滿を明し、二に此等の下は測量未決を明し、三に雖有の下は請證決定を明し、四に若稱の下は印可有無を明し、五に不印の下は印不是非を明すなり。高祖は『二卷鈔』下(五)に此の第六信に肩註して「依觀經」と云ひ、二利の判なし、然かも、今典には全文を引ききて、『化文類』には此文を引かず、即ち第六深信を眞實と見給ふ祖意見るべし、蓋し近くは次上の第五深信に照し、遠くは別時意會通章に應ずるが故なり、一段の主旨排他妨難に在ること知るべし。

釋迦指勸等(第七)とは立信の方を明す。此中の乃至は疏文三十七行餘を省略す。中に於て初め二行の文は『化卷』本(廿)要門下に引く、蓋し自心を建立するの言有るに由る、自心を建立するを自力策勵と見給ふ故なり。『二卷鈔』下(五)の意に依つて判ずれば後文應に亦『化卷』所引文中に攝すべし。何となれば、定散二善と云ひ、及修餘善と云ひ、共に佛願の行に非ざるが故に。蓋し今没して引

用せざる所以なり。中に於て二有り、一に能説の人を明し、二に所説の法を明す、初めの中二、一に立理、二に即彌陀經の下は引證なり。立理の中二、一に釋迦指勸、二に即十方の下は諸佛同道なり、引證の中四文有り、前二は是れ釋迦の讚勸にして、後の二は則ち諸佛の讚證なり。同讚、同證の隱顯通局につきて『敬信記』及び『摘解』に説有り、學者宜しく往見せよ、又就此正中等とは所説の法を擧ぐ、この中正雜、助正の義につきては『化卷』に於て詳細に檢討すべきが故に今は之れを略す。念々不捨者につきて『六要鈔』三本(并)に釋して云く「就念々不捨者句有其二義。云此釋行者用心意樂速拋衆事一心可勵稱名義也。一義云凡夫行者此義難得、一食之間猶有其間二期念々爭獲相續、既歸佛願機法一禮能所不二自有不行而行之理故言不捨非機策勵是法德也、依當流意後義爲本」と。『略讚』に此の『六要』の説を評して云く「初めは鎮西義にして後は西山義なり、今家は二義併用し、法徳不捨を本と爲す。初は行者の用心に約し後は法徳に約す、若し但に初義を取れば則ち自力の起行に墮す。若し但に後義を執れば則ち相續を斷じて懈怠に墮するが故に」と。蓋し従ふべし。正定之業に就きては先輩多く(一)正選定の業、(二)正決定の業、(三)正定聚の作業の三義を以つて説明せり。詳しくは常の如し。故名深心とは結なり。

三者廻向發願心等とは第三に廻向發願心を釋す。中に三有り、云く牒、釋、結なり、前二心に准じて知るべし。釋の中、疏に三釋有り、一に要門に約し、二に弘願に約し、三に還相に約す、

須く文を配して知るべし、中に於て第三は類に従つて因中説果されたるもの、前の二釋はこれ往相に屬す。若し黒谷の意によれば第一釋また弘願の意なるべし、今これを省略し給ふものは文の當相に従ひ、自力廻向と見るが故なり。『六要』三本(并)に廻向の名義を釋して、自力廻向の時は、廻因向果の義にして弘願廻向の時は、これ廻思向道の義なりとす。今謂く、この釋は共に行者に約す。然るに今文、宗祖の御助聲に従ふ時は廻向は佛に約して、廻自向他の義となるなり、又廻向發願生者とは此の下の助聲は佛に約す、則ち行者はこれを用ひて往生一定の想をなすの謂なり、此中二有り、初に心相に約し、此心の下は機能を明す。初の中、眞實心とは至誠心にして、廻向願とは欲生なり、共に佛に約す。須とは深心にして、即ちこれ機受なり、次に機能を明す中、此心等とは行者の深心は如來の法を以つて體となす。故に金剛を以つて之を喩へ、一切の異見、異學、別解、別行の人に破壊せられざることを明す、即ち此所明は下の二河譬の本を張るなり。唯是等とは上は決定心體に約し、今は行者の用心に約す、大師の時妨難太だ劇し、苦心勸誡これが爲めのみ、一心投等とは心餘想無く、専ら佛願に投ず、下に念々無遺乘彼願力之道と云ふものこれなり、正直進等とは、餘方を顧みず、直に西方に進む、下の文に不顧水火二河と云ふものこれなり、不得等とは誠門に約して示す、不得の二字流れて往生大益の句に至る。彼人語等とは別解別行異見邪執之人なり、有進退等とは『楷定記』に云く、「有進退とは前の決定を翻す、心生怯弱

とは一心投に翻す、回顧落道とは正直進に翻す」と、蓋し好し。往生等とは果を擧げて因を誡むるなり。

茲に於て三心釋の引意を案するに蓋し二意あり、一に謂く、第一心は信體の眞實なることを顯す、『略書』に『禮讚』の眞實信心の文を引く、これ乃ち『散善義』に字訓を擧ぐる中、自ら其義を存す、故に『禮讚』を引きて助顯するなり。第二心は其の信相を顯す、第三心は深心中の義別を顯す、『散善義』に此心深信由若金剛とあるものこれなり、一心之中攝在至誠廻向二心とあるもの亦斯の謂なり、二に謂く、至心は行に約す、所施趣求の文見るべし、廻願は願に約す、「廻向シ玉ヘル願ヲ須ヒテ」と助聲し給へるもの見るべし、當に知る願行は所廻向の法と爲すことを。須の一字を機受となす、即ち深心を以つて用ひるの相となす、またこれ一心攝二の義なり、下の私釋中の二義應にこゝに於て豫め知るを得べし。

問曰。等とは問答料簡なり。問ふて云く、今此の問答と次上の深心釋中の問答と何の別か有るや。答て云く、古來二說有り、一に云く、上は罪障凡夫の難生を問ひ、別願一切を攝するを答ふ、今は少福難入を問ひ、頓教一乘の義を以つて答ふとなす(傳通六要)。一に云く、上は教に違するの難の故に時、處、機、益の別を以つて答へ、今は理に違するの難の故に佛法不思議を以つて答ふとなす(楷)。斯く二義ある中今家の先輩は多く後義に従ふ。今も亦楷定の説を採る。答の中二、一に立理

遮難、二に又白。一切の下は設譬守信なり、外は難を防ぎ、内は信を守る、二釋相通すべしと雖も、所主は別有り、初は防にして守なり、外を防ぐを主となす。故に通途に約す、後は守にして防なり、内を守るを主と爲す、故に別途に約す。立理遮難の中二、一に正明、二に行者當の下は結勸なり、正明の中亦二、一に立理、二に汝何以の下は遮難なり、立理の中、先づ機教一に非ざることを明す、譬如世間等とは後に教益多門を明す。此の中二、初に先づ近喩を擧ぐ。隨出一門の下は、後に正しく法義を示す。近喩を擧ぐる中二意有り、一に諸教の各益を示し、二に彌陀の妙益を示す、佛法不思議之力とは陰に本願の白道を標す、故に『和讚』に彌陀の弘誓に約して「イツ、ノ不思議ヲトクナカニ、佛法不思議ニシクゾナキ、佛法不思議トイフコトハ、彌陀ノ弘誓ニナツケタリ」と云ひ、又「佛法力ノ不思議ニハ、諸邪業繫サハラネバ、彌陀ノ本弘誓願ヲ、増上縁トナツケタリ」とあるもの見るべし。正しく法義を示す中、隨出等とは『六要鈔』三本(并)に云く、「隨入等是明能治八萬四千解脫門中入其一門即能遂入餘解脫門。謂三毒中若多貪人以無貪善治貪煩惱、然後自然治瞋與癡多瞋多癡又以無瞋無癡善根對治而後又治其餘例以應知」等と。『二卷鈔』(下并)に肩註して「出愚癡門」入智惠海」とあるは蓋しこれ別途の意なり。即ち愚癡門とは是れ疑惑にして、智惠海とはこれ信心なり。爲の六訓につき『述聞』に云く「爲の六訓の中彼は恐く被の誤りか。『増韻』訓じて云く被なりと、作とは爾雅の釋言に云く、作は造爲なりと、相とは或

は助の字の誤りか。『廣韻』に助なりと、定用是の三は未だ何處に據りたるかを知らず、更に檢すべし」と。蓋し従ふべし、而してこの六訓の解釋に至りては諸說區々たり、今二三を擧ぐれば、『敬信記』に云く「爲此とは有縁の教行をもつても云ふ、今の取る所は、念佛の一法をもつてと云ふころなり。定なりとは其の一法に決定して亂動せぬこと。被なりとは念佛の教を蒙ること、作なりとは造作して行すること是なりとはその法によつて出離すること、金口の佛説なれば、如説に修行するに何ぞ是ならざらん、相なりとは助けられて解脱に至ること、六訓の祖意窺ひ難けれども、試に辨せは此の如し」と。又『摘解』には「祖意は蓋し、此とは彌陀願力を指し、定とは決定深信、用とは信用なり、被とは仰蒙釋迦等と云ふに同じ、作とは作得生想なり、是とは是名正定之業卽是了教等といふが如し、助とは増上縁と云ふに同じ」と云へり。今謂く二説共に勉めたりと雖も、共に穩かならざる點有り、更に考ふべし。汝何等とは二に遮難なり、文は知り易し。行者當等とは二に結勸なり、若欲學解等とは、學解上に於ては、釋尊一代八萬四千の法門漸頓權實の諸法、凡より聖に至り、次第階級を経て研究するも敢て差支へなしとの義なり。若欲學行等とは、信仰上より出離の要道を求むるに於ては必ず有縁の法に依らざるべからず。有縁の法とは卽ち『六要』三本并（七）の指南に依れば念佛の法のことなり、念佛の法は機教相應の法なれば功勞を用ふること少くして多く利益を得べきが故にとの文意なり。實に大師、懇切の結勸、豈に感戴せざるべけんや。

又白一切等とは二に設警守信なり、この下の解釋は是山勸學著『二河白道講説』に委細を盡したれば、彼に譲りて此には述べず、讀者宜しく參看せよ。

三心既具等とは三に總結なり、其意三心を辨定し、以つて正因となすの義を示すにあり、此中に二節有り、初に弘願を結し、後に又此三の下は要門の義を結す。初の中に信を以つて願と爲すは信心卽願往生心にして、此願生心は自心の發起に非ず、故に清淨と云ひ、亦願力之道と云ふ、是れ佛の廻願を用ひて得生の想を作すが故なり、乃ち願往生心は卽ち佛の大願心なるが故に必ず行ありて具す、上の至誠心の中に、所謂菩薩の三業所修は悉く之を廻施して、衆生の有と爲すとあるもの見るべし。此釋は別時意門と相應じて彼は所歸の法體、此は能歸の信心にして能所不二、機法一體なるものなり、彼文の歸命とは佛が歸順を命ずるの招喚の音聲にして卽ち願行を具す、此文は第二の深信にして、卽ち至心發願を具す、彼此全く一なるのみ、『六要』三本（七）に今文を釋して「三心已下是總結文、此有二意。一云三心廣巨萬善諸行義也。依之言之若具三心諸行皆成。選擇集云總而言之通諸行法卽其意也。一云今此三心是約念佛、一往雖有通諸行邊、據實論之自力諸行作業難成輒不可云願行既成。又得往生偏是他力念佛之利益也。若約諸行卽不可云若不生者故、今所言具三心者卽成正業必得往益之宗旨也、同次句云別而言之在念

佛行是其義也。問二義之中以何爲正、答依當流意後義爲本」と云へり、この『六要』の義を『摘解』に評して云く「今の行を以つて念佛と爲すは、乃ち三心を獲るものは必ず稱名を具するが故に、願行成就すと爲すが如きも、意は則ち然らず、信行同じく名號にして各々願行を具す、然り而して往因を成ずるは信に在りと雖も行者の願行を領する相狀の見易きに就きて信心を願と爲し、稱名を行と爲す、作得生想は是れ願相の見易き所にして、稱南無阿彌陀佛は是れ行相の見易き所なるが故なり」と。知るべし、後に又此三の下は要門の義を結す、中に於て通攝等とは散善は既に三心を以つて正因と爲す、定善も亦何ぞ然らずして往因を成ずることあらん。是を以つて定散の中間に於て阿難に告げて正因を示すなり。今此文を引き給ふは、上に省略して引かざる文の所由と爲し、人をして速に方便を出で、眞實に入らしめんと欲する祖意に出でたるものなり。『二卷鈔』の尾(下註)に二種の三心を列ねて云々し給ふもの、以つて祖意の所在、何邊に在るやを察知すべきなり。

第四に『般舟讚』の文なり、又云敬白等とは二に一心の義相を明す中二、一に先づ教主の善巧を明し、二に正しく一心の義相を明す。初は『略文類』(并註)に上に引く『定善義』の文と及び今文とを並引して、後に云く「明知緣二尊大悲獲一心佛因」と。今は兩處に分ちて、引き來り、互に相照應して、三心即一心の信心を獲得する本を示し、以つて別序の太首に映するなり。即ち彼文に云

く、「夫以獲得信樂發起自如來選擇願心。開闡真心顯彰從大聖矜哀善巧」と。知るべし、無上信心とは三心即一心の信心なり、此信心を發起することは教主の善巧に由るなり。種々方便とは方便調機終に眞實を顯すなり。『安心決定鈔』上(三)に「衆生往生セスハ佛ニナラシトチカヒタマヒシ法藏比丘ノ十劫ニステニ成佛シタマヘリ。佛體ヨリハ、ステニ成シタマヒタリケル往生ヲツタナク今日マテシラスシテ、ムナシク流轉シケルナリ、カルカユヘニ『般舟讚』ニハ、オホキニスヘ、カラク慚愧スヘシ、釋迦如來ハマコトニコレ慈悲ノ父母ナリトイヘリ、慚愧ノ二字ヲハ、天ニハチ、人ニハットモ釋シ、自ニハチ他ニハットモ釋セリ、ナニコトヲオホキニハツヘシトイフソトイフニ彌陀ハ兆載永劫ノアヒタ無善ノ凡夫ニカハリテ願行ヲハケマシ、釋尊ハ五百塵點劫ノムカシヨリ、八千返マテ世ニイテ、カ、ル不思議ノ誓願ヲワレラニシラセントシタマフヲイマ、テキカサルコトヲハツヘシ」等と云へり、又和讃に「娑婆永劫ノ苦ヲステ、淨土無爲ヲ期スルコト、本師釋迦ノチカラナリ長時ニ慈恩ヲ報スヘシ」と宣へり、悲心の切なる感戴すべきなり。

第五に禮讚の文を引く、中に二有り。一に標舉、二に二者の下は正引なり、初の中亦二、一に懺儀が聖教中に入ること、二に懺儀上卷の下は懺儀の體裁を明す、初の中、『貞元新定釋教目錄』とは西京西明寺沙門圓照の撰述する所にして三十卷有り、第十一云等とは、今この目錄を検するに、其の卷第十一(大正五五⁸⁵²)に傳譯緇素四十六人の名を列舉する中に「沙門釋智昇五部二十五卷經錄懺儀

等」とあり。而して卷廿三(同³⁵⁹)に新編入藏の書を擧ぐる中に「集諸經禮懺儀二卷、大唐西崇福寺沙門釋智昇撰、新編入藏」とあり、今「新編入藏」の四字に代ゆるに「准貞元十五年十月廿三日勅編入云云」の十六字を以つてするものは、集主の意に出づ。蓋し卷第十一(同³⁵²)傳譯經素列名中、「沙門釋智昇」の前二人目に「沙門跋日羅菩提^{四部七卷經又一部十卷經准貞元十五年十月二十二(三)日勅編入}」とあり、而して卷十四、智昇の書を擧ぐる下に准勅編入の記事なきも、其前文に「所譯經法不及得開元目錄、今請准勅編入貞元所定釋教目錄、下皆例此」といへるより推して、智昇所撰の書も亦貞元十五年十月廿三日の勅に准じて編入せられたるものなることを知るなり、跋日羅菩提の細註、二十二日とあるは餘所の例に准ずるに、二十三日の誤りなるべし。

蓋し宗祖、智昇によりて善導の『禮讚』を引くこと本典中四箇所あり、一には『行卷』(三^三)に狹註して智昇法師と云ひ、二には『行卷』(三^三)に智昇師等と云ひ、三には今の處の文、四には『化土卷』本(三^三)に智昇法師禮懺儀等と細註せり、即ち古人の敬重を語つて以つて高德を示し、遺弟の輕侮を誡む。後に正引の中二文あり。初は機受を明す、これ深心なり、後は深心は即ち一心なることを明す、初は安心を明すの文なり。三心章に全文を出す、今は止だ第二心を出し、前後の二心は『化土卷』本(三^三)に引けり、即ちこれに二意有り、一つには權實を分つが故に兩所互に用捨を爲す、これ文相に従ふなり、二には三即一を示す。『和語燈』一(三^三)に云く「三心ハ正ニ分レタリト云ヘド

モ、要ヲ取り詮ヲ簡ヒテ是ヲ云ハバ、深心ニ收メタリ」と、又『唯信鈔』(中外本^一)に云く「信心決定シヌレバ、三心オノヅカラナンナル。本願ヲ信ズルコトマコトナレバ、虛假ノコ、ロナシ。淨土マツコトウタガヒナケレバ、廻向ノオモヒアリ、コノユヘニ三心コトナルニ、ニタレドモ、ミナ信心ニソナワレルナリ」と。『略書』(三^三)に亦云く「一心之中攝在至誠回向之^二心」と。思ふべし、二は一より開くが故に合すれば則ち一、當に知る三即一なることを、かくの如く二意有る中『化身土卷』に望むれば、初を正となし、今の當分に據れば則ち後者を正意と爲す、近く次上の說に望むるが故なり、後に初夜禮(三^三)の文は聞名信喜の一心を引くなり、これ深心は即ち一心なることを示し、以つて三即一の深信なることを愈々明にし給ふなり。猶ほ詳しくは是山勸學著『禮讚前序講録』を見よ。

横川引意

〔本文〕 往生要集云入法界品言乃至又云我亦在彼攝取之中煩惱障眼雖不能見、大悲無倦常照我身已上。

〔校異〕 第一文作願門中の文(上末^三)

(イ)爛壞の爛、の上に原文は不の字有り。『高田』『澁谷』二本は之を補ふ。(ロ)異變、原文は變異に作

る。(ハ)損減、原文は損減に作る。

第二文 觀察門中の文(中本_三)

(イ)無倦の倦、原文は倦に作る。

〔細釋〕 師釋の中、第三に横川を引ききて、以つて大信の利益を明す、中に二文有り、初は作願門中の釋にして、後は觀察門中の釋なり、初はこれ廣例にして後は要例の意に當る。要例は集主本意の存する所、後を以つて前を會せば、即ち菩提心といふものは願力廻向の信樂にして下に云ふ所の横超大菩提心のことなり、引き來つて上の二河譬に映じ、相承の意を示す、謂く大悲常照を了知するは我能護汝の招喚に信順するが故なり、煩惱熾然たる中に在つて、直ちに白道を進んで二別三異の爲に動亂せられざるもの大菩提心に非ずして何ぞや。此は是れ横川大師悟入の妙談にして、特に之を黒谷に傳へんとするものなり、引用の意豈に深からずや。初は機受の信體に約し、後は本佛の照護に約す、内徳殊勝にして外護不斷なり、往益何ぞ虚からんや、初文の中三喻あり、初は諸魔不障、次は不沒生死、後は煩惱不能壞なり、文は知り易し、此の三喻は『舊譯華嚴經』第五十九(大正九七七)に出づ。檢すべし。

結 文

〔本文〕 余者若行若信無有一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就、非

無因他因有也。可知。

〔校異〕 〇非無因等の文は『論註』の上は「無因ト他因ノ有トニハ非ザルナリ」と讀みて無因計と他因計との二者を簡ぶに非ざるが、詳しくは細釋を須て。

〔大意〕 正しく大信を明す中二有り。一に解釋、二に問曰如來等の下は料簡なり、初の中三有り、一に標、二に釋、三に結なり。今は即ち第三の結なり。即ち大信を釋すること上に竟りて茲に結し給ふなり。

〔細釋〕 この一段の造語は『論註』下(三)利行満足章に「若因若果無有一事不能利他」とあるものと、同下(三)淨入願心章に「因淨故果淨、非無因他因有也」とあるとを取合せてなされたるものなり。余者とは、上を承くるの辭なり。近くは今卷の建章に「謹按往相廻向有大信」とあるを承け、遠くは第二卷の首章に「謹按往相廻向有大信」とあるを承く、則ち第二卷已來、専ら行信は皆本願に出で、自力に非ざる旨を明すが故に此に之れを結び給ふなり。若行等とは、『證卷』には即ち合して若因等と云ふ、蓋しこれ總該して證果に對するが故なり、今は法相を分つが故に若行等といふ。行信の議は上に好く辨するが如し。一事とは、行信相望に約すると行信各別に約すると二義有り。初に行信相望とは、若行若信とある故、行にまれ信にまれ、一事として如來廻向に非るなしとの意なり。次に行信各別とは、行に報恩行と談する邊あり、又正定業と談する

邊あり、信にも亦初起あり、後續有り、今は其等の義を引き統べて一事として如來の願心ならざるることなしと宣ふ意なりとなす、斯く二義有る中、初義文に親しきか。阿彌陀如來清淨願心とは阿彌陀如來は果を出し、清淨願心とは因を出す、清淨とは願心を嘆じたる詞なり。廻向とは法體廻向なり、佛より與へ給ふが廻向なり、『一多證文』(三)に「廻向ハ本願ノ名號ヲモテ十方ノ衆生ニアタヘタマフ御ノリナリ」とあり。若行若信、法相しばらく分れたりと雖も、體一名號なり、之を一切衆生に與へ給ふが故に信と成り、行と成りて顯はれもて行くなり、廻向の深旨深く思ふべし。成就とは『論註』下(三)に「願以成力。力以就願、願不徒然力不虛設、力願相符畢竟不差故曰成就」とあり、又『述聞』に云く「成就とは『理趣經』上に云く、成就と言ふは自在任運能現前の義なり、又尅獲圓滿を名けて成就となす」と。以つて知るべし。非無因等とは、之れを釋するに就き異說紛紜たり。『六要』四(三)には「言無因者於五見中是指邪見。他因有者戒禁取也」と云ひ、『樹心錄』には「無因他因とは自然外道の計を無因と爲し、自在天外道の計をば他因と爲す、今是の佛周緣法は四性の執を離るゝが故に非無因他因有と云ふなり」と云へり。『翼解』に云く「三論玄義に云く、云何無因有果なるや。答て云く、復外道有り、萬物を窮推するに由籍する所無し、故に無因と云ひ、而して現に諸法を觀る、當に知る果有りと。其果、これ因の報に非すと爲すを云ふ。云何名けて邪因邪果と爲すと、答て云く外道有りて云く大自在天能く萬物を生ず、萬物若

料簡

し滅すれば本天に歸す、故に自在若し瞋れば四生皆苦しむ、自在若喜べば六道咸樂しむ、今此過を離る故に非有と云ふ。因淨果淨毫も差なし、故に無因と云ふ、復た有因と雖も、自他混じて、無明を智慧の因と爲すが如きに非ず、故に他因に非ず」と。『蹄澗記』に云く「無因とは自然外道の計、他因とは猶し、餘因と言ふが如し願力より言ふ」と。今謂く、既に佛廻向し給ふが故に無因に非ず、餘を以て因と爲す無きが故に他因に非ざるなり、詳しくは『隨聞記』を見よ。

〔分科〕 本文の中二、一に正しく大信を明し、二に夫佛(末)已下は攝取の義を辨ず。初の中二一に解釋、二に問如來(下)已下は料簡なり。解釋上に竟りて今は料簡なり。一段の分科を示せば左の如し。

料簡二

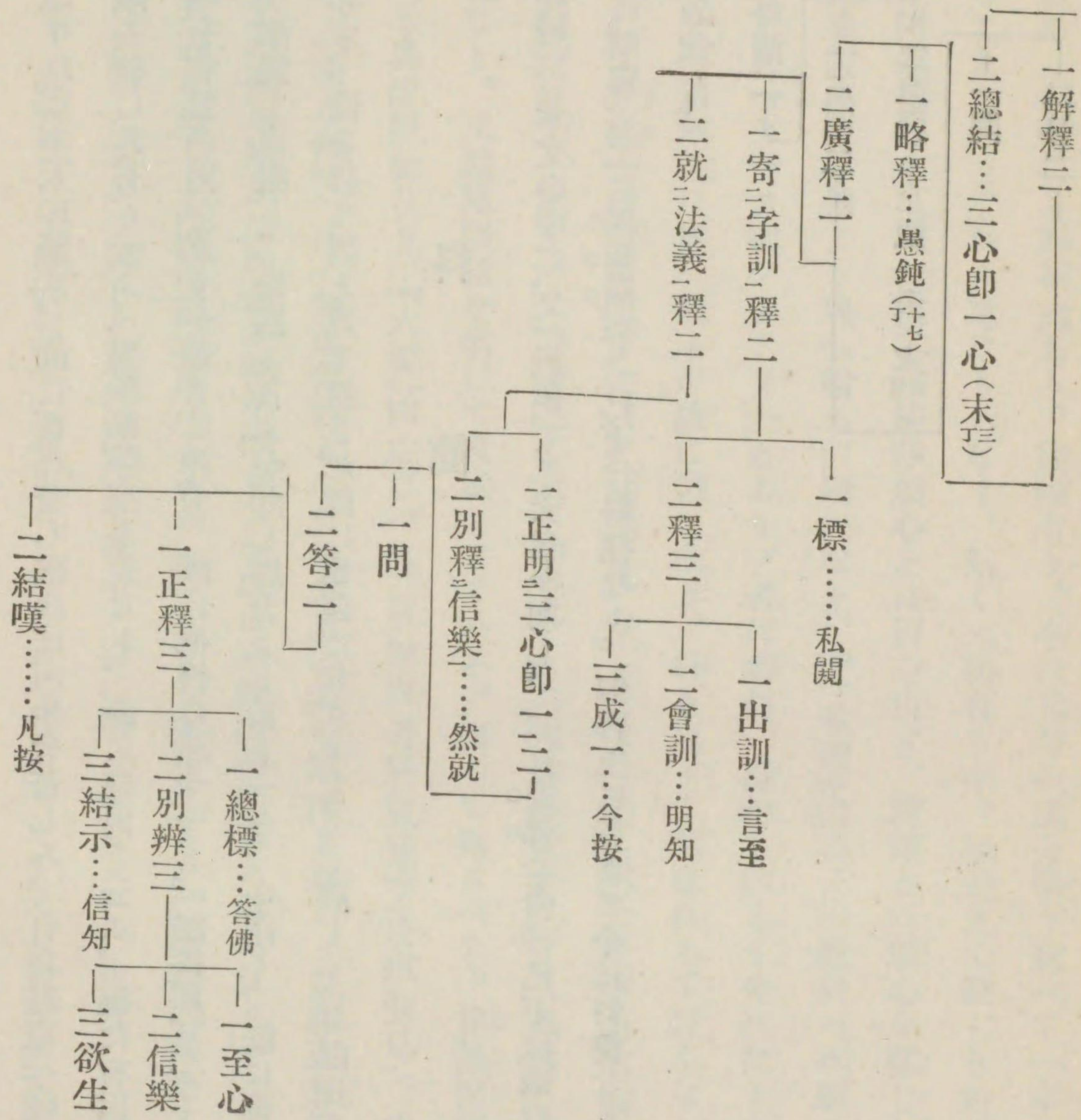
一正明二

二追釋…止觀二云(末)

一問

二答二

信 卷(本)



問

〔本文〕 問如來本願已發至心信樂欲生誓、何以故論主言「一心也」。

〔校異〕 なし。

〔大意〕 料簡の中二、一に正明、二に止觀(末標)已下は追釋なり、初の中亦二、一に問、二に答なり。今は其の初めなり。

〔細釋〕 問とは上に本願三心の文、及び『論註』の建言我一心の文を引くが故に今彼を躡みて問を起す、序に且く疑問を至して遂に明證を出すとは正しく此下の一段を叙するなり、問。『小經』には既に一心不亂と説き、本願成就文には信心歡喜乃至一念と云ふ。今彼を捨て、論文に就くものは何ぞや、答。『小經』は義隱顯に亘るが故に、成就文は一念と有りて一心となし、義疎なるが故に、今は論主の一心を取る、蓋し稟傳の功を尊ぶが爲めなるべし。

略釋

〔本文〕 答愚鈍衆生解了爲令易、彌陀如來雖發三心涅槃眞因唯以信心是故論主合三爲一歟。

〔校異〕 なし。

〔大意〕 答の中二、一に解釋、二に三心即一心（下三）の下は總結なり。初の中亦二、一に略釋、二に私闕の下は廣釋なり、今は其の初めなり。

〔細釋〕 『述聞』に云く、合一の所由に契機、契法の二有りと、これ二因故と爲すなり、然るに、『對問記』は「愚鈍衆生解了爲令易」を合一の所爲となし、「彌陀如來雖發三心、涅槃真因唯以信心」を合一の所由となす、これ一因故となすなり。今謂く『略書』（下二）に「問、念佛往生願已發三心、論主何以故言一心。答愚鈍衆生、覺知爲令易故、論主合三爲一歟」とあるに照合するに、愚鈍の衆生をして解了し易からしめんが爲の故にと云ふ一因故となすを穩當と云ふべし。

蓋し本願の三心は一を開きて三となす。三即一心なり、然るに下機領し難く、或は謂ひて各別の三心となし、之を機上に構造す、論主之を憂ひ、乃ち自督を申べて一心と云ひ、以つて下機をして之に共せしむ、之を合三爲一の因由となす。當に知るべし。三心即一は願海の固有にして合三爲一は論主の動功なることを。

問。論の一心はは無二心の義にして三に對するの一ならざるべし。何ぞ合三爲一と云ふや。答。三一は唯名相に就く、義を言へば本願の三心はこれ無疑の一心なり、論主無疑の一心なり。論主無疑の一心即ち三心宛然たり、何ぞ三一を論せん。故に知る合三爲一とはたゞ名相に於けるの謂なることを。或が論主の一心の、一に、三に對するの義を含むと云ふものは不可なり。問。合三爲

一とは三心を混合して一心となすとやせん。三心中隨つて一を取りて以つて餘の二を攝合すとやせん。答。信樂以つて三心を統ぶ、之を合三爲一の義となす。詳しくは下を俟て、歟とは鈔主の謙辭なり、敢て濫りに聖意を測ることを恐懼し給ふなり。

寄 字 訓 釋

〔本文〕 私闕三心字訓三即合一（標）。其意何者（徵）。言至心者至者即是眞也實也誠也。心者即是種也實也。言信樂者信者即是眞也實也誠也滿也極也成也用也重也審也驗也宣也忠也。樂者即是欲也願也愛也悅也歡也喜也賀也慶也。言欲生者欲者即是願也樂也覺也知也。生者即是成也則羅反則落反藏落也爲也興也出訓。明知至心即是眞實誠種之心故疑蓋無雜也。

信樂即是眞實誠滿之心、極成用重之心。審驗宣忠之心、欲願愛悅之心、歡喜賀慶之心、故疑蓋無雜也。欲生即是願樂覺知之心、成作爲興之心、大悲廻向之心故疑蓋無雜也會訓。今按三心字訓眞實心而虛假無雜正直心而邪僞無雜、眞知疑蓋無間雜故是名信樂。信樂即是一心也、一心即是眞實

信心、是故論主建言「一心也。應知（成一）。

〔校異〕 ①闕、『本願寺本』『報恩寺本』は今の如く、『高田本』『澁谷本』は闕に作る。②忠、『寛永前本』は忘に作るもの形誤。③作の字註。『本願寺本』『報恩寺本』は格上に在り、而して始也の二字は役也の次に在り、『高田本』には字註なく『澁谷本』に有り。『寛永本』には藏落反の三字なく、起の下に也の字なし。『正保』『明曆』『寛文』の三本は役の字を役に作るものは形誤なり。

〔大意〕 廣釋の中二、一に字訓に寄せて釋し、二に又問の下は法義に就きて釋す、今は其の初めなり。

〔細釋〕 この中二、一に私闕等の十字は標にして、二に其意の下は釋なり、釋の中亦二、一に其意何者の四字は微にして、言至心の下は正釋なり。正釋の中三、一に出訓、二に明知の下は會訓三に今按の下は成一なり。

先づ標の中、私とは公の反にして意謙を示す。字訓等とは俗典の淺近の字訓に寄せて、以つて三心即一心の深義を顯はすなり。乃ち凡愚を開導して實義に漸入せしめんが爲なり。三即合一とは下に本願固有の義旨を明し、論主の合一の所由を示し給ふ。次に其意何者とは微なり言至心者已下は正釋の中初に出訓なり。此中の所出に、道訓あり、俗訓あり、又本訓あり、轉訓あり、須く意を得て讀むべし。『六要鈔』三本(下)に云く「初問答者應舉字訓明成三心一心之義字訓未悉

勤得本文、博覽宏才可仰可信」と、今謂く『六要鈔』主博覽達識なり、豈に本據を得ざらんや。而して此言を作すものは蓋し徒に典據に勞して宗義を忘失するを誡められたるものなり、悲心の切豈に感謝せざるべけんや、今試に先輩の指南に依りて本據を検すべし。至心に五訓を出す。至者即是眞也等とは宗家に據る。即ち『散善義』至誠心釋の文なり。文は上に引くが如し。『觀經』の至誠は『大經』本願の至心を説き彰はすなり。蓋し眞は妄の反にして實は虚の反なり。唯是れ眞實即ち之を誠といふ。『増韻』に純なり、無偽なり、眞實なりと云ひ、『中庸』に誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なりと云ふ、『註』に云く、誠とは眞實無妄の謂なりと。次に心者即是種也等とは『玄義分』二乘門下に云く「凡言種者即是其心也」と。種は果に望めて云ふ、果を生じて差はず、故に實を轉訓し以つて其意を顯はす、虚なるものは果を生せざるが故なり。此上は道訓なり、次に信樂の中に廿訓を出す。中に於て信に十二訓、樂に入訓有り、信の十二訓の中初三は本訓にして後九は轉訓なり、本訓とは『爾雅釋詁』に云く、允・孚・宣・展・謀・誠・亮・詢・信なりと。『説文』に云く信は誠なりと見るべし、誠とは眞實の故なり、後の轉訓の中滿也極也とは滿は謂く充滿、極は謂く至極此は實字に従ふなり、實字は『廣韻』に云く滿なり、『増韻』に云く充なりと。即ち虚の對なり、成也用也とは是は誠字に従ふ。成は謂く成就なり。誠は『唐韻』に云く、氏征切と。『集韻』、『韻會』に云く、時征切と。並に音成なり。今は音を取りて訓と爲すなり。用也とは『述聞』に云く

「其の施行すべきに名く、此訓の由る所未だ考へず、按ずるに事業功已に成じて、以つて施行すべきが故に此訓を作す」と。『對問記』には『小輔』『韻會』に信は極なり、用なりとあるを典據となす、考ふべし。重也とは重は謂く重累なり。此は成より來る、『爾雅釋地』に云く、丘一たび成じて敦丘と爲ると。郭璞云く、成は猶し重の如しと、而して今の義は尊貴に通ずべし。審也とは、『玉篇』に云く、誠は審なりと。審は謂く審詳と熟して、物事を熟究するを云ふなり。驗也とは亦實字に従ふ。『字彙』に云く、實は驗なりと、『後漢光武紀』に云く「使各實二千石以下至黃綬」と實とは才能の有無を試みることをいふなり。宣也とは『字典』に『爾雅釋言』を引きて徧なりとあり『釋訓』には通なりと云ふ。これ滿より來るなり。忠也とは『玉篇』に直なりと有り、『增韻』に「内盡其心、而不欺也」とあり、『周禮』の六德に、智・仁・聖・義・忠・和あり、鄭玄の釋に「中心謂忠、中下從心、謂言出千心皆有真實」と。これ誠より來るなり。次に樂に入訓を出す。樂者即是欲也とは欲は『玉篇』『集韻』に出づ。願也とは反復して欲を釋す。『廣雅』に云く、願は欲なりと。已上の三訓は去聲の本訓なり。此下の五訓は轉じて入聲に就く、悅也とは喜より轉出す、樂に喜の訓有るが故に、『字彙』に悅は喜なりと云ひ、『玉篇』に喜は悅なりと有り、歡也とは亦喜より轉ず、『字彙』に歡は喜なりと云ひ、『字典』『說文』に歡は喜樂なりと有り。喜也とは『字彙』に樂は歷各反音洛なり、喜は樂なりと云ひ、『爾雅釋詁』に喜は樂なりと有り、この歡と喜の二字は相似て而も

意別なることは下文(末三)に「言歡喜者、形身心悅豫之良也」と云ひ、『證文』(三)に「歡ハ身ヲヨロコハシムルナリ。喜ハコ、ロニヨロコハシムルナリ」とあるものによりて知るべし。賀也とは、『說文』に云く「以禮物相奉賀也」と。慶也とは又云く行賀の人なりと。『周禮』に云く「以賀慶之禮、親異姓之國」と。知るべし。次に欲生の中、欲に四訓を出し、生に亦四訓を出す、欲の四訓の中、初の二は上に述ぶるが如し、覺也知也の二訓は知は欲の字に縁有り、『唐韻』に知は欲なりとあり、『樂記』に「好惡無節於内、知誘於外」とあり。此知が欲に當る。此知の字に覺の訓有り、『玉篇』には識なり覺なりと云ふ。生者即是成也とは生に四訓を擧ぐ、成也とは或人は、生は生成の義にして、『杜詩』に「燕雀半生成」とあるの意なりと云ひ、或人は同音假借と云へり。二説有る中、後義を好しとなす。作也の下に三反六訓有り、則落反は唐韻には則洛とあり、則羅、藏落は出據未考なり、次の六訓は『字彙』に在り、爲也興也とは作字より轉ず。起と興と字形は異なるも義は則ち相同じ。已上都べて三十三訓を出す。

明知至心等とは二に會訓なり、會訓の中其九句有り。以つて一の義を成す。九句の中、初の八句は正會、後の一句は前を結す、初八句とは、『略書』(廿二)に二十五訓有り、會して七心となす。今は三十三訓有り、會して八心と爲す。具略異なりと雖も、其意即ち一同なり、共に三心即一の義を成するが故に、疑蓋無雜の言見るべし。『略書』は列次を守らず錯綜して義を成す。蓋し字訓

に局執すべからざるを示す。『蹄涔記』に云く、各句以つて心名を立つと。『一滯録』に云く、實心眞心等の謂ひと、今云く、列訓の外此會訓を須ひ、會合して義意を示し給ふ邊より見れば前義取るべし。されど『略書』に成句を限らず二字三字亦能く法義を彰はす邊より推知すれば一字亦應に妨げなかるべし、乃ち知る二説偏せず方に是れ祖意なることを。眞實誠種之心とは、『對問記』に云く「眞實誠種とは謂く眞實誠の種子なり。種子に發生の用有り、佛心の眞實、能く信樂を發生す故に眞實誠種と云ふ。既にこれ眞實故に疑蓋無雜なり」と。『摘解』に云く「略書に誠種眞實と云ふに依れば、誠の字は種に屬し、眞實に屬すべからず、乃ち眞實とは體、誠種とは用なり、持業釋なり、既に佛心なり。何ぞ行者自力の不實心あらん。故に無有疑心と云ふなり」と。二義ある中、『略書』に望むれば『摘解』の説佳し、されど次下に眞實誠滿之心とあるに望むれば『對問』の説亦得たり。信樂即是眞實誠滿之心等とは、信樂中に五句有り、中に於て第一句は至心を攝し、第四、五句は欲生を攝す。中間の二句は正しく是れ信樂の心相なり、即ち一心攝二の義を示す。眞實誠滿とは至心の眞實佛心が衆生心中に滿入するをいふなり。極成用重とは至極の成就を極成と名け、信用敬重するを用重と云ふ。即ち本願の名號を信用敬重し此信決定して破壊すべからざるが故に極成と云ふなり。審驗宣忠とは審は謂く審諦にして驗とは其微有りと見つべきを云ふ。即ち明了の義なり、宣は『廣韻』に明なりと云ひ、忠は『玉篇』に直なりとす。即ちこれ明了正直の義な

り、欲願愛悅とは欲願即愛悅なり、可意の境に於て決定樂欲するを云ふ。即ちこの欲願は希望請求の不定なるに異なるが故に愛悅の二字を添へ給ふ。歡喜賀慶とは前の愛悅を開きて具さに示す此の如く一箇の信樂に五句を具す。其の心相を言はゞ唯だ是れ疑蓋無雜なり。故に下に信樂に結歸して今按等と云ふなり。欲生の下、願樂覺知とは此一句自ら信樂に合す。願樂を樂に合し、覺知を信に合す。然るに願の言は希望の心と決定の願とに通じ覺知の言また汎爾の信知に通ず、覺知必しも愛樂ならず、愛樂は必ずこれ覺知なり、今は願と覺知とを互に簡びて、以つて希望の心汎爾の知に非ざることを顯す。此れ乃ち信樂の義別なるが故に疑蓋無雜の義なり。成作爲興とは成佛作佛を成作と云ひ、大悲を興起するを爲興と云ふ。已上の二句は一連して義を顯す、謂く、此成興を願樂覺知するの心を願樂等と云ふ、其願樂は即ち上の信樂中に蘊在し、一信樂の義別なり。故に疑蓋無雜と云ふなり。大悲廻向とは總じて三心に通じ、終りに在りて前を統ぶ、謂く上の八句は皆是れ大悲の廻向なり、若し他力の然らしむる所に非ざれば愚鈍の衆生何ぞ此の如きの心を得んや。故に此の一句を加へて、他力廻向なることを顯し給ふ。而して義の親しきに附けば亦第三心の名とするも得たり。疑蓋無雜とは五蓋の中に疑蓋なるもの有り、疑は猶豫に名け、蓋は覆蔽を謂ふ、今は則ち名は同じきも其體は別なり、謂く行者有りて、自ら罪福を信じ、佛智を了せず、これを疑蓋といふ。即ち自力心なり、無雜とは純一を顯す、唯これ他力にして自力有る

ことなし、この自力淨盡、歸他力の心を疑蓋無雜といふ。これ即ち信樂の義なりと知るべし。
 今按等とは三に成一なり、眞實等の下、眞實心と正直心の配釋につき異説有り、一に云く、眞實心とは廻施を以つて云ひ、正直心とは領受を以つて云ふ、共に他力を顯す、虛假邪偽は『化卷』に分ちて釋す。今は則ち彼と異なるなりと、一に云く、眞實は至心に當り、正直は欲生に當る『疏』に正直進といふは東岸より西岸に趣くことなる故即ち欲生心なりと。一に云ふ、『略書』を按ずるに「三心皆共眞實」と云へり。彼を以つて之を思ふに、眞實正直は並びにこれ一眞實にして邪偽なきを顯すと。この義は眞實、正直を至心及び欲生に配せざるの説なり、此の如く三義有る中、第三説を佳しとなす。

今謂く、上は字訓を擧げて、會して八句を成す、心別して八有るに非ず、一心に入徳を具するが故に開きて八句となす、八心暫く別にして、而も眞實の義諸心に通徹す。謂く至心の眞實誠種よく信樂の眞實誠滿を成じ、其餘の四心は眞實誠滿に非るなし、又眞實の欲願愛悅は能く欲生の願樂覺知を成す、故に亦皆眞實なり、故に結して眞實心等と云ふ。虛假に對するが故に正直と云ふ、俱に皆これ眞實なり、其の眞實とは弘願他力を彰はすの稱なり、眞知等とは三心名は異りと雖も無疑の義これ一なり。一の信樂總じて二心を攝す、故に是名信樂と云ふ。即是一心とは無二心を彰はし、即一の義を成す、上に三即合一と云ふに應ず、即是眞實信心とは願成就に合し、上

に「涅槃眞因唯以信心」と云ふに應ずるなり、是故等とは論主合爲の所由を結示す、上に「論主合三爲一歟」とあるは愚凡の易了に約して合一の所爲を結し、今は三心即一に納して合爲の所由を示す、故に結して是故等と云ふなり。『述聞』に眞知等の下を釋して「眞知等とは上を承けて正しく成す、然に佛願の意は三と一と共に是れ法然なり、謂く法は唯一にして徳を論すれば則ち三なり、故に佛願の三は固より一より開く、故に開きて三と爲す。元は一を動せず、一に即して常に三なり。三亦未だ嘗つて一ならざるなし、前後心を收めて信樂中に在り、斯を一心となす、前後心を開きて信樂と並べて斯を三心と爲す、是を上三たび疑蓋無雜と云ふ、思つて知るべし」と云ふ。見るべし。

就法義釋

〔大意〕字訓釋上に竟りて、今は法義釋なり、中に於て二有り、一に正しく三心即一を明し、二に然就菩提心等(三)已下は別して信樂を釋す、初の中亦二有り、一に問、二に答なり。答の中亦二、一に正釋、二に凡按大信海等(三)已下は結嘆なり、正釋の中三有り、一に總標、二に雖然の下は別辨、三に、信知(三)已下は結示なり。別辨の中三有り、一に至心を釋し、二に信樂を釋し、三に欲生を釋す。

問

〔本文〕 又問如字訓論主意以三爲一義其理雖可然爲愚惡衆生阿彌陀如來已發三心願云何思念也。

〔校異〕 無し。

〔細釋〕 前後二番の問答につき『述聞』に云く「鎔云く、上は則ち三を以つて一を問ひ、此は乃ち一を以つて三を難すと、叡云く、初め已來を以つて大分して二と爲すは集主の意に非ず、須く文義脈絡を按じて知るべし」と。蓋し『一滯録』には前後二番の問答を牛角とするに對して、『述聞』には總じて一番の問答と見るなり、今謂く、『略書』にたゞ一問答とすると、今卷末(三)に總結して「三心即一心義答竟」と云ふに照合するに『述聞』の説を佳しとす、今も亦此義に従ふ。問。問答の中に亦問答を設くる其例ありや。答。『玄義分』の定散門に云々するが如し。披きて見よ。如字訓等とは字訓を縦す、爲愚惡等とは誓意を問ふ、問意に謂く、字訓の如くなれば應に三心即一の義あるべし、故に論主の合爲は其理然るべし、然に彌陀の發願も亦愚惡の衆生の爲なること論なし、而も三心の願を發す、此義云何が思念せんやと問へるなり。是を以つて答の中に於て、誓意に就きて三心即一の義を明すなり。

總標

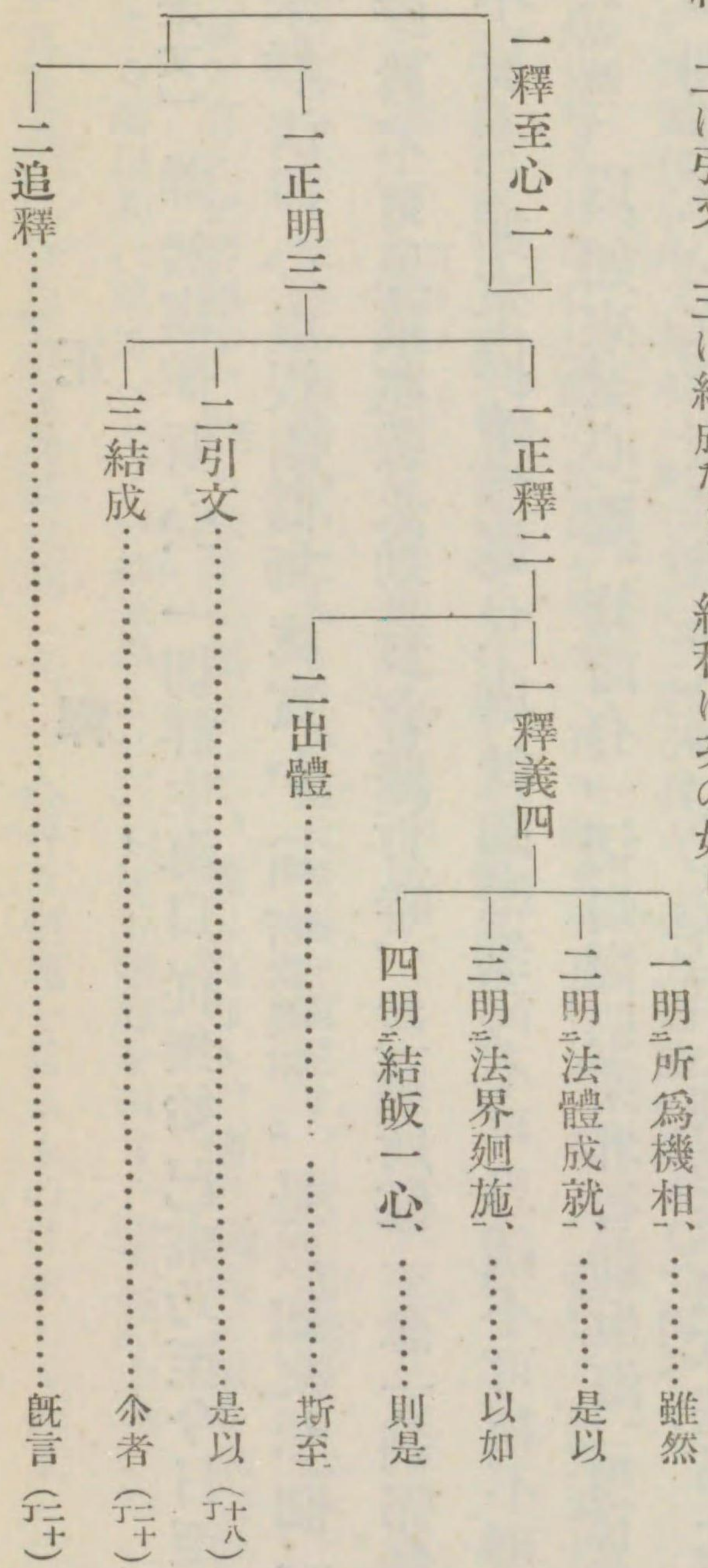
〔本文〕 答佛意難惻

〔校異〕 〇惻、『本願寺本』及び諸本は今の如く、『高田』『澁谷』二本は測に作る。

〔細釋〕 誓意知り難し故に佛意難惻と云ふ。

釋 至 心

〔分科〕 別辨の中初に至心を釋す、此中二有り、一に正明、二に追釋、正明の中三有り、一に正釋、二に引文、三に結成なり。細科は次の如し。



正 釋

〔本文〕 雖然竊推斯心、一切群生海、自從無始已來、乃至今日、至今時、穢惡汗染無清淨心、虛假詔偽無眞實心（明所爲機相）。是以如來悲憫一切苦惱衆生、海於不可思議兆載永劫、行菩薩行時、三業所修一念一刹那、無不清淨、無不眞心、如來以清淨眞心、成就圓融無碍不可思議不可稱不可說至德（明法體成就）。以如來至心廻施諸有一切煩惱惡業邪智群生海（明法界廻施）。則是彰利他眞心、故疑蓋無雜（明結歸一心）。斯至心則是至德尊號爲其體也（出體）。

〔校異〕 ①海、『寬永前本』及び『正保本』晦に作るもの形誤、②詔、『寬永本』に無し、恐く誤脱る。③以、『寬永』『正保』二本之を脱す。

〔細釋〕 雖然等とは初に所爲の機相を明す、竊推とは卑謙の辭なり。斯心を解するに二義有り、一義には上の佛意難惻とある佛意のこと、解し、一義は至心のこと、解す、二義有る中、後義を好しとす、何者初に至心を釋する故斯心と云ふ。即ち下（二）に信知斯心等と云ひ、又『略書』（二）に一者至心斯心等とあるに照すに愈々明かなり。一切群生海等とは『述聞』に此下を釋して「此下

に三心の義を辨ずるは宗家の意を承け、彼の二種深信を以つて、其の宗骨となす、『散善義』に『觀經』の三心を釋して次の如く眞實、深心、廻向の心と爲す。彼は既に本願の三を體知して其義を釋出す。然るに本願の三は元と一より開く、『觀經』の三心意亦別ならず」と佳し。自從無始等とは信機釋の曠劫已來等の文意を借る。穢惡汗染は貪瞋の當相にして、虛假詔偽は賢善の非に名く、無清淨等とは疏釋に無し、今家の加ふる所なり、不實の故に所求尅せず不淨の故に流轉息むことなきなり、已上は本分の機相を明す、これを所爲の實機と爲す。若し眞實有らば全くこれ他力廻施の物たることを反顯す、謂く、本願に至心と云ふ、至心は即ち眞實心なり、衆生本來虛假詔曲何ぞ眞實有らん。有るべからずして之を言ふ、他力廻施に非ずして何ぞや。

是以等とは二に法體の成就を明す、乃ち疏文の意に依るなり、是以とは所爲の機相を承けて能爲の大悲を標す、於不可思議等とは正しく法體成就を明す、中に於て二有り、初はこれ因行の眞實を明し、後に如來等とは其の果徳の成就を明す、眞心を以つて至徳を成す、至徳全くこれ眞心此の眞心能く衆生の煩惱心中に入りて功徳大寶海を満足す、故に圓融等と云ふ。上來眞實に就きて無と有とを對照す。乃ち衆生は無にして、佛は有なり、佛の成就は無き衆生の爲にす、成就の存する所以其れ見るべし。以如來等とは三に法界廻施を明す。『大經』上卷（二）に云く、「以大莊嚴具足衆行、令諸衆生功徳成就」と。三心各々廻施を言ふものは正しく此文に本づく。彼佛の永

劫に修する所の萬行能く衆生の功德を成す。故に佛の真心を全うじて、以つて衆生に施す、衆生の至心は即ち是れ佛心なり。即ち疏文に「凡所施趣求」等とあるの意を承くるなり、尙に知るべし衆生所有の眞實は即ちこれ佛の施す所なり、煩惱惡業とは三道流轉を顯す、邪智とは佛の正智に對するなり。

則是彰等とは四に一心に結歸することを明す。前文には如來の眞實が衆生の有となることを明す、然れば願に至心と説くは即ち利他の真心なることを顯す、衆生本來、清淨眞實心なし、而も至心といふ、利他廻向に非ずして何ぞや。是故に至心の言は即ち、利他の真心なることを顯す、利他の言は論註に倣ひ、佛力を彰はす、然るに本願の至心は本是れ衆生の能歸なり、何を以つてか如來の廻向なることを知る。次下の出體は正しく其義を顯す、故疑蓋無雜とは正しく一心に結歸す、至心の言既に利他の眞實にして自力に非ず、何ぞ疑蓋の雜ることあらん。疑蓋無雜とは即ちこれ一心なり、一心とは即ち信樂を指す、機相は唯一の信樂のみ。應に知るべし。

斯至心等とは出體なり、體に二あり、所依と當體となり。此下三たび體をいふもの並にこれ當體にして所依に非ず、今は初に在つて下の二を統ぶ。乃ち唯一の名號を三心の體となすことを彰はす。本願の三心は衆生往生の因を誓ふ、今機受の三心は本これ佛の成就なることを顯さんと欲す、故に其體を出し、名號が機中に印現して方に三心を成ずることを示す、これは本願成就の聞

名信喜の聖句に據るなり。名號とは上に顯す眞實の不行なり。大行印現して今の至心を成す、故に至心の當體即ち名號なり、名號爲體とは大信即ち大行なるの義を顯す、而して至心には信相なし、機受の信相は唯これ疑蓋無雜の信樂のみ、此義屢々述ぶるが如し。

引 文

〔大意〕 引文の中二有り、一に經文、二に師釋、該ねて之れを言へば、經文は佛の眞實行を以つて、衆生に廻施することを明し、師釋は衆生が佛の眞實を須ひて己が眞實と爲すことを明す。

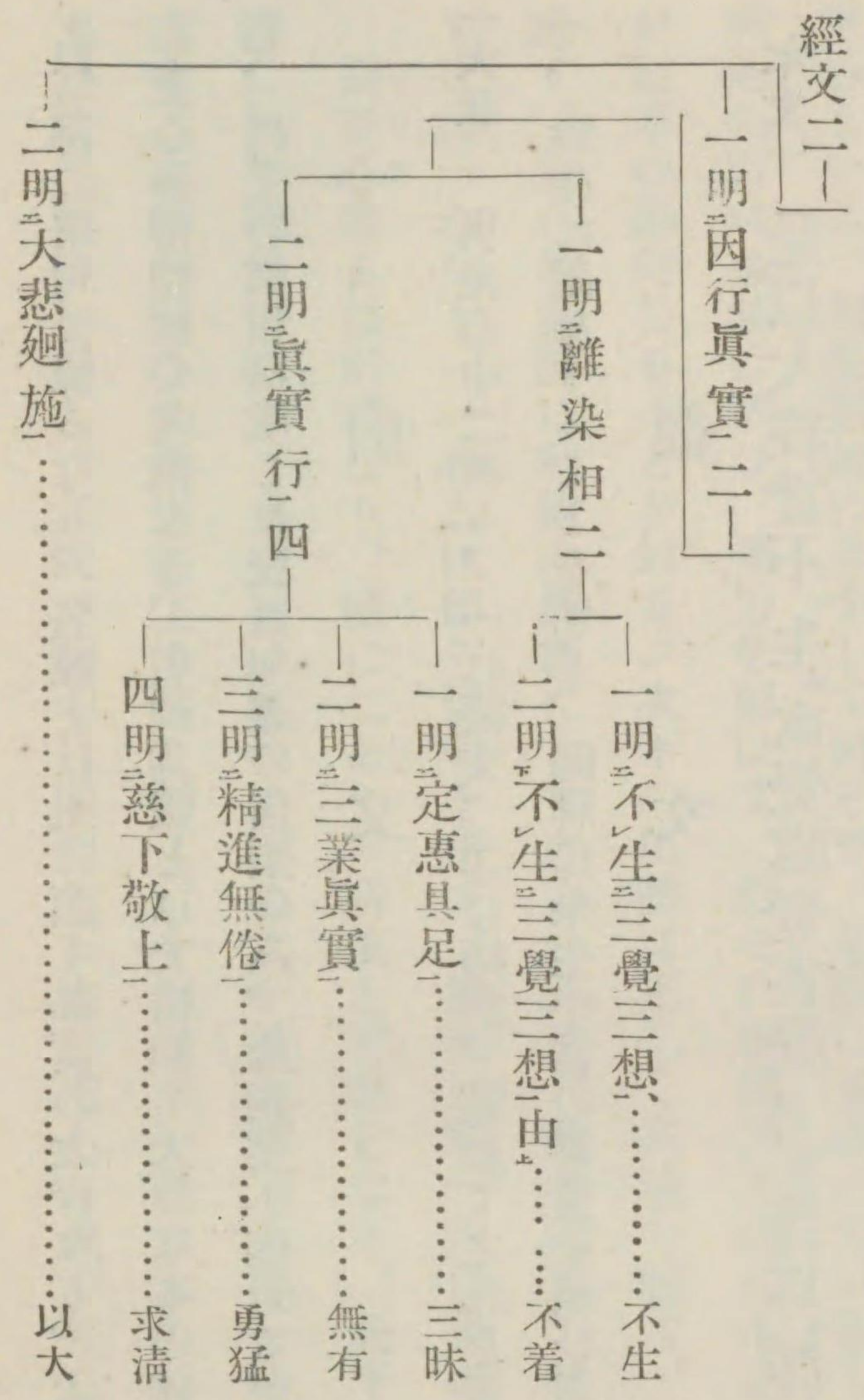
經 文

〔本文〕 是以大經言不生欲覺瞋覺害覺乃至普爲群生勇猛無退利益世間大願圓滿略出。

〔校異〕 (一)正依大經の文(上卷二) (イ)害想の想、『明曆本』は相に作るもの形誤。(ロ)香味之法の之、經文は觸に作る。(ハ)承問の問、『明曆本』は門に作るもの形誤。(ニ)無倦の倦、『本願寺本』『報恩寺本』等は今の如し、『高田』『澁谷』『寛永』『正保』『寛文』諸本は倦に作る。

(二)異譯如來會の文(大正十一65)

(イ)法處比丘の處、『寛永本』は藏に作る。(ロ)大弘誓の誓の下文願の字有り、(ハ)樂愛敬の敬、『正保』
 『明曆』『寛文』の三本は欲に作るものは形誤。(二)乃至、此處に四十八字を乃至す。
 『細釋』經文の中二有り、云く正證と助顯となり。正證の文につき『六要』三本(三十一)に「不生等者
 明離煩惱就此有二初明自行次明利他」と云へり。これ一段の文を自利利他の二利を以つて釋せ
 るなり。『頂戴錄』には三業五念に分ちて釋せり。見るべし。今謂く今文を大分して二と爲す。
 一に因行眞實を明し、二に以大等の下は大悲廻施を明す。初の中亦二有り。一に離染の相を明し
 二に三昧等の下は眞實の行を明す。細科は次の如し。



雜染の相を明す中、不生欲等とは初に三覺三想を生ぜざることを明す。『六要』三本(三十一)には淨
 影の説に依るとして八種の覺を擧げ、其中、欲、瞋、害の三覺は過失重きが故に偏に擧ぐと釋せり
 覺と想との區別につきては、淨影『大經疏』上卷(大正三七104)に云く「未對境界預起邪思名之爲
 覺、對緣生心說爲三想」と。憬興の『述文贊』中卷(大正三七154)に云く「三覺之因如次三想、取境分
 齊方生欲等故」と。不着等とは二に三覺三想を生ぜざるの由を明す。初二句は欲覺、欲想を生
 ぜざるの由を明す。謂く五塵に着せず、故に欲覺想を生ぜざるなり。忍力等の二句は瞋害覺想を生
 ぜざるの由を明す。謂く忍力して苦を計せざるが故に瞋害の意なきなり。少欲等の二句は總じて三
 毒なきことを結す。『六要』三本(三十一)に云く「無染志癡者明離煩惱體、煩惱體者即是三毒謂貪瞋癡」
 と。三昧等の下二に眞實の行を明す。中に四有り、一に定惠具足を明す、三昧常寂はこれ定にして、
 智惠無碍はこれ惠なり。二に三業眞實を明す。無有等はこれ意業、和顏等はこれ身業、愛語等は
 これ口業なり。暫く此三を擧げて普く一切の三業の所修を攝す。『六要』三本(三十一)に云く「淨影云
 無有諂曲明離心過言和顏者明離身過、愛語先問離口過」と。三に精進無倦を明す。文に云く、
 勇猛精進、志願無倦と。これは前後の修行に通ずるなり。以大等とは二に大悲廻施を明す。大莊
 嚴とは四十八願を指す、願は以つて行を導き、行は以つて願を滿つ、故に具足衆行と云ふなり。
 この願行を衆生に廻向し、衆生をして功德成就せしむ、故に令諸等と云ふなり。

問。解義の中には彌陀の廻施を云ふ。今の經文は因中の修相なり、相違に非ずや。答。『頂戴錄』に云く「若し果中行因に約すれば當時の衆生たるを妨げず、何となれば衆生未だ發信せざれば佛も亦因行を休まず、衆生發信稱名すれば、佛即ち正覺を成す」と。『摘解』に之れを評して今家の聖典中に未だ此の如きの説を見ずと貶し、更に自説を述べて「令諸等の文は是れ因中の事と雖も、果後廻施の因行なるが故に、因中に既に果上廻施の徳を有す、故に今引きて果上の廻施を證するなり。『行卷』に云く「言發願廻向者如來已發願廻施衆生行之心也」と、彼は果上に因を説く、今は則ち因中説果の意に據る、其理は一なり」と。今謂く『摘解』の説佳し。問。此中の説相は創習の所行に似たり、云何。答。『述聞』の意に謂く、「經文は既に無量の徳行と云へり。深位の行事は諸行中に亦諸行を修す。其實は無盡なり。何ぞたゞ箇々ならん。而も今の説あるは情に投ずるが故なり。四十八願中に無三惡趣を其首と爲すが如きこれなり」と。蓋し従ふべし。

次に異譯『如來會』の文は助顯なり。引意は、因位の萬行、果徳を成滿し、普く一切を益することを證す、中に二有り、初に界徳成就を明し、後に修習等の下は能成の因行を明す。初の中、先に大願成就を明し、後に發是願の下は莊嚴佛國を明す。能成の因行を明す中に三有り、初に修行の時劫を明し、初末等の下は正しく修行の相を明し、後に利益等の下は大願圓滿を結成す、正しく修行の相を明す中、初は自行の雜染を明し、後に於諸等の下は衆生を饒益することを明す。乃

ち暫く此事を擧げて以つて一切の行を攝するなり。『摘解』に云く「初後に大願成就を擧げて起結を爲すものは、因中の修行は唯本願を成する爲なり、以つて魏譯の令諸衆生等の句意を詳にすと。佳し。

師 釋

〔本文〕 光明寺和尚云欲回此雜毒之行求生彼佛淨土者此必不可也乃至皆須眞實故名至誠心抄要。

〔校異〕 原點と祖點と相違す、詳しくは上に述ぶるが如し。

〔細釋〕 經文上に竟りて二に師釋なり、即ち『散善義』(三)の文を引く、引意は『述聞』に謂く、「祖釋は上の眞實を證す。群生の無き所にして、唯これ如來の修得なり。如來は所得を廻施し群生は領受す、此れ其の眞實なり、舉體如來の眞實にして自力有ることなし」と。蓋し従ふべし、具文は上の如し。今は略して引く。二段の中、初は自力不生を揀びて他力眞實を明す。後は二種眞實を分ちて利他眞實を釋す、文を釋することは詳に上の如し。

結 成

〔本文〕 余者大聖眞言宗師釋義、信知斯心則是不可思議不可稱不可說一乘

大智願海廻向利益他之眞實心是名至心。

〔校異〕 ①是、『寛永前本』。見を作るもの形誤、②不可稱、の三字『寛永本』になし。

〔細釋〕 余者等とは三に結成なり。上の至釋を承けて大聖等といふ。是れ凡夫の所發に非ずして全くこれ佛心なり、故に則是等といふ。不可等の下は上の解義中と廣略前後すと雖も大旨別なし、乃ちこれ反復して自の所述を以つて經釋に貼するなり、此に一乘大智願海と云ひ、上に圓融無碍といふ。其實は一具なり。『行卷』(四三)に「按本願一乘海圓融滿足極速無碍」といひ、『證文』(二五)には「本願一乘圓融無碍」と云ふ、上は徳を擧げ、今は法を出す、意互に顯る。謂く淨穢凡聖平等無碍なり、此を一乘と云ふ。此理を體得するを名けて大智となす。大智の所發は則ちこれ願海なり、當に知る因果別なし、本願即ち佛智なり、佛智これ願海なり、不二の理に如して、實に不二の大用を作す、此を廻向利益他と云ふ、上には至徳と云ひ、今は眞實心と云ふ、具徳の心、心具の徳、其の意これ同じ、知るべし。

追 釋

〔本文〕 既言眞實。言眞實者涅槃經言實諦者一道清淨無有二也。言眞實者即是如來。如來者即是眞實、眞實者即是虛空、虛空者即是眞實。眞實者

即是佛性、佛性者即是眞實已上 (釋眞實言) 釋云、不簡内外明闇。内外者内者即是出世、外者即是世間、明闇者明者即是出世、闇者即是世間、又復明者即智明闇者即無明也、涅槃經言闇即世間。明即出世闇即無明、明即智明已上 (釋内外明闇)

〔校異〕 ①也の下、大正本の『北本涅槃經』にては三百六十五字を乃至す。②即、『寛永本』になし。③即の下『寛永』『正保』二本は是の字あり。④世の下、本文には「若我樂世、增長黑闇、遠離光明」の十二字有り、今これを乃至す。⑤闇、『寛永前本』は間に作るものは形誤、⑥明即、本文は光即到作る。

〔細釋〕 既言等とは二に追釋なり、即ち次上の眞實を追釋するなり、此中二段となる、初の眞實は所須の法、後の内外明闇は能須の機、衆機同く一眞實を須ひて、更に餘實なきことを顯すなり、初中、既言眞實の四字は先づ擧ぐ、次に言眞實者の四字は牒にして涅槃經已下は釋なり、先づ擧ぐるものは言を疏文に借りて意は次上の『大經』の文を指す、何者、文に言と云ふが故に、經には言と云ひ、釋には云と云ふが宗祖の用語例なればなり。詳しくは『仰信錄』を見よ。牒釋の意は佛所得の法を名けて眞實となす。唯佛獨り眞實なるが故に眞實の言正しく如來に屬することを顯す

涅槃經とは北本第十三(大正十二⁴⁴³)南本第十二(大正十二⁹⁸⁵)聖行品の文なり、實諦等とは一實無二を顯す、乃ち上の「一乘大智願海」に應ず。諦とは境の義なり。即ち諸法如實の境界を云ふ、道とは果道にして虛通無碍を義とす、言眞實等の下は如來の眞實を以つて衆生の佛性となすことを顯す、「眞實者即虛空」とは中間にありて隱(佛性)、顯(如來)不二を顯す。『樹心錄』に章安の疏を引きて云々、「言眞實等とは隱顯有ることを示す、『章安疏』に云く、顯の時を如來と名け、隱の時を佛性と名く、虛空とは隱顯不二を取る」と。見るべし。

釋云等とは後に内外明闇を釋す、若し疏文に就けば則ち一機に約すると、万機に約するとの二義を具す、今は万機に約するの義をとる、この下の解釋に異説有り、『一滯錄』の意に云く「恭敬三寶等の善を内と云ひ、孝養父母等の善を外と爲す、此内外即明闇にして持業を義となす、又復已下はこれ相違釋なり、内外とは世出世なり、明闇とは凡聖なり、故に諸大菩薩を明と云ひ、下三品を闇となす、總じて之を云へば凡聖同じく信後に自ら世出世の善を修行す」と。次に、『頂戴錄』の意に云く「これに二義有り、若し人に約すれば道(内)、俗(外)、智(明)、愚(闇)を簡ばざるの意なり。又法に約すれば、佛法(出世智明)、世法(世間無明)を云ふ」と。後に『述聞』の意に云く「世出世とは凡聖の別を謂ふ、理内理外以つて其心の遊履する所を分つ、此は其位に約す」。次に明闇を釋する中に先づ牒釋、次に引證なり、牒釋に二意有り、一に即ち是れ内外にして其の

得失を擧げんが爲なり、二に出世中の教(地前は阿含位)、證(地上は證道位)の二位別なるが故に二意の寛狹知るべきなり」といふ。

今謂く、『一滯』の説は文勢に應せず、即ち内外と明闇を分ちて能修の人と所修の善と爲すは穩かならず、次に『頂戴』の二義中に於て第二に法に約するものは宗義に疎し、最後に『述聞』の説は即ち佳し、

次に涅槃經等とは二義を引證す。今文は『北本』第三十八(大正十二⁵⁸⁹)『南本』第三十四(大正十二⁸⁸⁷)の文なり、『南本』の文に云く、「如人不樂處闇而求光明還復歸闇。闇即世間、明即出世、若我樂世增長黑闇遠離光明、闇即無明、光即智明」と。今文は轉用なり、引意は初はこれ持業釋にして、後はこれ相違釋なり。之を要するに凡聖智愚を簡ばざるが故に不簡内外明闇と云ふ、若し經意に居して之を言へば眞實はこれ能被の法、内外明闇は即ち所被の機なり、即ち「令諸衆生功德成就」の意に應ず、若し釋意に居して之を言へば眞實はこれ所須の法にして、内外明闇は即ち能須の機なり、「皆須眞實」の意に應ずるが故なり。

問。特に『涅槃經』を以つて引證する理由云何。答、『六要』三本(三)に云く「彌陀妙理無上涅槃念佛即是涅槃之門、是故雖說聖道教理悉有佛性如來常住甚深極理唯是彌陀如來果德」と『隨聞記』に云く「本書の中に『涅槃』の引文は最も多し、且つ之を引くに『華嚴』より先にするものは祖意は

此經を以つて主と爲すが如し」と。『摘解』に云く「一代教中に彌陀法を以つて終極となす。臨末の結經に何ぞ終極の本意を顯はさるることあらん、我祖は蓋し此理に據りて涅槃を以つて彌陀の果徳を説きたまふか」と。蓋し更に考ふべし。

因に問ふて云く、本典中に『法華經』を引用し給はざる祖意云何、答。『頂戴録』に云く、「一に云く初後佛慧圓頓の義齊しきが故に『華嚴』を引く處に『法華』を攝す、一に云く、彼に出世の大事と説く、出世大事の言は『大經』に濫するが故に、今謂く、吾祖は最初法華の徒たること凡そ二十歳なり、然るに彼を廢捨て、斯に一家を立つ、故に廢立を明著にせんが爲の故に彼を引用せざるのみ」と。又一義に云く、『法華』を引かざるは、他の論難を憚るが故なり、若し法華を引きて弘願義となさば臺徒恐くは論難をなさんと。以上の諸義各々理有り、合せ用ひて妨げなかるべし。

釋 信 樂

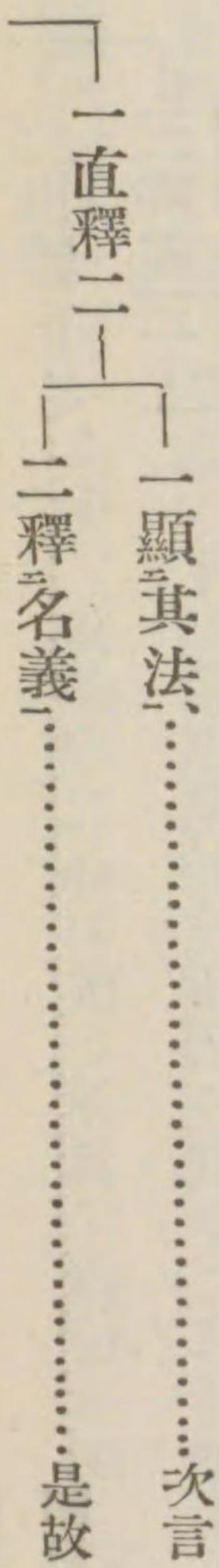
〔本文〕 次言信樂者則是如來滿足大悲圓融無碍信心海（顯其法）。是故疑蓋無有間雜故名信樂（釋名義）。卽以利他廻向之至心爲信樂體也（出體）。然從無始已來一切群生海流轉無明海沉迷諸有輪繫縛衆苦輪無清淨信樂法尔無眞實信樂（明本分機相）。是以無上功德難叵值遇最勝淨信難叵獲

得（明行信難獲）。一切凡小一切時中貪愛之心常能汙善心。瞋憎之心常能燒法財。急作急修如灸頭燃衆名雜毒雜修之善亦名虛假詔僞之行。不名眞實業也。以此虛假雜毒之善欲生無量光明土此必不可也（明自力不生）。何以故正由如來行菩薩行時三業所修乃至一念一刹那疑蓋無雜（徵釋所由）。斯心者卽如來大悲心故必成報土正定之因（明正因）。如來悲憐苦惱群生海以無碍廣大淨信廻施諸有海是名利他眞實信心（明廻施）

〔校異〕 ①融、『寬文本』は滿に作る、②無、『寬文本』は一に作るもの形誤、③德、『明曆』『寬文』二本は得に作りて傍に校異をなす。

〔細釋〕 別釋の中二に信樂を釋す。此中二有り、一に正釋、二に本願等の下は引文なり。正釋の中三、一に直釋、二に卽以の下は出體、三に然從の下は辨義なり、細科は次の如し。

二信樂二一



一正釋二 二出體……………即以

三辨義二

一約本分明信樂難得二 一明本分機相……………然從

二明行信難獲……………是以

二約修善明自力不生二 一明自力不生……………一切

二徵釋所由……………何以

三明廻施淨信爲正因二 一明正因……………斯心

二明廻施……………如來

引文……………本願

直釋の中二、一に其法を顯し、二に是故の下は名義を釋す、初の中、次言信樂者の五字は牒文なり、『一滯録』には次言と云ひて一者二者の言なきものは『化土卷』所明の各別の三心に對して即一を示すと云へり、『摘解』之れを評して云云せり。蓋し此評當れり、正しく其法を顯す中、如來とは本佛を指す、此人なり、満足等とは其の所得の法なり、慈悲缺くることなし、故に満足大悲と云ふ、此悲は煩惱菩提一體不二の故に圓融無碍と云ふなり、満足大悲は悲にして圓融無碍は智なり、即ち悲智の二は次での如く欲生と至心に當る、上の至心釋に「如來以清淨真心成就圓融無碍

至德」と云ひ、下の欲生釋に「欲生即是廻向心、斯則大悲心故」といふものと相應す、信心海とは上は徳を擧げ、これは法を出す、乃ち機受の大信を云ふ、此信は佛の悲智二心より成す、故に如來満足等といふなり、是故等は信樂の名義を釋す、信心の擧體全是れ佛心にして自力雜ることなし、故に疑蓋無雜といふ、疑蓋無雜は正しくこれ信樂の義にして前後の二心に疑蓋無雜といふものは全く此心より開出す。乃ち若くは至心、若くは欲生、其の機受の相を言ふ時は疑蓋無雜の外あることなきを彰はす。而して今此中に前後を攝し來りて合して「満足大悲圓融無碍信心海是故疑蓋無雜」と云ふものは自ら佛二生一の義を成するなり、即以等の下は出體なり。上の至心釋に云く「以如來真心廻施諸有一切煩惱惡業邪智群生海」と。如來廻施の真心とは其體名號なり、名號が衆生心中に歸入するを名けて衆生の至心といふ。故に利他廻向の至心といふ、而して至心の別相なし、無疑の信樂を即ち其相となす、無疑の信樂は是れ佛智滿入の相なり、故に體を全じて相を成す、これを他力となす、故に至心を信樂の體となすなり。

然從等の下は三に辨義なり、此下の科節は諸家不同にして各々妙旨を窺ふ、今は且く『仰信錄』に従ふ。此中分ちて三となす、一に本分に約して信樂の難得を明し、二に一切凡小の下は修善に約して自力不生を明し、三に斯心の下は廻施淨信を正因と爲すことを明す。已下は信樂の義旨を辨す、然るに釋體は前後に同からず、前後の二心は先づ所爲の機相を明し、次に能爲の法徳を明

し、後に大悲廻施を明す、則ち生起本末次第して以つて明す、今は然らず、本佛の果徳に望めて現今の機相行信難得にして、自力の修善は淨土に生ぜざることを明し以つて他方の信樂能く報土の正因を成ずることを顯す、然れば前後の二心は因より果に至り、以つて法體成就を明し、此中の所明は昔因を擧げて今果を顯はし、以て信樂正因を示す、夫れ此の如きものは法體成就は二心成一にして、二心若し成らば、信樂自ら具す、衆生の領受は一心攝二にして唯一の信樂正因究竟す、此義を以つての故に今は機上に居し、現在成就に約して唯信樂の一心以つて報土正定の因たることを辨し給ふなり。然從已下は本分に約して信樂の難得を明す、此中二、初に本分の機相を明し後に是以下は行信の難獲を明す。初の意は衆生本來淨信なきことを明す。一切群生海とは總じて衆生を指す、流轉等とは古來三説有り、一に云く、惑(無明海)、業(諸有海)、苦(衆苦輪)の三を云ふと、二に云く、無明は因、苦は果なり。有は因果に通ずと、三に云く、無明は因、有と苦はこれ果なりと。この三説何れを取るも妨げなし、海とは漂没を顯し、輪とは展轉を示す、法介とは『述聞』に『還源觀』を引きて、古今常然なるを名けて法介となすと云へり。此言は中間に在りて上下に通ず、無清淨眞實信樂とは妄染虛假を離れたる決了心なきを云ふ、弘願の信樂なしといふに非ず、上に清淨眞心なしと云ふと全同なり、是以等とは後に行信難得の意を明す。謂く既に清淨眞實の心なし、故に弘願の行信難得なりと、無上功德とは大行を謂ひ、最勝淨信とは大信を謂

ふ、即ちこれ弘願他方の行信なり、『崇信記』に問答をなして云く「問。既に他方信心と云ふ、固り衆生の本分に非ず、然れば難値難獲いづくんぞ衆生の清淨眞實の心なきに由らんや。若し淨心なきが故に値ひ難しとならば畢竟して値獲の日なからん。此義云何、答、今は機實を顯す、法徳に關するにあらず」と。佳し、『對問記』に云く「若し前後の所明の如きは所爲の機實は因行の前に在り菩薩これが爲に修行成就す。是を以て因行の前未だ行信有らず、行信無きが故に難値難獲の論すべきものなし、然に今行信に對して値獲の難を示す、明に知ぬ、果上の上に於て現今の機相を明す、前後の二心と其異見るべし」と。亦佳し、一切凡小等とは修善に約して自力不生を明す、中に二、一に正しく自力の不生を示し、二に何以の下は其の所由を徵釋す、初の中、一切凡小とは機類を擧ぐ、一切時中とは時節を指す、貪愛等とは語を二河譬に借り、煩惱熾盛なる機劣の相を示す、蓋し疏文と同じく機劣の相を示すと雖も、意趣は即ち別なり、彼は則ち機相は濕燒すと雖も、法體は變りなくして西岸に到ることを示す、これ他方の信樂を得るが故なり、今は則ち機相の如く實に濕燒することを顯す、他方の信を得ずして自力建立の心なるが故なり。善心法財等とは自力の善をいふ、已上は自力修善の相なり、急作等とは至誠心釋に採るなり、以つて修善皆雜毒虛假なることを明す、雜毒雜修は清淨の反なり、虛假諂偽は眞實の反なり、以此等とは正しく不生を示す、無量光明土とは眞報土を言ふ、『眞佛土卷』(二)の如し、此の如く雜善の不生を示す

ものは自力の非因を揀んで唯他力廻向の信樂のみ、以つて正因となすの義を反顯するなり、次下の徵釋より逆に意讀すべし、何以等とは所由を徵釋す何以故とは不生の由を徵す、正由等とは佛の信樂を擧げて以つて不生の由を釋す、謂く菩薩因行の所修一念一刹那も疑蓋無雜にして果徳を成滿するに由る、故に自力虚偽の行は彼の果成の土に生ずることを得ずとなり、蓋し雜毒不生の所由を釋する處に自ら唯他力に托して疑なきものゝみ往生することを得るの意顯る。上(六)引文の下に由の字の子註あるもの見るべし。疑蓋無雜とは佛が衆生の得生に於て疑心なきを云ふ、謂く如來眞實心中の所修を以つて之を諸有衆生に廻施し衆生の得生に於て一念の疑心なし名けて佛の信樂となす。斯の信樂は至心欲生の二心の所成にして二心常に信樂の無疑を成す、故に一念一刹那も疑蓋無雜といふ、これ衆生の信樂を佛邊に成就するの相なり。

斯心等とは三に廻向の信樂を正因と爲すことを明す。中に二有り、初に正因を明し、後に廻施を明す。初の中、斯心とは次上の疑蓋無雜の心を指す。彼の無疑心はこれ如來の大悲心なり、既に如來の大悲心なるが故に、佛の無疑心は即ち衆生の無疑心を成じ、能く報土の生因となさしむ、『摘解』に『對問』の説を評して云云せり、見るべし、如來等とは其の廻施を明す、乃ち正しく法體所成の信樂を以て劣機に廻施し給ふ、劣機之れを得、名けて信心といふと示さるゝなり、謂く一心群生海無始已來生死の苦集のみありて相續して淨信得難し、縱令勤修するも雜毒不生な

り、如來即ち淨信を廻施して往因を成せしむ、乃ち次上の「大悲心故必成報土正定之因」等の意こゝに於てか明かなり、苦惱群生海とは上の一切群生海及び一切凡小を指す、無碍廣大淨信とは第四卷(三)に「廣大無碍一心」と云ふ、言は上下すれども義は彼此なし、即ち盡十方無碍光の徳を具し、衆生を攝取することに於て決定無疑なり、故に廣大無碍の淨信といふなり。これ佛成就の信樂のことにして上に疑蓋無雜といふものは是れなり、廻施諸有等とは佛の信樂が、衆生心中に滿入することとなり、既に佛智滿入すれば、衆生は乘彼願力定得往生と深信して一念の疑慮なし、故に是名利他眞實信心と云ふなり。

引 文

〔大意〕 引文の中二、一に經文、二に師釋なり、經文の中亦二、一に本經、二に末經なり。

本 經

〔本文〕 本願信心願成就文經言、諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念已上。又言他方佛國所有衆生聞無量壽如來名號能發一念淨信歡喜已上。

〔校異〕 (一)正依大經本願成就文(大經下)校異なし。

(二)異譯如來會の成就文(大正十一97)

(イ)能發の上に經文乃至の二字有り、(ロ)歡喜の下『明曆本』には愛樂の二字有り。

〔細釋〕本經中に二有り、一に正證、二に助顯なり。今は初なり、初十字は先づ標す、上に五個の願目を擧げ而して此名なし、後に本願欲生心成就と云ふに准釋すれば下の願の字刺に似たり、云何、『頂戴録』に云く「上に本願三心の願と云ふ、今信心を以つて三心に換へ、三心即一と言ふ一は即ち信樂なり」と、蓋し佳し、上來勉めて三心即一の義を明す、今之を承け來りて本願固有の義を明さんとす、引文の本意實に此に在り、『述聞』に『頂戴録』の説を評斥す、『摘解』には勉めて之を救助す披見せよ。聞其名號等とは正しく機受の信相を顯す、『最要鈔』(三)に云く「コノ信心ヲハマコトノコ、ロトヨムウヘハ凡夫ノ迷心ニアラス、マタク佛心ナリ、コノ佛心ヲ凡夫ニサツケタマフトキ信心トイハル、ナリ」と。即ち名號は佛心なり、亦佛智とも大悲とも云ふ。佛心が凡夫心中に入つて其法となるを名けて信心といふ、聞より入るが故なり。『摘解』に云く「今文の引意に亦尊號爲體の義を證するの意あるべし。三心其體一名號なるときは自力疑心を雜へざるの義自ら成す、鎔云く、其名號とはこれ至心成就なり、然に至心の下に之を引かざるものは、聞と相接して、分引すべからざるが故なり」と。今謂く至心廻向と言ふはこれ至心成就なり、名號はこれ眞實功德なりと雖も、聞其等の文はたゞこれ信樂を説く、佛意は三即一を示すに在りて至心に配當するの意なかるべし」と。見るべし。

又言他方等とは二に助顯なり。先輩の多くは、正依成就文の一念はこれ信の一念なるの義を助顯すといふ。今謂く、末卷の引意は正に然るべきなれども、今意は然らず、『略書』(三)信樂釋下に引きて、信心歡喜に止る、是に於て知る、主意は一念の言に在らざることを。然らば何ぞ之を用ひて助顯すとならば、謂く合三爲一を顯すに在り。此文は信一念の義明著なるが故に、以つて三即一を確定するに足る、若し多念を要せば心相當に一ならざるが故なり。

末 經

〔本文〕涅槃經言。善男子大慈大悲名爲佛性。何以故。大慈大悲常隨菩薩如影隨形乃至若離憍慢及放逸則能兼利一切衆若能兼利一切衆則處生死無疲厭略抄。

〔校異〕(一)北本涅槃經第三十二師子吼品(大正十二⁵⁵⁶)南本第三十(大正十二⁸⁰²)の文。

(イ)一切衆生畢定當得大慈大悲の畢、原文宋元二本は必に作る。以下の畢字亦同じ、(ロ)不能二十五有の能の下、經文に捨の字有り、(ハ)佛性者即是如來の七字は『寬永本』に之を脱す、(ニ)以菩薩摩訶薩の以、經になし。

(二)北本涅槃經第三十五迦葉品(大正十二⁵⁷³)南本第三十二(大正十二⁸²¹)の文。校異なし。

(三) 北本涅槃經第三十六迦葉品(大正十二⁵⁷⁵)南本第三十二(大正十二⁸²²)の文。
 (イ) 有二種の種、經の元、明、麗二本には此字なし。(ロ) 是名爲信不具足の是の下、經文は故の字有り
 (四) 晋譯華嚴經第六十入法界品(大正九⁷⁸⁸)の文、本文は五言の偈なり、『本願寺本』は二句一行に
 書す、經の原文は、「此ノ法ヲ聞テ、歡喜シ信心疑ナキ者ハ」と讀むの意なり。

(五) 唐譯華嚴經第六十(大正一〇³²⁶)の文

(イ) 經文は五言の偈、『本願寺本』は二句一行に書す。

(六) 唐譯華嚴經第十四(大正一〇⁷²)の文

(イ) 疑網の網、『高田』『澁谷』『明曆』『寛文』等の諸本は綱に作るもの形誤、(ロ) 甚難得の下の乃至は十句を乃至す。(ハ) 諸根淨明利則得親近善知識の則得の上に本經は「則能遠離惡知識、若能遠離惡知識」の二句有り、(ニ) 得親近善知識、則得親近善知識の則、本經は若に作る、(ホ) 能生在如來家の能、本經は得に作る、『高田』『澁谷』二本は之に従ふ、(ヘ) 波羅蜜の蜜、『明曆本』は密に作る、(ト) 得得辯才の得得、本經は則得に作り、辯は寛永『正保』『明曆』『寛文』の四本は辨に作る。〔細釋〕 二に末經とは『涅槃』及び『華嚴』を引く、『涅槃』に三文有り、前の解義の中に望めて終より前に向ひ、次第に之を成す、第一文は上の如來悲憐等に應じ、第二文は上の必成報土等に應じ第三文は上の「以此虛假乃至必不可也」に應ず。其の初文は佛性に三名を説く、謂く四無量と大信

心と一子地なり、四無量とは所被の境につきて無量の名を立つ、或は云く、「四等とは能被の心に就きて云ふ」と、慈は與樂悲は拔苦、喜は隨喜、捨は無着なり、此の四無量心即ち佛性なり、一切衆生の當得なるを以つて悉有佛性といふ、此四は廣く凡夫二乘及び佛に通ず、今は菩薩の所得を顯はして大と云ひ、余の小なるものに揀ぶ、因果不二なるを以つて名爲如來といふなり、四無量の義に就きては、『大智度論』第二十卷(大正二五²⁰⁸)『大乘義章』第十一卷(大正四四⁶⁸⁶)『法界次第』上之下(大正四六⁶⁷²)等に出づ、檢すべし。大信心とは菩薩十信位に於て大信心を得て六度を具足す、然るに住行向地皆發心有り、今經は其初地に約す、後の一子地とは初地に入るものは一切衆生に於て怨親平等の心を得るを云ふ、今は信所成の益にして即ち當來の所得なり、『和讚』に云く「平等心ヲウルトキヲ、一子地トナツケタリ、一子地ハ佛性ナリ、安養ニイタリテサトルヘシ」と知るべし。以上三段は以つて上の如來苦惱の群生海を悲憐して無碍廣大の淨信を以つて諸有海に廻施したまへりとあるの義を證成するなり、中に於て不能二十五有とは校異に示すが如く原文は能の下に捨の字有り、今捨の字を缺きたるにつき『徵決』に云く「若し此書に捨の字無きに順じて解せば、則ち二十五有はこれ所化の境なり、文の意に云く、菩薩若し大喜捨心無くば則ち二十五有を化するに堪へず、然れば則ち阿耨菩提を得る能はず」と。知るべし。

問、佛性の名義云何。答、『大乘義章』第一卷(大正四四⁴⁷²)に佛性に五門分別を説く、中に於て

『涅槃經』の意に依りて性を釋するに四義を出す、即ち一には種子因本の義、二には體の義、三には不改の義、四には別異の義なり、詳くは彼に就きて見るべし。問。佛性論の義相云何、答。先輩に粗二説有り、一は本具佛性を否定するの説にして、一は本具佛性を肯定するの説なり、前者は空華先輩の多く稱ふる所にして、後者は『述聞』『摘解』等に之を立つ、『摘解』には前説に對して十二難を擧ぐ、即ち文に云く「若し無佛性を談すれば、今家は眞如緣起の説に依らざるや(是一)三乗の性亦これなしと爲すや(是二)。諸教に成佛の益なしとなすや(是三)。一切衆生に獲信すべき性あり、何故に六度を行すべき性なきや(是四)。一切衆生無佛性ならば聖典中何處に其文義有りや(是五)。涅槃の正説は云何がこれを會するや(是六)、滅度證果と涅槃と同異如何(是七)、『樂集』に同じく有佛性を云ひ、二門同じく佛性を顯すの法となす、序題門も亦同意なり、云何が之を會するや(是八)。若し無佛性なれば值佛聞法も亦斷じてなきや、集の文既に佛性あるもの多佛に値ふべしとなすが故に、佛性なきものは值佛等應になかるべし(是九)。女人及び闍提も亦本願所被の機なり、何ぞ無佛性の義有りと云ふや(是十)。弘願も亦五乘齊入の法に非ずや(是十一)。願文の十方衆生中に不攝の機ありや(是十二)」と。今謂く、如上の十二難を仔細に點檢すれば、適切ならざる箇條なきにしも非ざれ共、大旨に於て首肯するに足る。

又言或説等とは第二文なり、今文は信心を因となすことを明し、上に云ふ「必成報土正定之因の義を證するなり。」

又言信等とは第三文なり。今文は信不具足を簡ぶの文にして、以つて上の解釋中に「以此虛假乃至此必不可也」とあるの義を證成し、反つて具足の信を顯すなり、文に兩節有り、初は聞思に約し、後は人法に約す、初に聞思とは三慧中の初の二を云ふ、即ち受教を聞となし、簡義を思となす、聞は則ち思に非ざるも、思は必ず聞を具す、名號を聞くと雖も、而も如實ならず、止だ是の名を聞きて其義を得ず、第二十願の聞の如きは其信自利にして利他に非ず、これを思より生ぜずとなす、後に人法に約すとはこれに二説有り、一に云く、唯念佛の道あるを信じて、衆生稱念必得往生と信せざるが故に願求往生の心なし、これ機劣の相を顧みて其分に非ざるを恐るゝなりと、一に云く、得者は如來なり、道は其所得の大般涅槃なり、前の經文に云く「何因緣故信不具足、是人雖信大般涅槃常樂我淨言如來(釋迦)身無常無我無樂無淨」と。經意此の如し、今は轉用して、彌陀本願の人法を以つて得道者となす、彌陀は是れ人なり、本願はこれ法なり、此二、不二當體全是なり、信不具足の人は之を知らずとの意なりとす。

以上の二義有る中、本經の意に准すれば後説を是と爲し、今の引意を推すれば前説も亦得たり即ち機類一に非ざるが故なり。

次に『華嚴經』を引く、『華嚴經』に三文有り、初は晉譯第六十入法界品の文、次は唐譯第六十亦

是れ入法界品の文、後は唐譯第十四賢首品の文なり、引意は大信の徳益を明し、以つて佛因圓滿を顯す、中に於て初文は大信の利益を明し、後の文は信の體具の徳を歎す、中間は前後に向つて獲信得益並に佛力に由ることを顯す、謂く初の二句は佛力疑を斷することを明し、後の二句は佛力に由つて徳益を得ることを明す、前後に向ふの意見るべし。

第一文につき『樹心録』に云く『探玄記』に云く、此の普賢自在法を信する者は究竟して終に佛果と齊し、善財の諸佛と等しきが如し。今按ずるに善財童子は南に詢ふて五十三の善知識に參ず、最初功德雲比丘爲に念佛三昧を説き、最後の普賢菩薩自ら西方往生を願す、是に依つて之を觀るに則ち此法は即ち誓願一佛乘なり。故に此文を引きて今の信樂を證す。下に信徳を嘆する文皆この意なり」と。佳し、聞此法とは聞其名號、歡喜等とは信心歡喜、速成等とは即得往生なり。自ら前の必成報土正定之因の意に應ず、又前の『涅槃經』の「大信心者即是佛性、佛性者即是如來」の意に應ず。『和讃』に云く「信心ヨロコブソノヒトヲ、如來トヒトシトキタマフ、大信心ハ佛性ナリ、佛性スナハチ如來ナリ」と。これ二經を合讚するなり。其意知るべし。

第二文は上の「利他眞實信心」と云ふに應ず、佛智かの衆生心中に滿入して無疑の信樂を成ずるは即ちこれ佛力斷疑するが故なり。又前の『涅槃經』の攝盡無量といふものは今の満足に同じ、第三文に信心に種々の徳義を示すもの即ち此意を承くるなり。

第三文は信心に種々の勝徳を具することを示す、大分して二と爲す、初の二十六句と後の六十八句となり、初は通じて信に諸徳を具することを明し、後は別して行位に就きて徳を明す。初中亦三、初四句は總標、次の信無垢より下の二十句は別顯、後には故依行等の二句は總結なり、初の中、道元等とは『樹心録』に釋して「探玄記」に云く、能く福智を生ずるを、覺道の元、福徳の母と謂ふ」と云へり。出愛流とは所離にして、開示涅槃は所得なり、以つて一切諸徳を總標するなり。信無垢等とは別して諸徳を顯はす、『對問記』に『清涼疏』を引くが如し、二十句有りて毎句一勝徳を嘆す、是故依行等の二句は總結なり、若常信奉等とは後に行位に約して徳を明す、中に二初に行に約す、佛所護念に至るまでの二十四句是なり、後に位に約して明す、若爲諸佛より下の四十四句是れなり、行に約して明す、中二、初の十二句は能成の信なり、後の十二句は所成の行なり、初め信を明す中、初の四句は信佛なり、次の四句は信法なり。後の四句は信僧なり、佛とは能説の人にして釋尊これなり、僧とは傳持の人にして七祖これなり、七祖の説を信するはこれ即ち佛の如實言を信するなり、佛の如實言を信するは即ち彌陀の本願力を信するなり、若得信力等とは已下六句は成行を明す、修集廣大善とは正しく行を成ずるなり。若能修集等とは已下の六句は所成の行徳を明す、若爲諸佛等とは後に位に約して明す、文に四十四句有り、分ちて四となす、初十二句は十住位を明し、次に若得増上等の十句は十行位を明す、次に若常觀等の十二句は

十廻向位を明す、後に若得堅固等の十句は地上位を明す、『樹心録』に云く「彼の經意に依るに信滿不退にして一時に此一切前後の諸位の行相を得、而して成佛す、これ行佛にして位佛に非ざるなり。又變易を説かずたゞ分段身因位を窮め、信滿後頓に生死際を盡す、『五教章』中の説の如し今意亦是の如し、横超の金剛信心を得るが故に一時に諸位の功德を得、是故に或は正定聚に住すと云ひ、或は必定に入ると云ひ、或は歡喜地と云ひ、或は等正覺と云ひ、或は、便同彌勒と云ふ。これ則ち一因頓に窮りて一果圓に顯る、下文に云く、大願清淨報土不云品位階次と。此の謂なり」と。蓋し佳し、今文中、略して本典に引かざるもの有るの意につきては粗々『述聞』に辨ずるが如し。

師 釋

〔本文〕 論註曰名如實修行相應、是故論主建言我心已上。又言經始稱如是彰信爲能入已上。

〔校異〕 ①言、用例に准せば曰に作るべし。②入、『寬永前本』及び『正保本』は人に作るもの形誤〔細釋〕 經文上に竟りて二に師釋なり、師釋に『論註』の二文を引く、二文は如實の一心を能入の因と爲すことを顯す、上來二經を引きて信德を顯すものは意、唯信正因を助顯するに在り、信德

詳かならざれば唯信正因の義明確ならず、今はこれを祖典に合して、以つて成就の文旨を成するなり。初は讚嘆門(下)の文にして、信はこれ如實修行なり、故に論主建に我心と言ふと明すなり、如實修行を解するに信に約すると行に約すると二義有れども今は信に約する義を採る、『和讚』に云く、「如實修行相應ハ、信心ヒトツニサタメタリ」と。蓋し此義なり、『摘解』に『一滯録』及び『頂戴録』の説を評して云々せり、見るべし。又言經始等とは『論註』大尾(下)の文なり、引意は信を能入の因となすことを顯す、唯信正因の義は此文殊に明かなり、『述聞』に云く「謂く論主の一心は、成就の一念を承く、成就の一念は義一經を統ぶ、是を以つて經家は彼(如是の言)を大首に安置し其意を標知し、論は經に順じて辨ず、建章に一心と言ふ所以なり」と。蓋し佳し。

釋 欲 生

〔本文〕 次言欲生者則是如來招喚諸有群生之勅命(釋義)。卽以眞實信樂爲欲生體也。(出體)。誠是非大小凡聖定散自力之廻向故名不迴向也(簡非)然微塵界有情流轉煩惱海漂沒生死海無眞實廻向心無清淨廻向心(明所爲機相)。是故如來矜哀一切苦惱群生海行菩薩行時三業所修乃至一念一刹那廻向心爲首得成就大悲心故(明法體成就)。以利他眞實欲生心廻施諸有

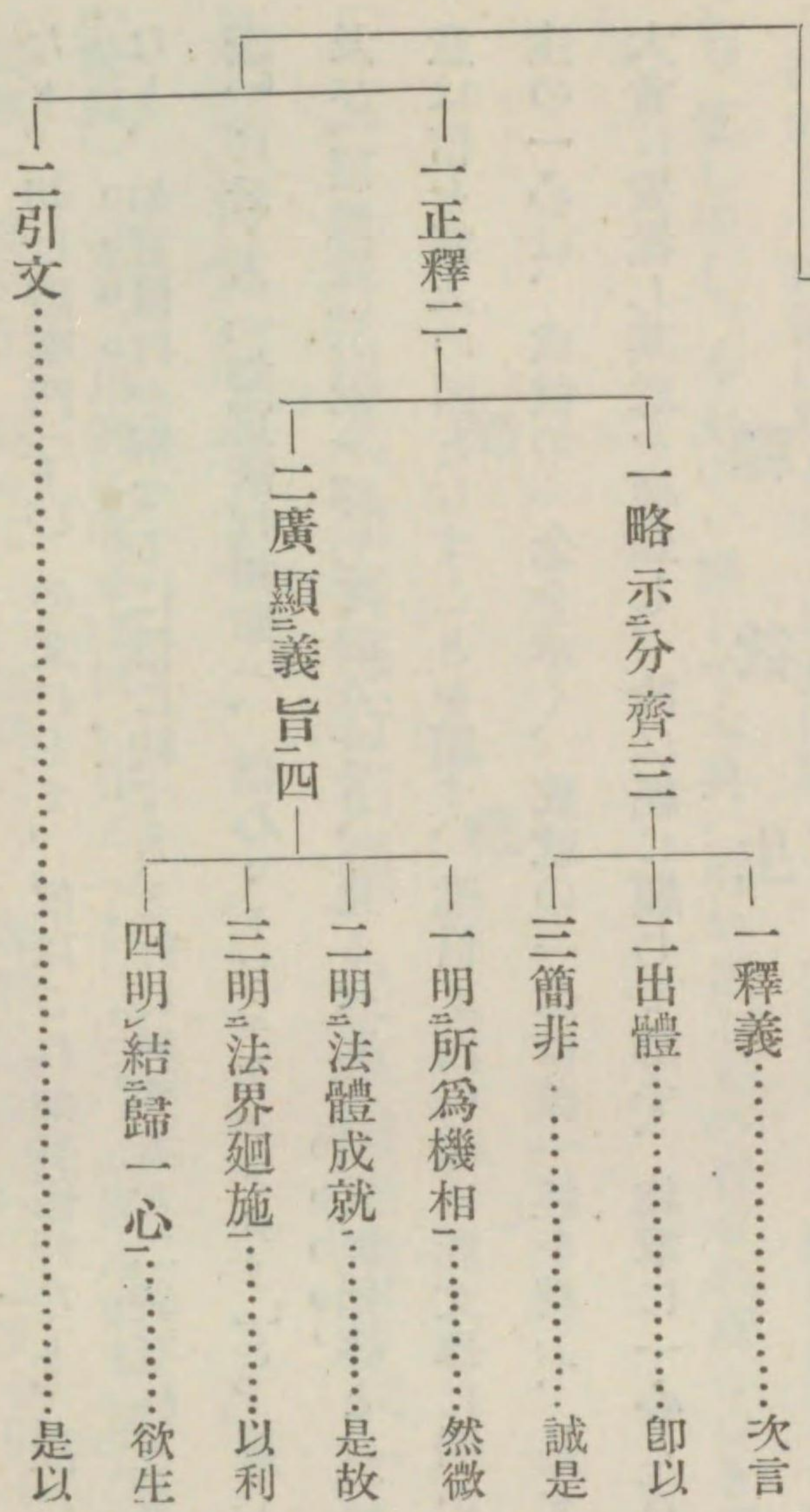
海(明法界廻施)。欲生卽是廻向心斯則大悲心故疑蓋無雜(明結歸一心)。

〔校異〕 〇漂。『寛永』『正保』『高田』『澁谷』等の諸本は漂に作る。〇有の下に『寛永本』情の字有り。

〔細釋〕 別辨の中、第三に欲生を釋す、この中二、一に正釋、二に是以本願等の下は引文なり。

初の中亦二、一に略して分齊を示し、二に然微等の下は廣く義旨を顯す、細科は次の如し。

釋欲生二



初に略して分齊を示す中、三、一に釋義、二に卽以の下は出體、三に誠是の下は簡非なり。

此の如く三節を以つて欲生の分齊を示し、以つて弘願の信心の不共を顯す。謂く三願同じく欲生を説き、名はこれ同なりと雖も、義旨は大に別なり、彼の二願の如きは希求不定の願欲心を云ふも弘願は然らず。『金剛鐺』に云く「欲生といふは本これ如來の大悲廻向攝取衆生の招喚の勅命なり、衆生に在つては聞信に非ずば何を以つて之を受けん、故に『鈔』に云く、「又籍彌陀悲心招喚者信也」と、然れば衆生の勅命に歸順する相はたゞ二種深信決定するばかりなり、この深信をまた欲生と名れば當體全くこれ信樂なり、故に卽以等と云ひ、疑蓋無雜といふ、誠是等とは、若し機より努力する欲生ならば是れ大小凡聖定散自力の廻向にして本願に相應せず、今本願の欲生とは總べて自力の欲願を用ひず、十九、二十兩願の機の欲生と同日の談に非ず、故に不廻向と名く、不廻向とは他力廻向の異名なり」と、知るべし。

初に釋義とは此は祖釋を承けて欲生の物體を定むるなり、祖釋とは卽ち二河譬なり、上に廣く引くが如し。如來招喚とは『行卷』には本願招喚といふ、本願と如來と願力と相互に因果互顯なり諸有群生とはこれ水火交起り、賊獸來り逼りて、事として死せざるなく、惶怖名狀すべからざる者を指す、勅命とは卽ちこれ云ふ所の一心正念直來等なり。『行卷』に歸命を釋して招喚勅命と爲し、發願廻向を釋して廻施衆生之心と云ふ、勅命の心に在るを廻施心と云ひ、廻施の心の言に發

するを招喚の勅命といふ。今此中の欲生は佛に約せば則ち廻向心にして發して勅命となる、是を廻向の相となす、至心に望むれば至心はこれ所廻の體なり。『證文』(三)に云く「廻向ハ本願ノ名號ヲモテ十方ノ衆生ニアタヘタマフ御ノリナリ」と。則ち至欲二心を主として佛に約して辨するはこれが爲なり。

問。欲生と廻向と言詮類せざるが如し、今欲生を釋して廻向と爲すは云何、答。『大經』に「至心廻向願生彼國」と言ひ、『觀經』に「廻向發願心」と言ふ、文の當相は俱に衆生に約す、此土入聖の思ひを廻して西方に趣向す、此を廻向と言ふ、故に願生に連續して義大に別ならず、故に本願の欲生の言中に自ら廻向の義有り、問、廻向發願を衆生に約するものは應に經の當分の義なるべし。今佛に約して釋を作すものは何の所據ありや。答。『選擇集』二行章に本づく、廻向不廻向對これなり、次下の文に云々するが如し。

即。以。等。とは二に出體なり、欲生は別體なし、唯だ信樂の義別なり、欲生といふは欲は謂く欲願なり、成就文には願生といふ、凡そ欲願といふは在因期果を義と爲す、これに通別有りて其意同じからず、其通とは若くは聖道、若くは要門、皆不定の境に於て、希望欲求す、即ちこれ不定の願欲なり、別とは弘願眞宗なり、開名の一念に功德を全領し、當果に決し、往生の大利に於て一念の疑慮なし、遙に淨土を期し、定生の想を作す、猶し八地已上の菩薩の願の如し、故に得大慶

喜心と云ひ、廣大難思の慶心といふ、唯これ決定深信なり而して此決定心はこれ在因期果の心、故に願欲の名を得、これを清淨願往生心といふ、清淨願心其體他なし一個の信樂のみ、當果に向ふの義を名けて、欲生といふ。故に信樂爲體といふなり。『摘解』に云く「上に勅命といふは是れ佛に約するの釋、今衆生の欲生の體に約するものと文連續せざるに似たり、按ずるに三心本來衆生に屬することは論なし、其の佛に約する釋は衆生心これ佛の廻向心なることを顯す、既に佛廻施の義明なれば、衆生は但だ領受の義亦顯る、信樂と別なきの義自ら成ず、故に即以等といふ」と。誠。是。等。とは三に簡非なり、自力廻向の濫を揀んで他力廻向を顯はす、方便兩願の欲生義と其異見るべし。方便の願は信樂を缺き、信樂に換ふるに發願廻向を以つてす、自力廻願を名けて欲生と爲す、今此の欲生は信樂を體と爲す、故に自力廻向に非ず、たゞ佛の勅命の然らしむる所、故に名けて不廻向といふ、別途の欲生此に於て分明なり。

然。微。等。の下は二に廣く義旨を顯す、中に四有り、初に然。微。已下は所爲の機相を明す、流。轉。等。とは虛假染汚の因果なり、灑。は漂の義なり、廻。向。心。とは心を實際の理地に安じ、而して上求下化する者をいふ、然らざれば以つて眞淨の廻向となすに足らず、豈に常没の者敢て企て及ぶ所ならんや。

問。經に欲生と言ひ、廻向發願と言ふは、皆自の往生に於てす、利他の義に非ず、今の祖釋は

純ら利他廻向となすものは云何、答。經文は前後の二心に信相、信徳の義あり、若し信相に約すれば、自の往生に於てす、是れ下凡の所起にして利他の大悲心を發すること能はざるが故に、若し信徳に約すれば亦利他の義あり、『散善義』に還相の釋を作すは、果に就きて因に利他の徳を有することを示す、今の祖釋は其信徳の邊に就きて之を佛に歸す、故に純ら利他の義を談す、而も其意は佛の廻向を以つて行者の不廻向を顯し、自力各別の廻願心を遮して三即一の義を決するなり。是故等とは二に法體の成就を明す、即ち此の一段は語を疏の至誠心釋、論の巧方便釋に採る、廻向と大悲とは因果互顯なり是故とは前を承けて後を起す、衆生本來廻向心なし、佛の大悲之が爲に起る、故に是故と云ふ、成就大悲心故の故は起後の言なり、謂く大悲心を成ずるが故に善く諸有海に施す、悲心成就はこれが爲のみ、當に知るべし、以利他等とは三に法界廻施を明す、如來の欲生心とは生れしめんと欲するの心なり、廻施の相即ちこれ勅命なり。乃ち如來の有を以つて衆生の無に與ふ、無中有を生ず、佛の廻向は衆生の廻向となる、即ち不廻向の廻向なり欲生即是等とは四に一心に結歸することを明す、即是とは衆生領受の心、舉體、佛の修成の心なることを顯す、既に佛の廻向心なれば衆生の自力加ふべきやうなし、故に疑蓋無雜と云ふなり。

引 文

〔大意〕 引文中二有り、一に經文、二に師釋なり、該ねてこれを云へば、欲生はこれ他力廻向なることを證す。

經 文

〔本文〕 是以本願欲生心成就文經言、至心廻向願生彼國即得往生住不退轉乃至除五無間誹謗正法及謗聖者已上。

〔校異〕 (一)正依大經(下行)の文。校異なし、

(二)異譯如來會下(大正十一97)の文、校異なし。

〔細釋〕 引文の中に二有り、一に經文、二に師釋なり、經文に二あり、初は正依の文、此中自ら二と成る。初の一句は約佛にして、後は約生なり、約生の中自ら三、初の一句は欲生にして、即得等とは得益なり、後に唯除等は簡機なり、『金剛鐸』に云く「引意は正く約本の義を證して而も約末亦顯るなり、至心廻向の四字以つて下を統るが此文の本意なれば、正く約本の義なり。然れども中に於て約末自ら成ずるは理の當然なり。願生彼國の願は即ち至心に回向したまへる願なり、然れば佛の本願なり、衆生は佛の廻向したまへる願を須ひて己が願とす。其の相は無疑無慮乘彼

願力なり、されば定得往生するなり、此義を上の至心回向中に有す、回向ハ本願ノ名號ヲ以テ、十方ノ衆生ニアタヘタマフ御ノリナリ文證この廻向に應ずる願生といふは聞名信喜の一念なること勿論なり、即ち信心さだまりぬれば淨土の往生は疑ひなくおもふてよるこぶころなり、これを願生とも名く、然れば願生彼國の句は上の信喜一念を重ねて掲げ義を示したることにて、別起の心にあらず、當卷の末に眞實信の精要を括りて信樂一念とし、往生の因を決判したまふにも聞信歡喜乃至一念の文のみを釋して、直に次の即得往生に接して義を示し、更に願生の沙汰に及ばず、願生を論せざるにあらず、本願の欲生は即これ信心の異名なれば別論せざるのみ」と。知るべし。至心回向とは即是れ前後の二心、二心一合して以つて、二用を爲す、信樂發生と往不退轉となり。『願々鈔』(三)に云く「至心廻向ノ四字ハ成上起下トナラフナリ。成上トイフハカミノ信心歡喜を引起スルコト法藏因中ノ至心ヨリ生ス。起下トイフハシモノ住不退轉ノ前途ヲ達スルコトマタ至心ニ廻向シタマヘル如來大悲ノ無緣ノ慈悲ヨリ成セラル、モノナリ」と、見るべし。信樂は受法、不退は得益なり、説は前後すれども其體はは一なり、共に是れ至心回向の所成なり。次に願生等とは、願生の一句は上の信喜を掲げて次の得生に望む、至心回向が信樂を發現し、願は信中に在り、則ち信はこれ願なり、信中の願なれば願即ち究竟す、故に即得往生といふなり、然るに直に經文につけば則ちこれ行者に約して説く、行者に約すといへども、決して自力希求の心に非ず、

既に聞信歡喜と説く、機受の信相茲に已に盡く、至心回向其中に従ふ、是れを開きて釋尊巧みに三一開合の旨を示す、則ち二心は信心の體徳を顯はす、高祖其の所由を示すが故に他力の轉聲を施し隨つて成上起下の義を成するなり。得益と簡機の文亦約本釋の義を成す。下機の得益は、佛の回向に由るの義を、愈々明了ならしむるが故なり。

又言愛樂等とは如來會の文にして、機受の欲生は其體別なく、信樂を以て欲生の體と爲すの義を助顯す。詳しくは『對問記』の如し、中に於て所有善根廻向は經文當分は衆生に約し、今は「給へり」の點發を施して佛に約し給へり。『頂戴錄』には此句を釋して「所有善根回向は即ち是れ相續の念佛なり、讚に云く、眞實信心ノ稱名は彌陀廻向ノ法等と此謂なり、是の如く相續念佛して恆に安樂淨土に往生せんと思ふ、之を願生無量壽國と曰ふ、斯れ乃ち欲生心なり」と云へり。蓋し今の取らざる所なり。

師 釋

〔本文〕淨土論曰、云何廻向不捨一切苦惱衆生心常作願廻向爲首得成就大悲心故。乃至一心提正直進不得聞彼人語即有進退心生怯弱廻顧落道即失往生之大益也。已上。

〔校異〕 (一) 論註(下極)の文、校異なし、

(二) 論註下(三極)淨入願心の文、(イ)又云の云『寛文本』は言に作る、(ロ)論曰の二字『論註』の原文になし

(三) 淨土論(母)の文、校異なし。

(四) 散善義(母)の文、(イ)又廻向發願生の願の下に原文は願の字あり、(ロ)異學の學、『正保本』は覺に作るは形誤なり。(ハ)一心捉の捉、『寛永』、『正保』二本は疏文の如く投に作る。餘本は今の如し、『本願寺本』、『報恩寺本』には右にトテ、左にトウの假名を附す。

〔細釋〕 二に師釋なり、師釋の中二、一に『論註』、二に經疏なり、『論註』の三文は通じて他力廻向の義を顯はし、至心回向の句に應ず、中に於て三文あり、初一文は立にして、後二文は成なりとは如來の回向を立するが故に、即ち『論』及び『註』は共に衆生に約す、今は其本に據る、是れ推功歸本の故に助聲見るべし、云何等とは、總じて廻向の義を明す、回向有等とは別して二種の相を明す、往還はこれ衆生の出入にして回向は即ち如來の所回なり、己功德とは佛の功德を指す、他の衆生に對するが故に己功德といふ、還相等とは生後の利益なり、回向とは若し註の當相にかば廻施向道の義にして、祖意につかばこれ廻自向他の義なり。若往若還等とは總じて二種を結して佛の大悲に歸す。

又云淨入等の已下の二文は他力廻向を成す、中に於て初は他力の源底を明す、云何が明すとならば、三種成就は以つて事理、教義、人法、體用、因果等の諸法門を統べ、其法門悉く如來の願心より流出し、恆に如來願心の爲に攝持せらる、是故に衆生所有の擧體が如來の所有に非ざるなく、衆生は則ち本無にして所有あるは願心の廻向に由るが故なり。且く一事に就いて之を言へば、不虛作住持功德の如き、値遇の因や、滿徳の果や、因果皆佛の所成なり、故に願力と曰ひ、此意を擴むるが故に三種成就願心莊嚴と云ふ、當に知るべし、淨入願心は他力廻向を成ずること。

又論曰出等とは第三文にして所成の益を擧ぐるなり、『摘解』に『仰信錄』の説を評破して、更に自義を述べて云く「第三文は祖意知り難し、若し、證卷の引用に同じて之を解すれば上二文所明の佛廻向所成の益を示す、即ち行者の還相の果徳なり、文に以本願力廻向故と云ふもの(若し本佛廻向と爲さば此文穩かならず)以て見るべし、この中に行者の往相廻向の義自ら之を攝す、果既に願力廻向なれば、その因何ぞ自力の造修ならん、この文若し佛に約してこれを解すれば、上文果淨の攝化作用の相にして、上の還相の文と相映してその相を詳かにするのみ、二義の中に前を正と爲す、衆生の往還既に本願力廻向なり、何ぞ行者造修の廻向を用ひん、故に此を以て上の約佛の廻向を證す」と。佳し、

光明寺和尚等とは二に經疏なり、此中に二、一に出文、二に眞知已下は釋意なり、初はこれ廻

向心釋に出づ、今は廻向發願は如來と衆生とに通ずることを證し給ふ、『摘解』に云く、「疏釋は『論註』に本く、故に自ら以つて論文を成す、何を以て『註』に本くことを知る、謂く還相の義を明す文は全く『論註』に依る、往相の釋を推知するも亦同例なり」と。好し、又廻向發願生者とは廻願の人を標す、者字は人者にして牒者に非るなり。必須等とは人に對して廻願の相を示す、謂く機上別起の願心に非ず、唯だ如來眞實の回願を用ひて決定得生の想を作すを弘願の廻向發願と爲すなり、須とは深心にして作得生想とは義別の欲生心なり、既に義別なれば、此心深信由若金剛といふなり、不爲等とは金剛の義を示す、唯是等とは疏意は機の用心を示し行者を勸誡す、今は則ち動亂破壞せられざるの義を述ぶるなり。

釋 意

〔本文〕 眞知二河譬喩中(總標)言白道四五寸者(牒)白道者白之言對黑也。白者即是選擇攝取之白業往相廻向之淨業也。黑者即是無明煩惱之黑業二乘人天之雜善也。道之言對路、道者則是本願一實之直道、大般涅槃無上之大道也。路者則是二乘三乘萬善諸行之小路也(釋白道)。言四五寸者喩衆生四大五陰也(釋四五寸)。言能生清淨願心者獲得金剛眞心也、本願力廻向大信

心海故不可破壞喩之如金剛也(釋清淨願心)。觀經義云、道俗時衆等各發無上心。乃至又云言金剛者即是無漏之體也已上(引証)。

〔校異〕 私釋には校異なし。

- (一) 玄義分(行)の文。(イ)四流の流の下十七句を乃至す。
- (二) 序分義(三好)の文。(イ)從慈尊の從、『高田本』に「タノミタマツル」の訓を附す。(ロ)勉斯長歎の勉、『高田本』、『澁谷本』は免に作る、歎は『寛永』、『正保』二本は嘆に作る。
- (三) 定善義(弁妙)の文校異なし。

〔細釋〕 二に釋意、次上引文の義意を釋して、欲生はこれ佛廻向の大信なることを成するなり。謂く二河譬は第三心を釋する中に出づ、上に具さに引くが如し、次上の引文中に正直進と云ひ、回顧落道といふもの自ら譬說の意を含む、故に今、譬說の合法の文を牒して以つて欲生の義意を釋するなり。

抑々欲生は別體なく、唯是れ信樂中の義別のみ、此旨を顯さんと欲して先づ欲生を釋して佛の勅命と爲す、然に所乗の願力と能乗の信心と其體若し一に非れば法を全うして機を成するの他力回向の義未だ明瞭ならず、是を以つて譬說の中兩節を設け、願力之道を全うして衆生の信心を成

することを釋顯するなり、即ち衆生の信心全うしてこれ願力の道、而してこの白道は娑婆の東岸より極樂の西岸に徹し、唯此の一道直に彼國に到る、唯信正因、更に別意の義なきこと亦隨つて明確なり。

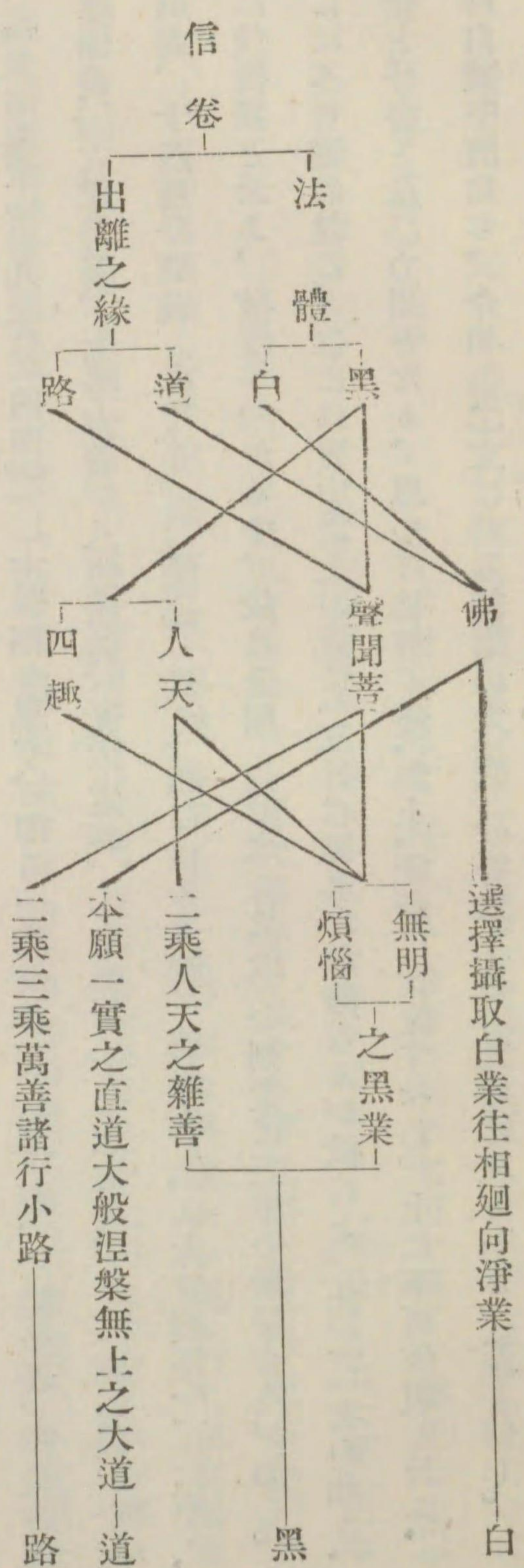
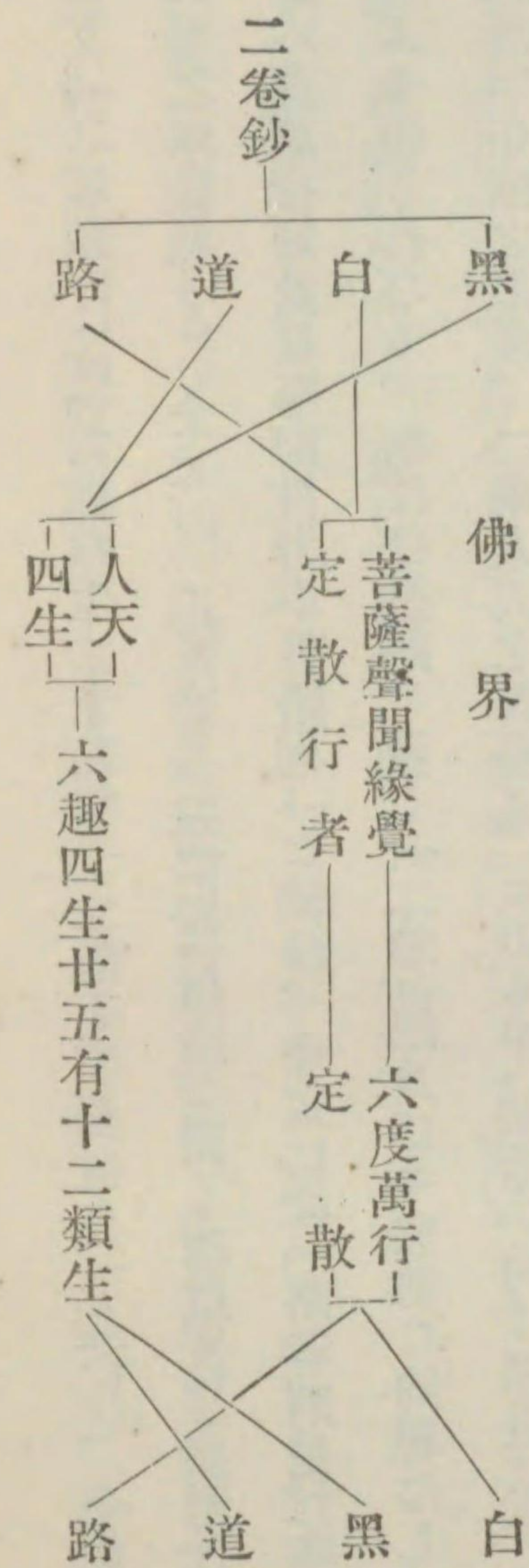
又疏の譬説は第三心の終に在つて前の二心に通ず、弘願信心は三心即一心の故に、守信防難の細喻總じて三心の通喻を成す。今釋亦然り、第三心下の釋意、自ら三心に通じ、三心即一、疑蓋無雜の信樂を成するなり。『仰信錄』に云く「問ふ、勅命と願力の道と體一の義云何。答ふ、譬説に據れば、喚聲と白道と體は異に似たりといへども白道に乗ずるは即ち願意に順するなり、故に白道を除いて外は勅命有るなし」と。蓋し佳し。

二河譬喻中とは總標なり、言白道四等とは別釋なり、此中兩節あり、初は白道四五寸を釋し、次に清淨願心を釋す、初の中二、一に白道を釋し、二に四五寸を釋するなり、今は初めなり、白道等とは黑白の道路を分ちて示す、『二卷鈔』(下十九)にも亦云云せり。この一段を釋するにつき古來の諸家、異説紛紜たり、粗ば『摘解』に出し、且つ評するが如し、今謂く、今文と『二卷鈔』とを比較するに稍々趣を異にす、今彼此を對照して四句を作り、通じて二者を解すべし、一には白道、謂く本願一實の大道なり、今文に「白者即是選擇攝取之白業、往相廻向之淨業也」と云ひ、又「道者則是本願一實之直道、大般涅槃無上之大道也」と云ふものこれなり。二に黑道。謂く六道、生死の因

果なり。『二卷鈔』には「六趣四生二十五有十二類生黑惡道也」と云ひ、今文には「無明煩惱之黑業二乘人天之雜善也」といふものこれなり、三には白路。謂く聖道及び要門なり。『二卷鈔』には「白者則是六度萬行定散也斯則自力小善路也」と云ひ、今文には「路者則是二乘三乘萬善諸行之小路也」といふものこれなり。四には黑路、謂く『二卷鈔』及び今文並に的釋なし。然れども今文に「黑者即是無明煩惱之黑業、二乘人天之雜善也」とある中、初の一句は黑道に合し、第二句の「二乘人天之雜善也」はこれ黑路に合するものと云ふべし、以上四句の中、善惡共に其大に就けば道と云ひ、其小に就けば路と云ふ、而して善惡を名けて黑白といふなり。然るに今二乗を以つて黒に屬し、次下には白路に屬す、又今文には人天を善に約し、『二卷鈔』には惡に約す、この義云何と云ふに、蓋し二乘人天應に與奪の義有り、二乗とは與へて之を言へば宜しく白路に攝すべし、見思を斷じて三界を出づるが故に。奪うてこれを云へば五惡趣に屬するが故にこれ黑惡なり。斯くの如く攝屬異を成するが故に前後、彼此の釋相違するなり。四句ある中、今は餘の三を簡びて以つて、白道を顯し給ふなり。

正しく今文を釋する中、白之言等とは白黑對なり、白黑とは是れ淨穢の義を釋す、白者即等とは白と道を釋して各々二句あり、初釋は白中に願と力を分つ、これ當相に義を辨するなり、即ち初句の撰擇攝取はこれ因願にして、後句の往相廻向はこれ其の果力なり。一合して願力の道と

いふものこれなり、即ちこれ名號、名號はこれ佛法、佛法は無上にして諸垢の外に在り、故に白淨といふ、白はこれ清淨を義と爲す。業とは正定業の如し、黒者等とは黒とは垢穢に名く、無明等とは正しく染法を指す。是れ黒道の義、『二卷鈔』には黒惡道といふにもものこれなり。二乗等とは二乗は見相を斷すと雖も、猶ほ無明を存し、佛果を期せず、故に人天に共じて黒中に攝屬す、乃ち黒路の義なり。道之言等とは道と路を對釋す。大達を道と爲し、小徑を路と爲す、共にこれ能通、爲因を義となす。本願一實等とは約對して勝を示す。初句は教に約して餘の方便迂廻に對するが故に本願一實之直道といふ。後句は益に就きて彼の小果に對し、以つて大果を示して大槃涅槃無上之大道也といふなり。二句の意は總じて聖道要門を以つて方便權假となし、これに對して其の勝を示す。路者等とは義、白路に當る、汎く聖道要門を攝す。『隨聞記』に『二卷鈔』と今文につ



言四五寸等とは後に四五寸を釋す。『二卷鈔』下に云く「四五寸者四言譬四大毒蛇也、五言喻五陰惡獸也」と、蓋し今と同意なり。『六要』二本(三)に今文を釋して「所言信心白道廣大無邊實無邊際、就此思之、凡夫行者所發信心由他力故是雖廣大貪瞋覆故謂其心微實非狹小、是於四大五陰所成凡身之上所發心故云四五寸、若依此義有「此釋歟」と云へり、好し。當に知る上は信體に約し、今は機相に約するなり。『樹心錄』には「道體は一形相續身なることを喩ふるなり」と云ひ、『仰信錄』には『安心決定鈔』の色心二法三業四威儀の文を引きて、「四大、五陰の色心は即ちこれ南無阿彌陀佛なるが故に四五寸と云ふ」と釋するが如きは、依用すべからず。言能生清淨等とは後に清淨願心を釋す。此中自ら二、一に直釋、二に引證なり、獲得とは能生

の意なり、生は謂く發生にして、機の自發に濫するが故に簡んで如來廻施の義を顯す、金剛真心とは清淨願心を釋す、『二卷鈔』(下)に云く「言能生清淨願往生心者發起無上信心金剛真心也、斯如來廻向之信樂也」と。乃ち喩を帯びて名く、謂く信樂は其體佛心にして堅牢移らず金剛の如きが故に貪瞋水火の中に處して壞せず、二別三異の喚を聞きて退せず、一心に直に進んで西岸に到る、廻向の信樂に非ずして何ぞや。本願等とは金剛不壞の所由を示す、乃ち今の願心は他力廻向の信心を領し、自力希求の願心に非ざることを成す、茲に於て三心即一心の義揭焉たり。

觀經義云等とは二に引證なり、即ち次上の金剛真心の義を證明す。金剛に二有り、云く法と喩となり、次上の釋はこれ喩にして、次下の引文中の第三は其法なり、凡そ世間の金剛に諸徳を具す、『大乘義章』第九(大正四四⁶³⁸)に十四徳を擧ぐ、即ち一能破義、二清淨義、三體堅義、四最勝義、五難惻義、六難得義、七勢力義、八能照義、九不定義、十主義、十一能集義、十二能益義、十三莊嚴義、十四無分別義これなり。『述聞』に云く「然に世の金剛、徳義多し、『大日義釋』一に云く、梵に伐折羅と云ふ、破壊すべからず、故に金剛と云ふ、世間の金剛實に三事の最勝有るが如し。一には不可壞の故に、二には實中之上の故に、三には戰具中の勝なるが故にと。此三は次の如く、自體と分齊と及び力用となり、以つて佛智不變、無上、能斷に比況すべし。上に不可破壞と云ふ、これ自體堅固なり、今初の二文は則ち能斷の力用、分齊無上自ら其中に在り」と。蓋し佳し。

初は歸三寶偈の文なり、無上心とは助聲の意に據れば以つて常途に約す、若し『二卷鈔』上(下)に「無上心ヲオコセ」と點發あるが如きは、則ち別途の義なり、四流の下十七句を略す、轉用して以つて、正受等は機受の心となし、次上の共發等に接して其の解釋をなすなり、四流とは『六要』三本(經)に釋して云く「言四流者三界見思諸惑是也、一者欲瀑流有二十九物五部三毒、四諦、下疑、十纏是也、言十纏者無漸、無愧、嫉、慳、悔、眠、掉舉、惛沈、謂之八纏、加忿與覆云十纏也、二者有瀑流有二十八物色無色界五部、貪、慢、同界四諦各有疑也、三者見瀑流有三十六物苦下有五、所謂身見、邊見、戒取、見取、邪見、集下有二、除身、邊、戒、滅諦所除全如集諦、道下有二、加戒爲異合爲十、二、三界皆同故有此數、四無明瀑流有十五物、是以三界五部之癡合成此數、謂之百八煩惱而已是名四瀑流俱舍論意也」と。知るべし、正受金剛心は本偈の意によれば堅の金剛心にして所歸者に約す、今は轉用して横超の金剛心となし、行者に約す、乃ち佛心を受くるの謂なり、相應一念後とは慶喜一念相應後と同じく、正受の一心、佛智に相應するなり、一念とは相應の剎那をいふ。後とは未信の前に對す、『二卷鈔』上(下)の點聲見るべし。果得等とは必定して涅槃を得るをいふ。又云真心等とは次に欣淨縁の文にして、『經』の願我未來等の文を釋す、即ち通請中の所明なり、今は其下の別意を開く。真心徹到とは、前の金剛心を指す、和讃に云く「真心徹到スルヒトハ、金剛心ナリケレバ、三品ノ懺悔スルヒト、ヒトシト宗師ハノタマヘリ」と。此意なり。此は如實

の厭欣を勸む。但無等とは階ふと雖も、甚だ難なることを明す、自非等とは真心の能施を明す。若不等とは他力に托すべきを明す、慈尊とは疏は釋尊を指し、今意は總じて二尊に通ず、二尊の遣喚によつて清淨願心を生ずるが故に。

又云言金剛等とは後に寶地觀の文なり。雜色金剛の文を釋す、又水觀疏(五)には下有金剛七寶金幢の文を釋す、見るべし、無漏之體とは無漏即ちこれ體なり、金剛の信心、全體即ち佛智なり、他力廻向の真心の故に今引きて其本を顯すなり、法金剛につきては『述聞』に法蓮華を例に出して釋せり。往見せよ。

結 示

〔本文〕 信知至心信樂欲生其言雖異其意惟一(正立)。何以故三心已疑蓋無雜故眞實一心(明由)。是名金剛眞心金剛眞心是名眞實信心(會名)。眞實信心必具名號名號必不具願力信心也(對辨名號)。是故論主建言我一心、又言如彼名義欲如實修行相應故(引證)。

〔校異〕 ①如、『寬永本』には之を脱す。

〔大意〕 正しく三心即一を明す中三有り、一に總標、二に別辨、三に結示なり、中に於て總標、

別辨は上に竟りて今は三に結示なり。

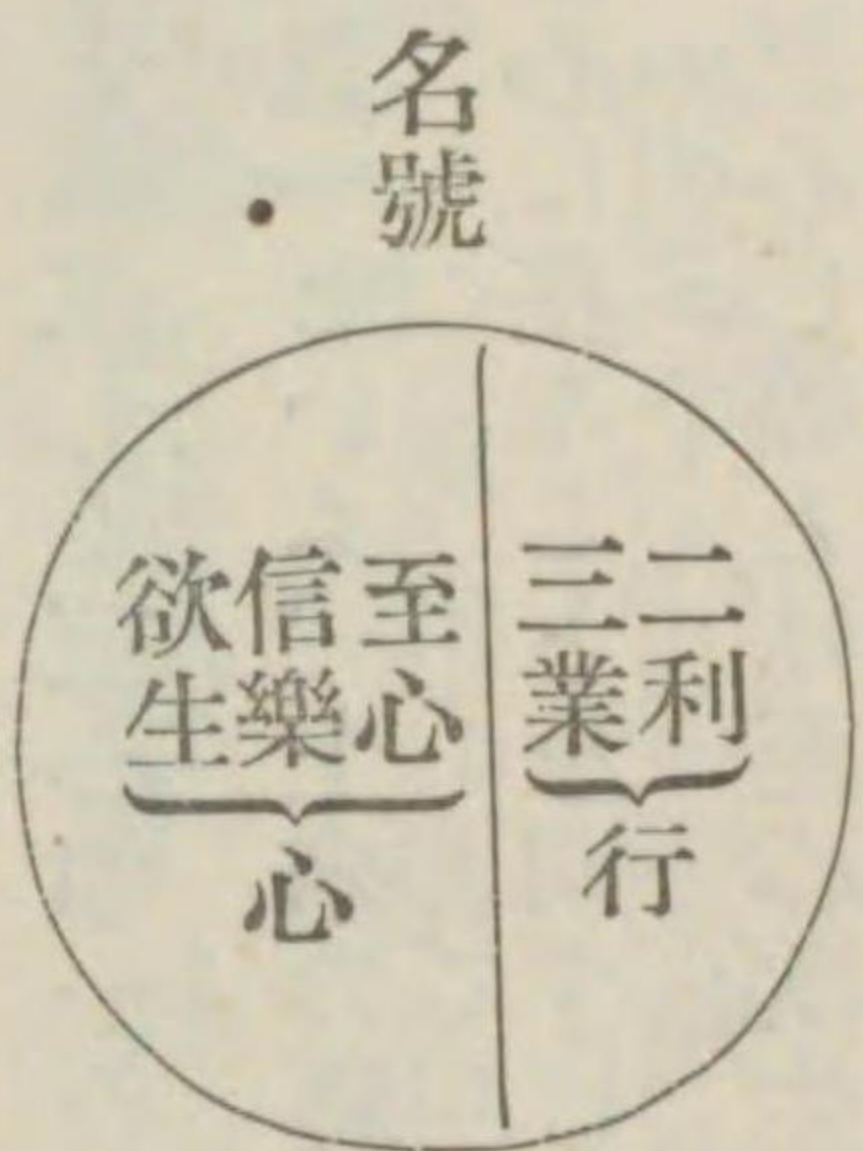
〔細釋〕 結示の中二、一に正結、二に是故已下は引證なり、初の中亦二、一に正く即一を明し、二に名號に對辨す、初の中三、一に正立、二に明由、三に會名なり。

信知等とは正しく三心即一の義を立す。三名の所詮各々異なるが故に言異と云ひ、機受の信相唯一の故に意一といふ、上來の釋義、約佛約生、橫說、豎說、其義廣なりと雖も、要は衆生の機受唯是れ信心に在ることを明すに在り、故に衆生に約して三心即一を結するなり、何以故等とは由を明す、三心已等とは至心欲生の二心、一信樂と爲る、其の二心に於て疑蓋無雜と云ふものは二心は是れ佛心にして自力に非ざることを顯し、至欲の二心即ち一信樂たることを示す、疑蓋無雜はこれ信樂の義の故に斯を眞實の一心と爲すなり。是名等とは異名を會す、前の眞實一心とは、佛の眞實を領するのみにして二心なきを顯す。論主の言を出すは正しく前の徵に答ふるなり。金剛眞心とは上に引く『玄義』、『序分』の文に依りて、其體佛智なるを顯し、亦た一無疑の義を成す、眞實信心とは『禮讚』(三)に依りて、佛の眞實を領して深く信するの心なることを顯し、亦一無疑の義を成するなり。

上來、三一問答の字訓釋及び法義釋につきて考究を重ねたり、然るに古來此の一段を釋するにつきて二說あり、即ち都名信樂說と別取信樂說とこれなり、今少しくこの說につきて述ぶる所有

るべし。

先づ初に都名信樂説につきて其の大意を叙述すれば、此義は主として空華先輩の主張する所に於て信樂に意別(別)の信樂と意一(總)の信樂とを立て、機受の一心は、其中疑蓋無雜の意一の信樂なりとす。この意一の信樂を都名の信樂と名くるなり、更に其説を詳しくすれば、抑々本願成就文に「聞其名號信心歡喜」とあるは、所聞の名號が行者の心中に満入するが故に信心歡喜の大安堵心を成するなり。而して其の所聞の名號は如何なる法ぞと云ふに、この名號を成するには能修の心と所修の行と、心行具足して成就するなり、その能修の心とは至心信樂欲生の三心にして、所修の行とは、二利三業の行なり、即ちこれを圖示すれば左の如し。

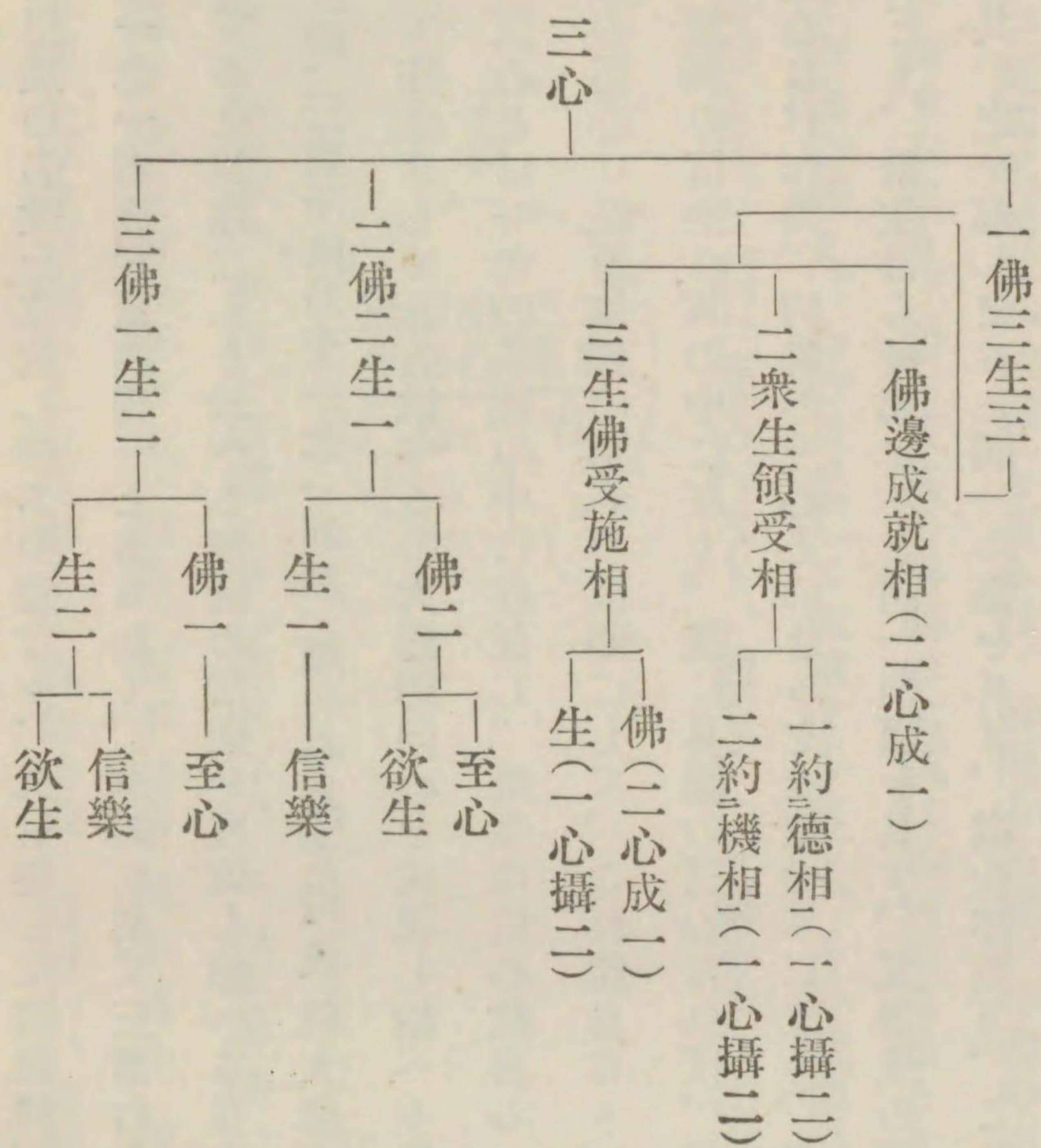


能修の心の中、至心とは曩の至心釋下(三三)に「如來悲憫一切苦惱衆生海、於不可思議兆載永劫、行菩薩行時、三業所修一念一刹那、無不清淨無不真心、如來以清淨真心、成就圓融無碍不可思議不可稱不可說至德」とある如く、眞如法性に隨順し、清淨眞實の心を以つて、三業の行を修し

不可思議の名號を成就し給ふの意なり、又信樂とは信樂釋下(三三)に「如來行菩薩行時、三業所修乃至一念一刹那疑蓋無雜」とある如く、永劫に於て三業行を修し、この行に由りて、十方衆生が往生するに間違なしと云へる無疑の信樂を成就し給へるなり、又欲生とは欲生釋下(三三)に「行菩薩行時、三業所修乃至一念一刹那、廻向心爲首得成就大悲心故」と云へる如く此の行を衆生に廻向して往生せしめんと欲するの大悲廻向心を成就し給へるなり。この因行能修の三心と、果上成就の三心とは一句の名號の中に存在し、衆生は信心歡喜の一念にこの名號を領得するなり、即ち機受の信心は疑蓋無雜の都名の信樂にして、これ能具なり。これに對して具徳の三心は所具と成る。意別の信樂は其の中に在り。既に具徳の三心なれば、行者自身の機相上には佛の如き廣大なる三心なれば、約佛の三心そのまゝを全領せるにより、衆生に於ては法性隨順の至心は發起せざれども、衆生自ら發起せると同一の徳を具す、又衆生の機相には、佛の如き廣大なる信樂は無ければ、之を起したると同一の徳を具す、欲生亦然り、これを衆生具徳の三心と云ふ。その具徳の三心を願文に標示し、かゝる廣大なる三心を具せるが故に、機に於て特に三心を發さざれば、唯無疑の信樂一つにて往生することを得ると知らしむる故願文の三心を標徳の三心と云ふなり。今、合三爲一とは、その標徳の三心を合して機受は唯信樂の一心のみにて往生ぞと示し給へるなり、これを都名の信樂と云ふ。都名の信樂とは三心の名を統ぶる信樂の意にして、即ち標徳の三

心を統る無疑の信樂をいふなり、故に今文の如きも如上の意味に解するものと知るべし、以上都名信樂説を略説し竟る。

次に別取信樂説とは、『述聞』、『對問』、『仰信錄』等の主張する所にして、今暫く『仰信』の説を中心として、紹介すべし、先づ初に其の大綱を圖示すれば左の如し。



別取信樂説とは、合三爲一を以つて本願の三心の中、前後を中間の信樂に合すと解するなり、即ち願文には至心、信樂、欲生の三心を誓ひたれども機受は前後の二心を合したる中間の信樂一にて往生を得といふなり、今少しくこの説を詳述すれば、この義に佛三生三、佛二生一、佛一生二の扱ひあり、先づ初の佛三生三の中に佛邊成就の相、衆生領受の相、生佛受施の相の三の扱ひ有り。今之等に就きて順次に説明を加ふべし。

初に佛邊成就の相とは二心成一これなり。二心とは至心、欲生にして、成一とは信樂これなり。至心とは眞實、欲生とは大悲にしてこれ佛の悲智願行をいふなり、この悲智の願行に由つて、能く衆生の往生を成じ、衆生の往生に於て一念の疑慮なく、明丁に決着するを佛の信樂と爲す。信樂釋に云く「如來行菩薩行時三業所修乃至一念一刹那疑蓋無雜」と、此信樂は即ち二心に由りて成じ、二心を能成と爲し、信樂を所成と爲す、故に二心成する處信樂自ら成ず、二心成一なること思ふて知るべし。

次に衆生領受の相とは、即ち一心攝二なり。『略書』(註六)に云く「一心之中攝在至誠廻向之二心」と。蓋しこの義なり。而して此に自ら二あり、一に徳相に約し、二に機相に約す。初に徳相に約すとは、前後の二心は悲智願行にして、無疑の一心はこの徳相を攝して往生の因を成ず、故に信樂釋(註六)に「言信樂者則是如來滿足大悲圓融無碍信心海是故疑蓋無有間雜故名信樂」と云ふ、此

中に満足大悲はこれ悲にして、圓融無碍はこれ智なり、又至心の下に經を引きて佛の因行を明し、欲生の下に註を引きて佛の因願を明す、此の願行を全うして一の名號を成ず、故に名號は願行を具足す、此願行具足の名號は聞信の一念に行者の有となる、是を報土正定の因と名く、こゝを以つて中間の信樂を其機相となし、此信樂は前後の二心を攝するなり。『執持鈔』(卷三)に「コノ能歸ノ心、所歸ノ佛智ニ相應スルトキ、カノ佛ノ因位ノ萬行、果地ノ萬德コトノクニ名號ノナカニ攝在シテ十方衆生ノ往生ノ行體トナレバ阿彌陀佛卽是其行ト釋シタマヘリ」とあるは、今と其意同じ。

次に機相に約するとは、三重出體及び字訓釋の意に依りて一心攝二を解するなり。三重出體の義は上に述べたるが、此義に於ては、三重を左の如く見るなり。

- 一、本末相望 名號——本(所依體)
至心——末
- 二、體相相望 至心——體(當體體)
信樂——相
- 三、體義相望 信樂——體(當體體)
欲生——義

上圖に示すが如く、三重出體の中、至心、信樂、欲生の三心を相望するとき、至心は信樂の體なれば、至心は信樂の相に攝まり、欲生は信樂の義別なれば、體の信樂に攝せらる、即ち機受は一心攝二の信樂にして、往生の正因は、この一心にて足るとの意を示し給ふなり、又字訓釋に、至心を眞實誠種之心と訓じ、信樂の信の字を眞實誠滿之心と訓ず、これ至心の二字を信樂の信の字に攝するの意なり。又信樂の樂の字を欲願愛悅之心と訓じ、欲生の欲の字を願樂覺知之心と訓ず、これ欲生の二字を信樂の樂の字に攝するの意なり、斯く體の至心を相の信樂の信の字に攝し、義別の欲生を體の信樂の樂の字に攝し、巧みに一心攝二にして、三心即一なるの旨を明し給へるなり。後に生佛受施の相とは、佛は二心を以つて一心を成じ、衆生は一心を以つて二心を攝す、故に生佛の受施は只信樂に在り、『行卷』(卷三)に六字の三義を釋する中に、卽是其行は即ち所施の名號にして、發願廻向はこれ能廻の心なり、歸命は正しく廻施の相狀となす、歸言歸稅とは左訓に「ヨリカ、ルナリ」と云ふ、即ちこれ信樂なり、當に知る、歸命とは歸せよの命なり、これを佛廻施の相となす、後に必得往生を釋して、「聞願力」といふは、聞即信にして衆生領受の相なり、故に廻施と領受とは只一の信樂なるのみ、生佛受施の相以つて知るべし、猶ほ佛二生一、佛一生二の扱ひは、茲に左迄必要に非ざれば之を略す。

以上都名信樂説と、別取信樂説との二義を叙述したり、蓋しこの二説各一長一短ありて卒爾に

其の殿最を斷じ難し、即ち都名説は、今の結示の文に親しと雖も、『略書』の一心攝二の文、及び『散善義』の祖點の意に疎し、別取家は今文に疎しと雖も、『略書』及び『散善義』の文に親し、『述聞』には、都名説を評して「但に文に違するのみに非ず、亦道理に非ず、三箇の無疑は主持なきが故に」と云へり、今謂く兩説有る中、別取家の説を秀れたりとす、前來の講述また大略此義に依りて叙べたり、讀者此意を諒せよ。

眞實信心等とは、名號に對辨して明す、對辨の一段は何の所顯有りや、『述聞』に云く「此は所應ありて人の惑を釋くが故なり、云何が應ずる、此に遠近あり、遠とは第二卷の如きは行が信より先なるに似たり、近とは上文に尊號爲體と云ふが如し、今の名號に同じき時は亦これ信不具なるものに似たり、故に今之を釋す」と。『對問記』に云く「是れ乃至十念の説意を顯明す、謂く上に三心即一の信樂を以て眞因となすを明す、然るに願文に乃至十念と説くが故に、若しこれ生因ならば信樂は猶ほ未滿なり、若しこれ非因ならば何ぞ更に之を説くや」と、『摘解』に二説を評して云く「兩説は然るべしと雖も、所辨は三一の義に關する所なきに似たるもの、恐らくは未だ祖意を盡さざる所あらん、末卷(釋)に云く、故知一心名如實修行相應止、三心即一心之義答竟と、上の信樂の下に特に如實修行の文を引くは、蓋し亦至欲二心を簡びて、此信の時に大行を具するを顯し、以て正因を成するの義當に之れあるべきか」と、蓋し佳し、必具名號等とは、『本願鈔』(釋)に「コノ

文ノコ、ロハ、眞實ノ信心ニハカナラス名號ヲ具ストイフハ本願ノヲコリヲ善知識ノクチヨリキ、ウルトキ、彌陀ノ心光ニ攝取セラレタマツリヌレハ攝取ノチカラニテ名號ヲノツカラトナヘラル、ナリ、コレスナハチ佛恩報謝ノツトメナリ。名號必不具願力信心也トイフハ名號ヲトナヘテコノ名號ノ功力ヲモテ、淨土ニ往生セントオモフハ名號ヲモテ、ワカ善根トオモヒ名號ヲモテワカツクル功德トタノムユヘニ如來ノ他力ヲアフカサルトカニヨリテ、マコトノ報土ニムマレサレハ名號ニハカナラスシモ願力ノ信心ヲ具セサルナリト釋シタマヘリ」と釋せり、已に明釋有り、異求すべからず、謂く稱名に、如實と不如實と有るは、別して信の具不具に職由す、應に知る、唯信生因は前後心に非ざることを。必不具とは『六要』三本(釋)には未必に作る、『本願鈔』にもカナラスシモと云ふ、自らこれ不必の意なり、思ふに祖意亦二義を存す、本文と助聲を推するに意自ら異なるが故に。謂く、本文は唯不如實念佛につきて必不と言ひ、助聲は通じて如實と不如實の稱名に約して「必シモ」と言ふ、已に知る、信には必ず名號を具し、而して名號は是れ信體露現なり、以つて唯信生因を結成するなり、名號とは祖典の中、或は法體大行を指して名號と云ふ、行卷に名號正定業(釋)と云ふが如きこれなり、或は衆生の稱名を指して名號といふ、行卷(釋)に名號定散對と云ひ、化卷本(釋)に際名號已外四種是也と云ふが如きこの類なり、今此中の名號は稱名を指すものなることは上の『本願鈔』の釋に依りて明かなり、然るに『六要』三本(釋)に今文を釋して「眞

實信心必具等者問所發信心縱爲眞實何必其中具足名號、又六字中言南無者即是歸命即是安心、何云名號不具、願力信心。答言信心者是能歸心對所歸法所發信也故發信心必具名號乃至又縱唱名若無信心難得往生經云至心信樂欲生、依信可生其理灼然、稱名之人未必悉具眞實信心」と云へり。この中初は名號を以つて所歸の法體となす、これ上の『本願鈔』の釋と相違するに非ずやと云ふに、謂く、名號と稱名と左右ありと雖も、其理別なし、信心は所歸の法體を全うするが故に、亦應に念佛すべきの徳あり、咨嗟の名號は行者の信不に由りて信具不の不定あり、衆生の稱名も亦如不如に由りて信の具不あるなり、されば『六要』の釋も亦此處に含意さるゝものと謂つべし。

是故等とは二に引證なり、此中に二文有り、引意につきて異論あり、『仰信錄』に云く「此中に二文あり、初の文は三心即一に應じ、後の文は信必具の行に應ず、三心既に疑蓋無雜なるが故に、其言異なりと雖も、其意惟れ一なり、故に論主は我一心と言ふ、是れ論註に依りて造語して今の義旨を結成す、又言等とは論註に云く、與此相違名如實修行相應等と。今も亦彼意に依りて一心即是れ如實修行なることを結成す、眞實信心必具名號の故に、一心を名けて如實修行となす、下に云く「故知、一心是名如實修行相應」と、此意なり」と。『摘解』に云く「二文同じく三即一及び必具名號を證す、初の文は、註は既に讚嘆門の行に對す、論主建言を引き、而して對三の義に據るに非ず、今高祖は何ぞ註の意を取らざらん、應に知るべし、初の文は必ず必具名號の義を證するの

意あるべし、之に准するに、後の文も亦當に三即一を證するの意あり、上の信樂釋の下に此文を引くは正しく其意に據るなり、此文云何ぞ三即一の義を成するや、謂く、如實修行とは如彼名義と言異義同にして、如彼名義とは、名號の義理に契當するの謂なるが故に、即ち名號を全領するの義を成す、契當は即ち全領なるが故に、信心を名けて如實修行と爲すことを得るなり、故に此文を引きて必具名號を證するは、正しく信心が所聞の名號を領するに據る。然り而して信體既に名號なれば、亦必ず口業に流出すべし、此を必具名號と云ふなり（名號の言は能所を兼ね）、而して名義に契當するは即信心の義にして、至欲二心の義に非ず、故に鸞師釋して三信心となす、此信心は名號を全領して餘すものなし、豈に信心正因と言はざらんや、何ぞ他法を加へて因を成すと爲んや、此義に據りて三即一の證を成するなり」と、今謂く、『仰信錄』の説は二文有中、初文は三心即一の義に應じ、後文は必具名號に應ずとなす、『述聞』及び『略讚』の説、略これと同じ『摘解』の説は、二文共に三即一と、必具名號の義を證すとなす、斯く二説有る中『摘解』の義を好しとす。

結 嘆

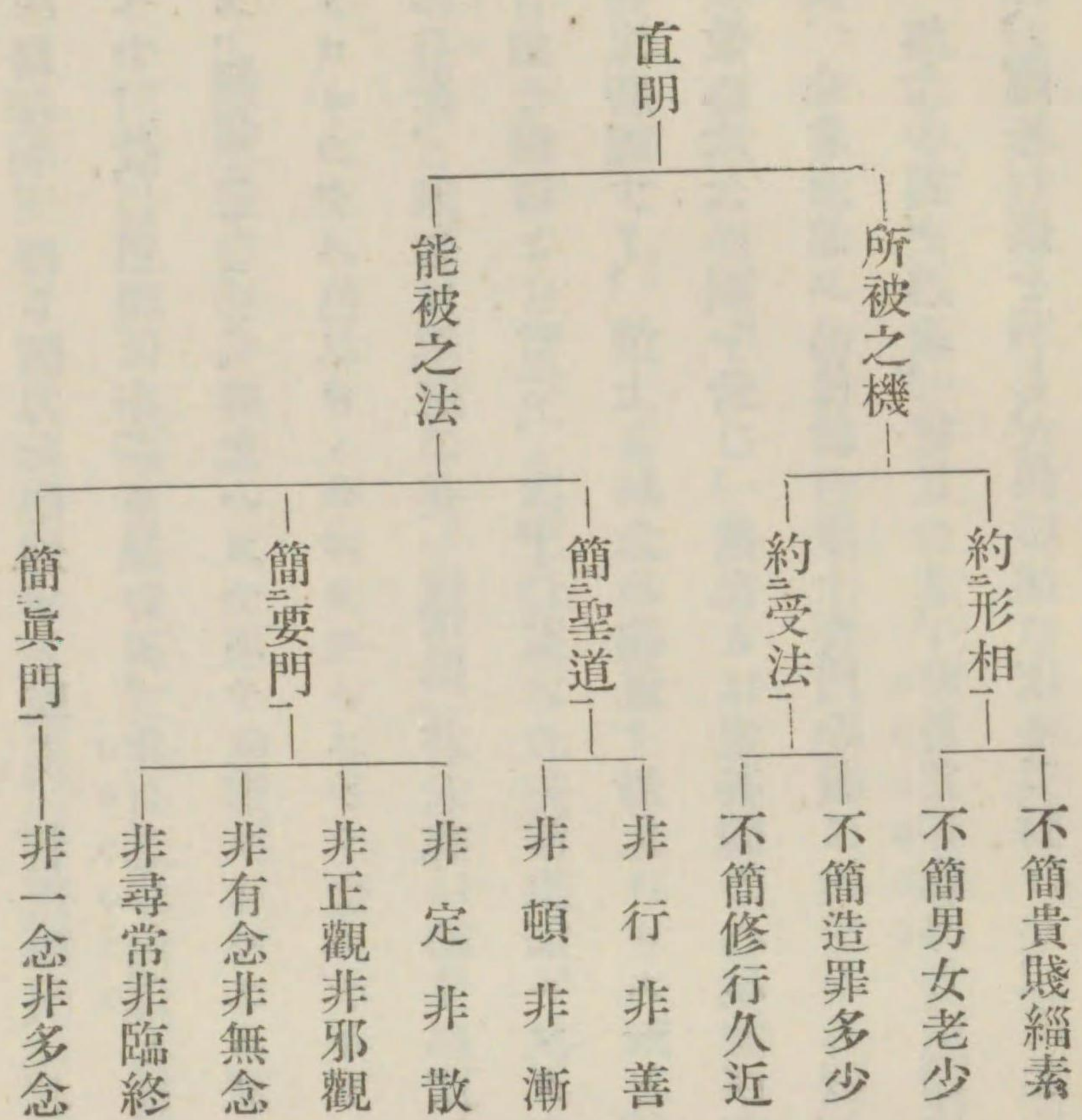
〔本文〕 凡按大信海者（牒上成一）。不簡貴賤縑素、不謂男女老少、不問造罪多少、不論修行久近、非行、非善、非頓非漸、非定非散、非正觀非邪

觀、非有念、非無念、非尋常、非臨終、非多念、非一念（直明）。唯是不可思議、不可稱、不可說信樂也（結示）。喻如阿伽陀藥能滅一切毒、如來誓願藥能滅智愚毒也（喻示）。

〔校異〕 ①說、『正保』、『明曆』二本はこの説の下に不可稱の三字を重出す。『寛文本』は不可稱の三字不可説の上になく下に在り。

〔大意〕 三心即一を明す正釋は、前に竟りて凡接の下は即ち其の結嘆なり。

〔細釋〕 結嘆の中「凡按大信海者」の六字は上の成一を牒す、不簡已下は正嘆なり。此中二、一に揀示、二に喻如の下は喻示なり、初の揀示の中二、一に直明、二に結示なり、直明の中十一句あり、初の四は所被の機に約し、後の七句は能被の法に約す、初め機に約する中、初の二句は『往生要集』念佛證據門（下本正証）によりて加言し、分ちて二句となす、此は形相に約す。後の二句は『散善義』の就人立信中（六）によりて亦分ちて二となす、此は受法に約す、即ち四不を擧げて以つて衆機を攝す。後に法に約する中、十四非有り、『仰信錄』に分別す、煩雜厭ふべく、祖意に非ざるに似たり。『述聞』は大に分ちて三となす、初四、次八、後二、次の如く聖道、要門、眞門を簡ぶ、『對問』は依準す、今も亦之に従ふ。然に亦一途なり、必しも拘泥せず、上述の義を圖に示せば左の如し。



非行非善とは『末燈鈔』に云く「實號經ニノタマハク、彌陀ノ本願ハ行ニアラス善ニアラスト、佛名ヲタモツナリ。名號ハコレ善ナリ、行ナリ。行トイフハ善ヲスルニツイテイフコトハナリ、本願ハモトヨリ佛ノ御約束トコ、ロエヌルニハ善ニアラス行ニアラサルナリ、カルカユヘニ他力トハマフスナリ」と。『歎異鈔』の文も亦同意なり。即ち聖道要門の如きは、修功を論ずるが故に

行善といひ、今は則ち、唯佛名を持つが故に非行非善といふなり。

非頓非漸とは一念頓悟に非ず、漸次修入に非ず、自力を捨て、願力に歸す、一念に即ち解行修入の域を出づ、故に非頓非漸といふ、已上は聖道門を簡ぶ。非定非散とは、息慮凝心に非ず、廢惡修善に非ず、亂想を息めずして信體明淨なり、故に定散に非ずといふ、非正觀非邪觀とは定善中の別なり。即ち願力を觀知すと雖も、智惠觀察に非ず、故に正觀に非ず、亂心散起して正念を障へず、故に邪觀に非ざるをいふ、非有念非無念とは、『末燈鈔』(三)に云く「選擇本願ハ有念ニアラス、無念ニアラス、有念ハスナハチ色形ヲオモフニツキテイフコトナリ。無念トイフハカタチヲコ、ロニカケス色ヲコ、ロニオモハスシテ念モナキヲイフナリ、コレミナ聖道ノヲシヘナリ」と。この有念、無念は聖道の義を述ぶ、若し觀に約すれば即ち立相住心と無相離念、若し宗に約すれば有相と無相とに當る、次下に又云く「淨土宗ニマタ有念アリ、無念アリ、有念ハ散善義、無念ハ定善義ナリ、淨土ノ無念ハ聖道ノ無念ニス」と。これ淨土門の義を述ぶ、而して有念とは、散心六念の類を云ひ、無念とは定善觀の心境並び亡するを云ふ、斯くこの文に二段の所明有れ共、今非を簡ぶは後段の淨土要門の義に約するものと同す、知るべし。『御消息集』(二)にも亦有念、無念の義を述ぶ、往見せよ、非尋常非臨終とは『往生要集』中末(二)に別時念佛の中に、尋常別行、臨終行儀を明し、俱に法に依りて勤行し、正念にして見佛を期す。然に平生の積習と、臨

終の猛利とは皆これ自力の策勵なるが故に、今之を遮す、非多念非一念とは此の二非は眞門を簡ぶ、必しも要門に通せざるに非ず、且く一途に従ふのみ。この二非を解するにつき異說多し。今謂く、非多念非一念とは乃至十念に望めて大信の自體を顯す、乃至十念の行は多少を論せずと雖も必ず遍數に亘る、故に一多有り、然に大信心の體の如きは則ち一たび得て已後は、初後一貫して體に生滅なし、故に非一念非多念と云ふなり。或は云ふべし、此句は當時の一多偏執の義を兼ねて之を破斥すと。『一多證文』蓋し此義を述ぶ、見るべし。

唯是等とは二に結示なり、『略讚』に云く、「唯是の下は標の拘碍を遮して佛智の不思議に結歸するなり」と、佳し。乃ちこの句は主として上の遣非の文に應じて體の高きことを顯し、次の喻示の文は上の所被の機を明すの文に應じて、用の廣きを顯すなり、喻如の下は二に喻示なり。阿伽陀藥とは『仰信錄』に云く「華嚴音義」廿一に云く阿伽陀藥、阿此云「普、揭陀此云去也、言服此藥者、身中諸病除去也」と、又云く阿無也、揭陀病也、服此藥已更無有病、故名之耳」と、知るべし、智愚毒とは、『略讚』に明教院の義を述べて云く「等覺已還を智と爲し、一切凡夫を愚と爲す、何が故に智を以て亦毒と爲すや、解して云く因位の智は必ず無明と雜はるが故に名けて毒と爲す」と、蓋し従ふべし。

別釋 信樂

〔本文〕然就菩提心有二種、一者豎、二者横。又就豎復有二種、一者豎超二者豎出。豎超豎出明權實顯密大小之教、歷劫迂迴之菩提心、自力金剛心菩薩大心也。亦就横復有二種、一者横超二者横出。横出者正雜定散他力中之自力菩提心也。横超者斯乃願力廻向之信樂是曰願作佛心、願作佛心即是横大菩提心是名横超金剛心也（對判示宗）。横豎菩提心其言一而其心雖異入眞爲正要、眞心爲根本。邪雜爲錯疑情爲失也。忻求淨刹道俗深了、知信不具足之金言、永應離聞不具足之邪心也（結成勸誡）。

〔校異〕①豎、『寛永』『正保』二本になし、②蜜、『高田』『澁谷本』は密に作る。③小、『本願寺本』、『報恩寺本』は少に作る。④之、『寛永』『正保』二本になし。

〔大意〕法義に就いて釋する中二、一に正しく三心即一を明し、二に別して信樂を釋す、初は上に竟りて、今は二に別して信樂を釋し給ふなり。

〔細釋〕此中大分して二段と成る。一に菩提心の義を釋し、二に末卷(七)の夫按已下は信一念の義

を釋す。何を以つて唯此二を釋するやと云ふに『述聞』に云く「何故に二義を釋するやといふに、初は以つて信樂の豊富を顯すが故に。謂く華嚴入法界品に廣く菩提心の徳を嘆するが如し、即ち舊經第五十九に二百十八句を擧げ、新本第七十八に二百二十一句を説く。後は以つて趣入の極要を示すが故に、謂く成就の一念は此宗に斷じて安心の正軌と爲す。『改邪鈔』に彼岸及び血脈の摩説を辨する中の如し」と。蓋し佳し。初の中亦二と成る。一に解義、二に論註已下は引文なり、初中二、一に對判して宗を示し、二に横豎已下は結成勸誡なり、初の中、菩提心とは『大乘義章』第九(大正四四⁶³⁶)に菩提心につきて「釋名辨體」因起次第「就位分別」の三門の分別をなす。其中、釋名の文に云く「發菩提心者、菩提胡語、此翻名道、果徳圓通故曰菩提。於大菩提起意趣求名發菩提心」と。又『孔目章』卷二(大正四五⁵⁴⁹)に之と同一の解釋有り見るべし、有二種一者豎二者横とは菩提心の義は宗に隨つて別有り、『選擇集』付屬章(下^下)に云く「發菩提心者諸師意不同也。天台即有四教菩提心謂藏通別圓是也、具如止觀說。眞言即有三種菩提心謂行願勝義三摩地是也、具如菩提心論說。華嚴亦有菩提心如彼菩提心義及遊心安樂道等說。三論法相各有菩提心具如彼宗章疏等說。又有善導所釋菩提心具如疏述。發菩提心其言雖一各隨其宗其義不同」と。宗祖此文の意を承け、横豎の二を以つて菩提心の義を釋し給ふなり、豎とは聖道の菩提心にして、自力策修なり、横とは淨土の菩提心にして自爾の具徳なり、然るに此處に之を辨する者は義は近く次上の無上金剛心を承

く、今文に「迂廻之菩提心」と云ひ、又「横大菩提心是名横超金剛心」とあるもの見るべし、文は遠く上に引く横川(註)を承く、彼は先に宗家を引き次に『要集』を引く、乃ち菩提心を擧ぐる處即是れ信心の意なることを含む。斯の如きは今文の由つて來る所なり。

又就堅等とは二に釋なり、釋の中二、一に堅、二に横なり、初の中二有り、初は標にして後は釋なり、標は分ちて列ね、釋は合して明す、明權等とは能詮の教を指す、『二卷鈔』上(註)には小乘を四重の外となす、今は之を堅出に屬す、故に大小といふ、蓋し『二卷鈔』は成佛教に約して二雙四重の判をなすが故に小乘を除き、今は自力、他力に約するが故に小乘を入る、或は云ふべし、今文の小乘は生心覺道の廻心の機に約するが故に堅出の中に屬すと。

歷劫等とは堅出の菩提心なり。自力等とは、堅超の菩提心を明す、金剛心とは別して等覺の最後心に就き菩提心の究竟を指す。大心とは即ち菩提心のことにして、此と上の菩提心とは通じて指すなり、『述聞』に云く「自力等といふは、意ろ堅超の法を言ふなり、是の二句は綺して語を爲す、正に是れ自力菩薩金剛大心の謂なり」と、知るべし。亦就横等とは二に横なり、此中に標釋有り、釋の中初に横出を釋し、後に横超を釋す、初の中、正雜定散とは、これ所廻向の行にして上の堅中の二は此中に攝在す、他力中之自力とは横超に簡異す、菩提心とは、願生心を謂ふ、『和語燈』一(註)に云く「淨土宗ノ心ハ、淨土ニ生レント願フヲ菩提心ト云フ」と。見るべし、この中に二、今

は則ち自利の願心、横超等とは正しく横超の大菩提心なり、斯乃等とは正示なり、乃ち菩提心を指して三即一の信樂となす、若し信樂の外に別の願生心有つて、以つて菩提心と爲さば則ち眞宗に非ず、彼はこれ自力心なるが故なり。今は聖道及び要門の菩提心に簡ぶが故に、願力廻向之信樂といふなり。是曰等とは、祖釋を會合す、祖々相承して勉めて信樂を傳ふ、中に於て略して二祖を擧ぐ、初の願作佛心とは南天に據る、『易行品』に若人願作佛と云ふものこれなり、願作佛心等とは上は信樂を指し、今は釋成なり、即ち願作佛心はこれ横の大菩提心なるの義を釋成す、次上は與へて菩提心と云ひ、今は奪つて之を言ふ、故に信樂を指して横の菩提心といふなり、是名等とは終南を會合す、終南の金剛心と名くるは即ち菩提心の義なることを明すなり。

横堅菩提心等とは二に結成勸誡なり、此の一段を釋するに古に二說有り、『略讚』に云く「初は聖淨二門に通じて勸誡し、後に忻求已下は別して淨土門の道俗を勸誡す」と。『述聞』に云く「初は揀示、後は勸誡なり、揀示の中名同意別を明す、雖の字恐く惟の形誤か、化身土に云く難行難修其言一而其意惟異と、思ふべし」と。今謂く『述聞』の如く雖の字を形誤として一段の文を解し去ることは恐く專斷の罪を招かん、故に今は『略讚』の義を是と爲す、乃ち分科して結成、勸誡となす所以なり。横堅等とは初に結成なり、即ちこの中二重有り、謂く言一意異と、意別同致となり。横堅同じく菩提心と稱するも、二力大に其旨を異にす、故に言一意別と云ふ、雖の字は流れて下の句

に及び、以つて意別同致を顯す、大菩提心は、横豎異なりと雖も、所期は同じく佛果に在り、故に入眞爲正要と云ふ、眞とは即ち所契の理なり。又横豎共に不至心を以つて眞理に契ふべからざるが故に眞心爲根本と云ふ。佛法の大海には信を能入と爲す、故に疑情爲失といふ。設ひ、信あるも邪信雜信は亦能入に非ず、故に邪雜爲錯と云ふ。初の入眞等の一句は所證に望め、後の三句は能入を示す。此れ則ち言は二種に通ずと雖も、結成の意は正しく横超に在り、次下の勸誡は乃ち其意を示す、忻求等とは後に勸誡なり、上は通じて聖淨、要弘に就いて結成す、今は則ち上の信樂釋の所引を受けて、別して弘願に約して得失を勸誡し、横超の菩提心に歸せしむ。忻求淨利道俗とは、上は通じて結成すと雖も、意弘願に在り、故に今は則ち上に含む所の意を承け弘願に約して得失を勸誡して餘門の菩提心に簡別す、故に忻求等といふなり、横出の如きは與奪あり、上に辨するが如し。了知等とは信に金言と云ひ、聞に邪心と云ふ、綺互して語を作す、若し具さには、了知聞信不具金言、應離聞信不具邪信と云ふべきなり。聞信不具とは、上下に『涅槃經』の文を引くが如し、この文を釋するに二說有り、一に謂く、聞信不具は俱に要眞を誠むと、一に謂く、聖道及び要門を聞不具と爲し、眞門を信不具足となすと。斯く二說有る中、後義を前後の文に親しとなす、故にこの義を取る、知るべし。

引證

〔大意〕 別釋信樂の中二、一に菩提心の義を釋し、二に信一念の義を釋す。初の中亦二有り、一に解義、二に引證なり、解義上に竟りて、今は引證なり、引證の中二、初は雁門を引き、後は他師を引く。

雁門引意

〔本文〕 論註曰按王舍城所說無量壽經乃至凡釋廻向名義謂以已所集一切功德施與一切衆生共向佛道抄出

〔校異〕(イ)莫不發皆の發皆、現本は皆發に作る。(ロ)無上菩提之心之、『寛文本』になし、(ハ)即是攝取衆生の是、現本になし、(ニ)共向佛道の點、『本願寺本』、『報恩寺本』は「佛道ニ向ヘシメタマフナリト」と點す。

〔細釋〕 引證の中五文有り、初の一は雁門(註下註)を引きて横超の菩提心を證し、後の四は他師を引きて横超の特絶を示す、初の中に二あり、一に正しく菩提心を明し、二に廻向の名義を釋す。初の中に三有り、一に正明、二に簡非、三に結成なり、初の中先づ經の所說を略標し、此無等とは菩提心の義を釋す。是故等とは結示なり、初の標の中、雖行有等とは性徳に約し、莫不等とは受法に約す、乃ち機は差別するも受法は則ち一なり、彼の同一念佛無別道故と意同じ。無上菩提心

等とは、菩提心を釋して願作佛心となし、清淨願往生心を淨土の菩提心となす、『論註』の所謂一心願生これなり、問ふ、何を以つてこの菩提心はこれ他力の信心なることを知るや。答ふ、『註』の初に易行道を顯して、「但以信佛因縁」と云ひ、讚嘆門の註に三信を以つて如實修行と成す、されば今何ぞ通相難發の大心を談せんや。卽是願作佛心とは、他力の願生心なること知るべし、和讃に云く「淨土ノ大菩提心ハ、願作佛心ヲス、メシム、スナハチ願作佛心ヲ、度衆生心トナツケタリ」と。聖道の菩提心と異り、淨土を標して、願作佛心と云ふはこれ願往生心なり、願生と云はざるは語を初祖に取りて菩提心の言に便するが故なり、是故に願作佛心の語は信相に約するを義の正と爲す、而して亦度衆生心を伴ひ、信徳の義を兼ね、卽是度衆生心とは、利他の大心に名け信の具徳に約して此名を擧ぐ、徳ありて具するものは佛の廻施に由る、故に和讃に「度衆生心トイフコトハ、彌陀智願ノ廻向ナリ、廻向ノ信樂ウルヒトハ、大槃涅槃ヲサトルナリ」と云ふ、これ本に歸して智願の廻向と爲し給ふなり、卽是攝取等とは、信徳顯現の上に就いて通相の度生に異なることを顯し、淨土に往生して早く佛果を得、還つて一切を化せしむ、これを不共の度衆生心となす、此句は和讃の度衆生心の釋に準すれば亦當に約佛の義あるべし、是故等とは結示なり、文は知り易し。

問ふ、三輩の菩提心を釋するにつきて、雁門、吉水、其義の相違するものは如何。答ふ、『六要』

三本(註)に云く、「雖有異義且一義云、大經說相順常途說、聖道諸教皆談發心得道義故、觀經之中說未發心皆得往生由佛力故」と。述聞に云く「經文多含なり、念佛と菩提心に卽と離の二義有りて存す、卽とは念佛を全うして菩提心と爲す、卽ちこれ信心なり、離とは、菩提心、念佛の外に在り、卽ちこれ餘行なり、二義有りと雖も、而も弘願中の差別なり、兩祖各々一義に據る、乃ち取捨に異有るなり、而して意互に通じてこれ有り」と。又『摘解』に云く「雁門は『大經』の當義に依り、論の意に順じて信徳を顯はすが故に、吉水は『觀經』に準釋して疏意に順じて廢立を詳にするが故に」と。蓋し更に考ふべし。

若人發等とは次に簡非なり、卽ち樂の爲に但だ願するものは生を得ざることを明す、亦當不等の亦につきて『仰信錄』に云く「亦とは名聲功德の註に云く、但聞彼國土清淨安樂尅念願生、亦得往生と。爲樂願生に得、不得あり、今は菩提心を明して、其の不得を簡ぶ、弘願の機の如きは爲樂願生なりと雖も、菩提心を具するを以つて亦往生を得、例せば、下品の人、無生の理を知らずと雖も、一たび彼土に生すれば見生の火自然に滅するが如し、今も亦此の如し、弘願の信心なれば、機に上下の別ありと雖も、皆菩提心を具せざるはなし、下品の機の如き、尅念して願生すれば、卽ちこれ願作佛心にして自ら度衆生心を具す、これ他力の然らしむる所なり、今は不得と云ふは暗に亦得の人あることを示す、故に引きて具徳の義を影顯するなり」と。蓋し好し。是故言等

とは後に結成なり、若し菩提心を具せざれば往生せざることを結成するなり、住持樂等とは二に如來の廻向を明す、中に於て住持樂の釋は、果を以つて因を推さしむ。謂く彼土の樂果既に本願力の住持する所、其因何ぞ自力の修造ならんやとなり、乃ち願作佛心はこれ如來の廻向なりと知らしむ、度衆生心は自ら此中に含む。後の廻向釋は當相に菩提心はこれ佛の廻向なるの義を證するなり、註文は約束の廻向なれども、今は約本の點聲を施せり、蓋し次上の文意に依り給ふなり、引きて以つて上の願力廻向の信樂の言に應ずるなり。

他師引意

〔本文〕元照律師云他不能爲故甚難、舉世末見故希有。乃至。但使疑愛二心了無障礙則淨土一門、未始間隔彌陀洪願常自攝持必然之理也已上。

〔校異〕(一)元照の小經義疏(大正三七³⁶³)の文、(a)第一文、校異なし。

(b)第二文、イ豪賤の上本文は不擇の二字有り。(ロ善惡の上、同じく不撰の二字有り、ハ世間甚難の世間の上、本文は一切の二字有り。

(c)第三文、イ爲難也、及び下の爲二難也の爲、共に本文になし。而して初の難の上に本文は一の字有り、又爲二難也の也の下數行を乃至す。

(二)用欽の文(本據未考)

(イ)反掌乎の乎、一説に手の形誤とも云ふ、(ロ)凡淺は諸本「凡ソ淺キ」と點すれ共、本文は「凡淺」と熟字するの意味か。

(三)聞持記下(淨全六⁶⁹⁶)の文

(イ)利鈍の利、『明曆本』に刹に作るもの形誤、(ロ)強弱の弱、『寛永前本』は醜に作るもの形誤、(ハ)猛信の信『寛永本』に之を脱す、(ニ)下品中生の中、本文は下に作る、但し地獄の衆火の文は『觀經』下品中生にあり、故に中に作るを正しとす。(ホ)二惑の二、記の文は三に作る、惑の字、『正保』、『明曆』二本は或に作るもの形誤、(ヘ)醜賣の醜、本文は醜に作る、(ト)止由十念の止の下、『寛永本』は人の字あるもの過剩、(チ)阿彌陀等の三十二字、『聞持記』の引文中に在るもの疑ふべし、記の前後に此語なし、一説に所覽の記に此衍文有りしならんと云ふ。

(四)樂邦文類五(大正四七²²⁸)の文

(イ)或寡矣の矣、『寛永』、『正保』二本は細書す、(ロ)曾未聞等の點、『本願寺本』、『報恩寺本』は今の如し、原文は「曾テ未ダ自障自蔽ヲ以テ説ヲナスモノアルヲキカズ、因ツテ以ツテ之ヲ言フ事ヲウ」と讀むべきか、(ハ)莫若疑の疑、『述聞』に癡の形誤とす、(ニ)但使等の點、原文は「但タ疑愛ノ二心ヲシテ、了ニ障礙ナカラシムレハ、則チ淨土ノ一門未タ始ヨリ間隔セス」と讀むべきか。隔、『寛文本』

は扁を手に作るもの形誤。

〔細釋〕二に他師を引きて横超の特絶を示す、乃ち所信の殊勝なることを顯せば、能信の超絶すること自ら顯る、亦これ菩提心の義を助證するに外ならざるなり。以下に四文あり、中に於て、元照を正とし、餘を助顯とす。元照は『彌陀經義疏』の文なり、疏文に對見するに前後錯綜せり、これ云何と云ふに『六要』三本(行)に釋して云く「問後釋是爲初釋次詞尤可相隣承前下爲次釋末詞是顯實文。何共不加一具文段各隔別文前後引耶。答誠似難思、但加推義先初文者甚難希有之經文中含此二難是故疏主於其科下有此解釋而第一難是佛自利、第二之難是佛利他、其利他者說此一切世間難信念佛是也。是故五濁惡世成道唯是爲說此難信法爲顯此義說法難下故被加歎、次顯實文學前二難下相次有便可思擇之」と『樹心錄』に云く「前後するは義に従ひて便宜抄要するなり」と、『述聞』に云く「集主の所覽に蓋し異あるのみ」と。今謂く前後錯綜するは隨宜轉用の爲なるべし、初の文は「能爲甚難希有之事」を釋す、甚難、希有に自ら成佛、說法の二難を含む、他不能爲はこれ成佛の難にして、舉世末見とはこれ說法の難なり、次の文は難信の法を釋す。上に成佛、說法の難を明し、これを能説と爲す、今は則ち念佛法門を所説と爲す、中に於て念佛法門等とは機品を簡ばざることを明し、唯取等とは別して惡機に就いて示す、決誓猛信等とは作得生想、決定深信を言ふ、臨終等とは下品の生相を示す、此乃等とは此の法の最勝を結す、後の文は前の二

難を承けて信受を勸むるの文にして、これ初釋の連文なり、然るに後に安するは以つて結勸と爲すなり、此二難を舉げて諸佛所讚の虚しからざることを顯す、謂く釋迦は自ら此難信の法を行じ、成佛して此法を説く、豈に不虛ならざらんや、須く信受すべしとなり。已上は一義によりて解す。或一義には第一文は成佛の難、第二文は說法の難、第三文はこの二難を結ぶとなせども、今はこの説を取らず、知るべし。

次に律宗の用欽等とは『超玄記』の文なれども現本を検せず、已下の二師は元照を助顯す、此の上の文の念佛法門の甚難信なるの一段を釋す。中に於て用欽は大意を辨じ、戒度は文句を釋す。良以等とは上の具縛等の意を辨ず、刹那超越の法なるが故に、轉凡等といふ、易行の至極なるが故に大爲容易といふ。衆生疑とは難信の意を示す、乃ち淺近の衆生多く疑惑を生ず、愈々以つて易行の法なることを顯す、故に『大經』を引きて難信を證するなり。

聞持記等とは戒度の釋文にして文は解し易し。この一段校異を參照せよ、阿彌陀等の三十二字は記の現流本になし、『樹心錄』に云く「恐く衍ならん」と。『頂戴錄』に云く「高祖之を加へて成上起下す」と。『述聞』に云く「蓋し異本有るか」と。今謂く已上の諸說の中、『述聞』の説、是に近し。

後に樂邦文類等とは、柏庭善月は無爲子と號して樂邦文類の後序を作る、之を引きて、元照を引く中の「屠沽下類刹那超越成佛之法」の最勝法なることを助顯し、以つて結勸に充つるなり。此

文難解にして古來、多説有りて是非判じ難し、其の中に於て『仰信録』の説、化較的に要を得たり。今試に一説を述べん。初に修淨等とは古師の淨土法門に於て自行化他するに其實を得る者の甚だ希なることを明して、以つて超世不共の法なることを表す、未聞等とは自障自蔽のもの此法を説くものあるを聞かず、自障自蔽の失なく、其門其要を得るもの能く淨土を讚するの言をなすことを得るといふなり、夫自障等とは障蔽の體を出す、但使等とは愛疑を以つて妨とせずして能く攝持するものは唯彌陀の洪願のみなる事を明し、以つて前の其門其要を得る者の希有なるは是れ願意を得ざるに在ることを示すなり。疑愛とは『一滯録』『頂戴録』『略讚』等は見思の惑とし、『述聞』は煩惱所知の二障とし、『對問記』は六煩惱中の二とす、更に考ふべし。

已上祖釋を措いて他師を引き給ふは云何と云ふに『述聞』に云く「蓋し人情に逗するが故なり、謂く此上の説は殊勝は則ち殊勝なれども、他人をして之を議せしむれば則ち未だ其の如何を知るべからず、乃ち爲に靈芝、柏庭等の言を擧示して、以つて信向せしむるなり」と。佳し。

尾 題

〔本文〕 顯淨土眞實信文類三本

〔校異〕 『本願寺本』、『報恩寺本』、『高田本』にはこの題號なし、蓋し信卷を本末に分たざるが故な

り。本の字、『寛永』、『正保』二本は細書す。猶はこの二本には卷末に一紙を添へて奥書を刻せり、見るべし。

本典研鑽集記 (上卷) 終

本典林國政編 全一巻

本典林國政編 全一巻 一巻全一巻 一巻全一巻

741
11

